
Coloring envelopes

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Coloring envelopes

【Nコード】

N7307K

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

県立北高二年、虎野閑歩。普通の高校生、というにはあまりにも秘密の多い（たぶん）17歳。中途半端な「超能力者」（一応）である彼は、高校二年になる前の春休み。「上司」であり「育ての親」である立花さんから、淡い桜色の封筒を受け取る。その中身は、彼を「世界を終わらせてしまいかもしれない少女」に関するあらゆる出来事へ放り込むものであった。がしかし、その時の彼はまだ、「普通の日常」を変わず送れるものだと思っていた……。オリジナルキャラばかりが活躍する、「涼宮ハルヒの憂鬱」の世界を別視

点から描いた形の二次創作小説です。
長期停止しております。

現在作者都合により更新は

～人物目録～

Coloring envelopes ～人物目録～

オリジナルキャラのみの紹介です。

主人公

・虎野とら閑歩いずほ 通称・しずくん

県立北高校の二年生。クラスメイトは鶴屋さん・朝比奈みくるなど。完全に日本人の名前だが、実はスウェーデン人。そのため、髪の色は金色。両親の消息は不明であり。幼いころから立花さんとおやっさんに育てられる。ちなみに育ちはフィンランドの山奥。

語学が堪能であり、常用語は日本語（立花さん、おやっさんが育てるとき使ってたから）だが、他に英語・フランス語・ドイツ語などを解する。しかし、それは学校では隠している。

数学も得意で、学校の成績は良好。しかし、化学だけはどうも好きになれないらしい（原因は不明）。

物心つく手前から立花さんに武術（ストレス発散の相手）を叩き込まれ（やらされ）ていた。おかげで、ずいぶん体術に優れ、ナイフの扱いにも長ける（常にベルトの裏に護身用ナイフを隠し持っているのは秘密である）。が、それも学校では隠している。

性格は非常に穏やか、社交的ではないが、閉鎖的な人間関係では決してない。かなり包容力があり、めったに怒らないが、その反面、恩義や義理を重んじ、それを軽んずる相手や行為に対しては、すぐに激昂するところもある。

いろいろ周りに隠しているがゆえに、人と接するのがどこか後ろめたく思っており。あけっぴろげ（？）で誰にでも明るい鶴屋さんにはあこがれている。唯一金髪をまったく気に話しかけてくれたのが彼女だったということもあり、ささやかな恋心を抱いていたりいなか

ったり。

実は中途半端な超能力者であり。涼宮ハルヒの作り出す閉鎖空間に入ることは苦もなくできるが、神人を倒すための能力が中途半端。閉鎖空間内においても、古泉がカマドウマ戦でみせたバレーボールくらいの大きさの赤い玉しか出せない。そのため、あらゆる点で古泉に劣等感を感じている。

古泉の「機関」とは敵対的であり。直接対決することはないもの、お互い敵視している。

ただし、超能力的な能力以外の基本スペックはかなり高い。料理・掃除・洗濯の家事全般はもちろんこなし、立花さんの娘・明の育児も担当するほどの家事上手。そこに学校の勉強と「仕事」が加わるわけだが、そんな日常をやりくりする超人高校生。

家事全般をそつなくこなし、育児もやって、髪が女みたいにサラサラで、肌も白いほうなので、鶴屋さんから「女の子？」といわれている。言われてる本人は微妙な心境だとか。

かなりの苦勞人だが、本人はそこまで苦に思っていない様子。

・立花さん（たちばな）

しずくんの「仕事」上の上司で武術の師範（一応）で名付け親で育ての親。

外見はどう見ても20代、声が40代越えたくらいのおばさんという。いいんだかどうか知らないギャップを持つ不思議な人。常にでかくてこついサングラスをかけており。屋内屋外かわからずかけているが、その目的はよくわかっていない。

古泉やしずくのような超能力者ではなく、正確に言うならば「超人」。

視力が異常に発達しているらしく、本人曰く「見えちゃいけないものさえ見えるのさ」らしい。

正確に測ったデータはないそうだが、動体視力も危ない値らしく、銃弾すらかわすことができる（らしい）。

常識はずれな目を持つだけに、常識はずれな人で。武器を常に持ち歩いたり、突然「出かける」といって、3カ月かそこいら行方不明であることもしばしば。

明の実際の母だが、明の父親のことを明言することはなく、不明。謎が多く、ミステリアスな人だが。その実やさしく、頼りになる。その一方、育ての親としてしずくに厳しくあたることもある。

「仕事」で世界を飛び回っているようだが、具体的に何をしているのかはまったく不明である。

・おやつさん

しずくん・立花さん・吉野の親分的存在。しずくんの育ての親でもある。

立花さんを育てたのがこの人であるらしい。実年齢不明、あごに残る無精ひげとスキンヘッドがトレードマークの、ぱつと見ただのおっさん。

日本で、しずくん・明と共に生活しており。しずくんが学校に行く間の明のお守り役。

家事全般をしずくに一任しており、本人は一切何もしない。たまにネットやったり、テレビ見てたり、明に無精ひげいじられたりと、自由人みたいな生活を送っている。

しかし、やることはしっかりやっているらしく。時として、立花さんを動かして色々と画策させているらしい。さらに、暇人のようだが意外と武闘派で、しずくんにはかなわないが、なかなかの体術の使い手。銃器の扱いにも長けるらしい。

立花さんと同じく「超人」であり、聴覚が異常に発達しているらしい。本人曰く「聖徳太子の真似事くらいは軽くできる」といつているが、試したことがあるのかどうかは少し疑問である。

語学に長じているらしく、英語はもちろんのこと、32カ国語を完璧に話せると言う。どうやらこれは事実らしい。

立花さんと同じくミステリアスな存在で、実名さえ不明だが、し

ずくんは父親的存在として受け入れており、とくに違和感はない模様。

時として重い発言をする、しずくんたちの親分である。

・吉野 華恋よしの かれん

しずくんと共に、立花さんとおやつさんに育てられた。しずくんと同世代で、感覚的には幼馴染というより兄妹。

しずくんと対照的で、かなり熱い性格で男勝りであり、意外と短気。男の口調でしゃべるため、かなり荒っぽい性格のように捉えられがちだが、意外と繊細。

れっきとした女だが、家事は壊滅的である。しずくんからは「皿洗いすら任せられない」という評価をもらうほど。

乗り物全般に関して天才的な能力を発揮する。特にバイクに関しては、かなりの運転技能をもつ。他の乗り物に関しても、すぐにプロ並みに乗りこなす。

立花さん・おやつさんと同じく「超人」であり。嗅覚が異常に発達している。本人曰く「犬の1000倍」であるらしいが、犬の嗅覚自体が「人間の1000倍」とかなりあいまいなのでよくわからない。

しずくんをライバル視する一方、尊敬の念を抱いている。しかし、持ち前の男勝りな性格と、包容力がありすぎて（吉野視点からだ）ヘタレてるようにしか見えないしずくんへのイラつきで、つつけんどんな態度ばかりとってしまう。だが、根は純粋な女の子。

くしゃみが持病（？）であり、それを抑えるためか、何かの薬を常用している。

日本に住んではおらず、本拠地であるフィンランドの隠れ家で留守を守っているため。めったにこないが、たまに來たりする。

・立花 明たちばな あかり

立花さんの実の娘。しずくんに優しく育てられ、すくすく成長中。

3歳にして、身の丈くらいの長さの美しい髪の毛が生えてきており。おやっさんが「立花と同じだな」といつている。

立花さんが実の母なのだが、留守であることが多いので、しずくにすくなくついている。

行動のところどころに、何か不思議なことを感じることもあるが、それ以外は普通の子供。

立花さんの娘だけに、何かを秘めてそうである。

・中田 なかた

しずくんたちのクラスの学級委員長。しずくんの親友的な存在である。社交的で、人間関係が広く、それでいていやみや人の悪口などを言わないさっぱりした性格。しずくんの金髪にもそれほど違和感なく接しているので、仲がいい。

話のわかる男で、人が言いたがらないことを掘り下げて聞こうとしない。そこがまたしずくと仲がいい理由らしい。

最近では珍しく紳士的とも言える人間である。

一応、完全な一般人。

・中西 なかにし
唯 ゆい

お嬢さん高校・光陽園高校の一年生。

ふとしたことでしずくに接触し、自らの正体を明かす。

やたらハイテンションな元氣娘で、短めの髪をツインテール風にしている髪型がトレードマーク。

「みんなを仲良くさせるのがわたしの役目なのだっ！」が口癖。馬鹿っぽいしゃべり方としぐさだが、頭脳は平均以上。だが、やっぱりどこか抜けている。

その正体は……？

プロローグ（前書き）

当小説は「涼宮ハルヒの憂鬱」の二次創作小説、というより、世界観引用のただのパクリ小説とすらいえそうなところもあります。

さらに、原作に登場するキャラクターたちの出番は圧倒的に少なくなっており。その原作のキャラが主役級であればあるほど、登場頻度は少なくなります。

ハルヒとキヨンのからみや、長門の大活躍などが見たい方には適さない仕様となっています故、ご了承ください。

特に序盤にかけて、原作キャラはまったく登場せず。オリジナルキャラしか登場しません。原作キャラの本格的な登場は中盤からとなっていますので。その点もご了承ください。

以上の点を踏まえてお読みください。

この拙作を楽しんでいただければ幸いです。

ブログ

俺がその人のことについて覚えていることは、ほとんどない。

なぜならその人はたまにしか帰ってこなかったし。

自分の子供の世話さえ俺に押し付けるほど多忙な人だったからだ。

だが、俺はその人が何をしていたのか、かなり後になるまで気が付かなかった。

それに気づくまでの間。俺がその人に持っていた印象というのは。

仕事用の封筒ですら、カラフルに色分けする。オシャレな人だった。ということぐらいだろう。

気象予報士がテレビで、桜の開花がどうのこうのといい始めた頃。

最初のそれが、桜色の封筒で届けられた。

まるで桜の花で作ったのかと思うほど、色鮮やかな桜色で。

…
…

低いうなりを上げて飛び立つ飛行機が見えた。

滑走路をすばやく移動し、一瞬、もしかして飛ばなかったりして、とか思った刹那、それは金属の巨体を雲一つない青空へと運んでいった。

飛行機を見るといつも思うのだが、どうもあの金属の巨体が空を飛ぶ、というのが不思議でたまらない。いや、なに、決して原理が分からない訳じゃない。だが、どうもこうやって見てるとどうも信じられないのだ。別に航空力学にけちをつけるつもりじゃないが、目で見てると、どうやってあのどでかい機体を飛ばしているのか

まことに不思議だ。あんなのが飛べるんだから、人だって飛べるだろうとか思えてくる。

まあそんな事は、電子レンジでものが温まるのが信じられないとか、電気はどうして物体を伝導していくのか信じられん。と言うようなものと同程度のどうでもいい事なのだが。

世の中つてもんは案外、訳のわからんもんで回っていたり変わったりするから、こういうアホな疑問も持っていたほうがよかったりするかもしれない。

なぜそんな事言うのかって？ なぜなら、俺たちは次の瞬間には180度常識のひっくり返った世界にいるかもしれないから　　さ。
一人の少女によってな。

閑話休題。今はそんなことどうでもいい。

どうもいつもの癖で、どうでもいい時にやたらとこういうことを考えてしまう。

もちろん、これ自体は、これからの「仕事」にかかわることなのだが…。今考える必要はない。

そう思いながら、俺はまたいつもの癖で前髪をいじった。眉を完全に覆いつくすそれを、人差し指に巻きつけ、離す。そしてまたそれは俺の眉を覆い隠す。

目線をすこし上に上げると、薄い黄色のそれが見える。…この国で

は特に異質な、金髪、ブロンドヘアというやつが俺の髪の毛である。

誤解を与えないために言っておくが、染めて金髪にしているわけでは断じてない。これは地毛なのだ。ホンモノの、髪の毛の根っこから真正銘の金髪だ。この国では金髪の間人は異常に悪い第一印象を与えるから、初対面の人間には特に勘違いされるが、勘弁して欲しい。誤解を解こうにも、一目でこちらを不良とみなされてしまうのだからやりきれない。

そんなことより、だ。

俺は左手に視線を持っていき、安っぽい人工革のベルトを持つ、安っぽく時を刻む腕時計をのぞきこんだ。

時計の針は、そろそろ待ち合わせの15分前をさしていた。

そろそろ指定の場所に行ったほうがいいと判断した俺は、滑走路を見下ろす空港の屋上から失敬させてもらうべく、建物の入り口へと向かった。

そんな俺を見送るかのように、背後でまた飛行機が飛び立った。低いうなりが、やたらと腹に響いた気がした。

「えーと。ヘルシンキ発の便は……どこだ？」

15分後、俺は見事なまでに迷子になっていた。

もともと俺は、人の多いところは苦手だ。いくら帰国ラッシュではない時期の国際空港とはいえ、それなりに人は多い。

そのせいで言い切れるかどうかはわからんが、だが確実に迷っていることだけは確かだ。

もしかすると、俺って方向音痴なのか？

だが、俺は雪山とかだと別に迷わないんだ。山道とかもな。そう考えると、やっぱり俺が迷っているのは人が多いせいだ。うん、そうだ、そうに違いない。

そう自分に思い込ませながらも、いつまでも迷っているのも埒があ

かん、とそろそろギブアップしようと決心した俺は。サービスカウンターはどこかと空港のパンフレットを広げ、行くべき方向を決めて顔を上げた。そのとき思わず、

「あっ？」と声を上げた。いや、正確には「わっ？」に近かったかもしれない。

顔を上げたすぐそこに、探していた顔があった。

正確には、パンフレットをのぞき込む俺の目の前に、腕を組みながら仁王立ちしていた。

その人は、長い黒髪をなびかせ、その髪がよく映える白い肌を持つ、美しい人だ。スタイルもよく、体によくフィットした感じの黄色のハイネックシャツがこれ以上ないくらい魅力的な体のラインを表していて、少し古臭い感じもするジーンズがそのラインを引き継いでいた。

黒くて小型のキャリーバックを引き、どこかのモデルがお忍びで目立たないように旅行に行ったのかとすら思うその人がいた。

さらに、やたらとこつくてでかいサングラスをかけているのだから、余計そういう風に見える。

「相変わらず、人の多いところはダメかい？」

その人が、俺から空港のパンフレットを取り上げて、言う。

外見はかなり若いのだが、声はかなりおばさんくさい。

三ヶ月ぶりを見る、変わらない外見のギャップに、俺はなんだが安心する。

が、その人はちょっと機嫌が悪いようで、パンフレットを俺につき返すと、黙って自分の腕時計（どっかのブランドものの腕時計だ、重厚な感じの）を指差した。

時計の針は、待ち合わせ時間の3分後をさしていた。

こんな時、その人に「たかが3分の遅れじゃないですか」と言うてはいけないということを知っている。

だから素直に謝った。

「遅れてすみません、

立花さん」

俺がそういうと、その人はうんうんとうなずき、満足そうに「よろしいっ」といった。

そして俺にキャリアバックを押しつけ、一気に身軽になったその人は「じゃあ、行こうか」と言い置いて、タクシー乗り場目指して歩いていった。俺は無言でついていく。

俺にしてみれば、いつものことである。

小型のキャリアバックにも関わらず、やたらと重いのもいつものことである。

だからこの先も、そんな「いつもの事」がずっと続くと思っていた。

そうであって欲しいとは思わないが、そうだろうなと勝手に思っていた。

俺はこの先、いやというほど思い知らされるのだ。

世の中、本当に訳のわからんもんで回っている、という事を。

「おい、大丈夫かい？」

声だけ聞けば40代くらい、外見だけはどうみても20代もギャップを持つ不思議な人　立花さんが、黒塗りのタクシーの横に立ち、俺に声をかける。

そのころ俺は、小型なのにやたら重いキャリアバックを相手に悪戦苦闘していた。いくらなんでも重過ぎる。点字ブロックさえ満足に越えられない。ダンベルでも詰まってるんじゃないだろうか。

やむを得ず、力任せに引っ張って、かなり強引に点字ブロックを越えた。

これだけ苦労して点字ブロックを越えたのは、歴史上俺くらいじゃないか、となんとなく思っていると。

「おやおや、丁重に扱っておくれよ？爆発すつかも知れないんだからさ？」

と後ろから立花さんに言われた。

俺はその場に凍りついた。

恐ろしく重いキャリーバックの中身が、透けて見えたような気がした。

なるほど、中身が爆弾の類なら、重いのも納得できるな、といやに冷静に感心してる俺を発見したころ。

立花さんがぷつと吹き出し、「爆発しないから安心しなよ」と言っただ。

あなたが言うのと冗談に聞こえないんでやめていただきたい。

普通ならばつまらない冗談ですむところだが、立花さん相手だとそうもいかない。

この人、けっこう危ない人である。

銃火器の類はけっこう普通に持ち歩いているし（どうやって持ち込んでるのか知らんが）、ナイフを持っていない時は記憶をどんなに探ってみても思い当たらない。

一番怖かったのは、ジーンズのベルトに手榴弾を普通にはさんで街中を歩いていたときである。

さすがに俺がやめてくれと懇願したため、それ以来はやっていないようだ。キャリーバックの中身が手榴弾だらけだったとしても、立花さんならやりかねないと俺は思っている。

だが、こんな危ない人でも、俺の仕事上の上司で、武術の師範で、名付け親で、そして育ての親なのだ。

勘弁してくれよ、とは思うが、頭が上がらないのは確かである。

だが、俺がこの人にある種の尊敬を抱いているのもまた確かだ。

危ない人だが、いつでも優しいし頼りになる。子供のように無邪気だったり、時として阿修羅のようになったりする。

気をつかってないようで、実は裏でもものすごく気をつかったりとかもしてくれる。身近に接していると、表情といい仕草といい、色々なものを見せてくれる楽しい人でもあるのだ。見ていて飽きないとは、こういうことを言うのだと思う。

と、俺が思いを巡らせていると、立花さんが怪訝そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「なんだい？ぼーっとして？どしたのさ？」

あわてて「いや、なんでもないですよ」と応対した俺をどう思ったのか、「ふーん？」と立花さんは首をかしげた。ていうか、顔が近いです。サングラス越しとはいえ、近寄って見つめられるのは苦手だ。

「ま、そんならいいけどさっ」

と言いながら立花さんは、俺からキャリアバックを受け取ると、それをいとも簡単に持ち上げ、次の瞬間タクシーのトランクに放り込んでいた。

「さっ、行こうか」

満足そうにそう言いながら、立花さんはタクシーに乗り込んだ。いったいその細い体のどこにそんな力があるのだろうか？

俺は引きずるのにさえ苦労したキャリアバッグを、どーして軽々と持ち上げられるんだ？

そう疑問に思うこと、それも、いつもの事。

タクシーに乗り込む寸前に、ふと見上げた春の空は。雲一つない、いつもの空だった。

少なくとも、このころまでは。

「こっちに来て、もう何年になるんだい？」

タクシーが空港を出たところで、立花さんが質問してきた。

「えーと…、住み始めたのは、一年半前くらい…ですね」

そう答えると、「ほあ、もうそんなになるかあ」と立花さんは感慨深そうに言った。声や口調は、近所のおばさんと相違ない。

それより前から散発的に日本にくることはあったが、こちらに住居を移したのは一年半くらい前のことになる。

「そうかあ…しずくんももう高校2年生だねえ…ちゃんと勉強してるかい？」

「そりゃまあ、ほどほどにです」

「そーかい、あたしは学校ってところは行ったことがないからねえ…」。

日本の学校はどうだい？」

「いいところですよ、締め付けが強いわけでもなく、放任主義って訳でもないんで、快適です」

事実、髪の毛のこと以外については、特に学生生活に不自由は感じていなかった。

その後は、学校についての話が盛り上がり、しばらくぶりの会話を楽しんだ。

しかし、俺は少し意外だった。

立花さんが日本に来るのは3カ月ぶりで、それもそう珍しいことではない。

去年　つまり、俺が高校一年生の時も、こうやって空港まで立花さんを迎えに行くことはしょっちゅうあった（どうして迎えに行く必要があるのか知らないが）。

それでも、俺の学校について聞くことは今までなかった。

いつもは、つい伸ばしっぱなしにしてしまう俺の髪形についてうだうだ言ったり。食費は月いくらぐらいでやりくりができるのか、とか、あとは自分の娘の様子についてたずねるのが常であった。

立花さんの娘は、名を「明」と書いて「あかり」と言い、今年で三歳になる。ちなみにお守り係（育児係か？）は俺の役目で、日本に来てからというものの、明の世話をしながらの学生生活である。

不便を感じたことはあるが、不満はない。

立花さんは俺を育てた、だから俺は明を育てる。

そういう理屈だと思っていたからだった。

そんな風にぼんやり考えていたときだった。

たまたま赤信号で止まったタクシীর車内が、いつの間にか無言になっていた。

その沈黙は、突然やってきた。さっきまで立花さんが話していたが、急に口を閉ざしていた。

腕と足を組んだ状態で、立花さんは押し黙っていた。

車内でもはずさないごついサングラスが、いやに迫力があつた。

信号が青になったのか、タクシーが走り出した。

しかし、立花さんは黙ったままである。

さすがに、何かおかしいと感じた。

なぜ黙っているのか、わからなかった。

沈黙は、続いた。

今まで立花さんがここまで黙ったままとすることはなかった。

それだけに、重い。

タクシーが、もう一度赤信号で止まった。

目の前の交差点を、大型トラックが通り過ぎた。

黒い排ガスが、交差点の中央に舞った。

排ガスが空気と同化して、色がなくなる。

その時だった。

立花さんが、口を開いた。

「封筒、出して」

短い、一言だった。

タクシーが、動き出した。

俺はその声から一拍遅れて、自分のズボンのポケットを探った。

取り出したのは、桜色　そうとしか例えられない色の封筒である。細長い、クレジットカードの使用料明細とか入ってそうな大きな封筒。

中身は、一枚の紙と、もう一つ。一回り小さい、やはり桜色の封筒であった。

一回り小さいほうの封筒は、大きい封筒よりもさらに鮮やかな桜色をしていた。

「手紙は、呼んだかい？」

俺はうなずく。なぜか、声がでなかった。

封筒に入っていた紙には、素っ気なく「この封筒を常に持ち歩くこと、ただし、小さいほうの封筒は開かないように」とだけ書かれていた。

立花さんは、腕を組んだまま、封筒を持っている俺の両手を一瞥した。

そして、「まじめだね、しずくんは」とつぶやき、袖のあたりを探り始めた。なぜか、立花さんは悲しそうな表情をしていた。様な気がした。

どういう手品か知らないが、（ハイネックシャツの）袖から小さい刃物を取り出した。

それを俺に差し出し、「封筒、開けてみな」と言った。

ペーパーナイフを使う必要があるのかどうかは疑問だったが、ありがたく使わせてもらった。

中に入っていたのは、4枚の紙。

それぞれに違う顔写真が貼り付けられており、履歴書のような感じで、個人情報書が書かれていた。

それこそ、それぞれの人物に見せたら「どうしてこんなことを知ってるんだ？」というに違いがないことが書かれている代物であった。俺は、それを無言で眺めていた。そんな俺に、立花さんは重苦しそうにこう言った。

「それが今回の、『リスト』だよ」

『リスト』とは、俺たちが仕事上使うもので、「仕事」に関係すると思われる人物の情報のことである。またはそういった人物をまとめた名簿のようなものもそう呼ぶ。

俺は、『リスト』を渡される事はどういうことなのか、よく知っている。

俺にも、「仕事」が与えられる。ということだ。

何をするのか、具体的なことはまだわからない。だが、とにかくそついうとだ。

重い。

4枚の（履歴書のような）『リスト』がやたらと重い。

俺は、もう一度、その4枚の紙に貼り付けられている顔写真を見た。

目に入る、四人の顔。

2人はすでに知っている顔で、もう2人はまったく知らない顔だった。

高校二年生となる、少し前の昼下がり。雲一つない、いつもの青空の下の出来事だった。

そしてふと思う。

俺は、もしかすると。

最初から「普通」のいつもどおりを過ごすなんて。

許されなかったのかもしれない、と。

本当に、ふと、そう思った。

＼桜色・第一章＼

Coloring envelopes 　＼桜色・第一章（１）＼

春といえば、日本は桜らしい。

どこに行ってもこれ見よがしに咲く桜色の花びらが、それを証明する。

初めて桜を見た時は、この淡い色に心を打たれたものだ。

俺が育った雪山では、こんなきれいな花を咲かす木なんてなかったからな。

個人的には、ひらひら落ちてくる花びらが好きなんだが。まあそれはいいだろう。

そして俺は、目の前にそびえる桜の木を見上げた。

樹齡が何年か知らないが、なかなか立派なこの桜の木は、他の桜の木と同様に枝いっぱい桜色としか言いようのない花びらをつけていた。

その無数の桜色の中から、ひらつと、小さな桜色がはぐれた。

ひらひらと、ほんのわずかな風に揺られるその桜色は。まるで最初からそこに着地しようとしていたかのように紺色の布に乗った。

紺色のブレザーを着る俺の肩に、小さな桜の花びらが乗った。俺はその花びらをつまみ上げ、じっくり観察してやる。

消えてしまいそうなくらい淡い桜色にすっかり見とれた俺は。何とかこれを保存する方法はないかとあれこれ考えた。

結果、良案は浮かばなかったものの、とりあえず食品みたい、ジップロックにでも入れとけばいいんじゃないだろうか。と思い立ち、ひとまずその場では、花びらの形を崩さないように生徒手帳に花びらはさんでおいた。

『県立北高校』と記されたその手帳を胸ポケット時。ふいに背後から怒号が飛んできた。

「こらあ！虎野お！お前まだそんな髪の色で学校に来とんのかあ！」
反射的に、うげっ、と思う。最悪のタイミングで見つかった。

「あれほど髪を黒に戻して来いといっただろうが！！」

ひたすら怒気を全面に出して、こちらに迫ってくるのは。俺を目の敵にする生徒指導の先生。いつもはジャージがトレードマークだが、今日はスーツだ。

ジャージじゃない分、逆に暑苦しい。

「だから先生、コレ地毛ですって」

俺は自分の髪を指差して弁解する。その髪は、確かにどこからどう見ても金髪、ブロンドヘアーだが、マジで地毛である。

「日本人で地下が金髪のやつなどいるかあ！親が外人ならまだしも！」

弁解はあつという間に一蹴された。いや、まあ確かに両親が日本人で、生える髪の色が金髪って事は確かに無いわな。

でもですね先生、世の中には隔世遺伝という言葉もありまして、系譜をさかのぼっていった時にもし、ご先祖様に金髪の外人がいたら、それが偶然遺伝するってこともあるんですよ？

「やかましい！今日こそその髪を性根ごと正してやる！」

俺のやりわりした反論も、いまさら抗力があるはずもなく。髪の色をひつつかまれ、無理矢理連行される。

たぶん向かう先は保健室で、髪を洗われるのであるが。こいつは地毛なので絶対落ちない。そうすると今度はバリカンで容赦なく丸坊主にされるのだ（されたことないけど、されたやつが居るらしかった）。

まあ、最近髪が伸びてきたし、丸坊主にされんのも散髪に行く手間が省けると思えばいいかな。とか思ったが、やっぱり丸坊主はいやだな。そんな風にぼんやり考えていたとき、助っ人が現れた。

突然、カシヤツ、という音が響いたかと思うと。

「あーあ、せんせー。んなことしていいのかなー？」

けっけっけ、と不気味に笑いながら近づいてくる人影があった。

その手には使い捨てのカメラが握られている。

「なっ！？中田！？何をしているんだそんなところで！」

生徒指導の先生が、その姿を認めるなりそう叫んだ。

「なにしてんだーってのは、こっちのセリフっすよ先生？」

中田と呼ばれた人影は、使い捨てカメラを構え、カシヤツ、ともう一度カメラを使用すると。

「学校来て、いきなり先生が生徒の髪ひつつかんで連行しようとしてるから、驚いてつい写真撮っちゃったんじゃないですか」

ニヤニヤしながら言った。その表情はひたすらに憎らしい。

慌てて、先生は俺の髪から手を離す。

「ダメですよ先生？体罰とかやっちゃあね？」

「馬鹿なこと言うな！この程度で体罰だなんて……！」

「先生がそう思わなくても、この中の写真、PTAとか教育委員会に見せたらどう言うでしょうね？」

先生は口をつぐんだ。

中田は勝ち誇った様子で俺に近づき、寄りかかるように（わざとらしく大げさに）肩を組んでこういった。

「大丈夫っすよ先生。こいつが髪を染めてくるようなやつじゃないってことは俺が一番よく知ってますからね」

中田が俺に軽くウインクする、「俺に任せろ」というメッセージだ。左目の端でそれを読み取った俺は、軽くうなずいた。

「いや……しかしだな……！」

まだ食い下がろうとする相手に対して、中田は最後のトドメをさす。

「先生、俺の親がこういうのに目ざとって、知ってますよね……？」
すると相手は、「うぐ……」といいながら、ゆっくりと引き下がった。「覚えてるよ……」という目でゆっくり退いていくその姿は、今後あの先生とさらに深い因縁を持つことになったことを物語っていたが。とりあえず今は丸坊主から逃れられたという事も示していた。
「いやー閑歩！始業式早々丸坊主になるところだったな！危ねえ危

ねえ！」

中田は周囲にはばかりることなく、大声で笑いながらそう言った。もちろん、生徒指導の先生が見えなくなっただけからだが。

「ああ、助かったよ。ありがとよ中田」

俺は正直にそう礼を述べた。同時にさっきからくつついた状態が続いていたので、暑苦しいぞ、という旨も伝えたが。

中田は相変わらず機嫌よさそうに笑っていたが、「あいよ」と答えて首にからめていた腕を取り払った。

「それにしても単純だよな。こんな小道具に引つかかるなんてよ」中田が先ほどの使い捨てカメラを右手でもてあそびながら言った。「そつえば、よくカメラなんて持ってたな？」

俺が素朴な疑問をぶつけてみた。考えてみればここは学校で、本日は始業式である。普通に考えて、カメラを持っている状況じゃないし。中田は新聞部や写真部などには当然所属していない。というか、そんなけつたいな部活自体がこの学校には存在しない。

すると、中田はふっふっふ、と満足そうに笑い。

「へーえ、閑歩もたまされたか。コレ本物のカメラじゃねえよ」

そついうと中田はいきなりカメラ（？）をこちらに向け、カシャッ、とシャッターをきった。

急に写真を撮られ、反射的に身構えた俺だったが、同時にわずかな違和感を覚えた。

「…ああ、なるほど。フィルムを巻いてないな」

中田はにやつと笑い。

「ご名答。こいつはシャッターを切ると、写真を撮った音が出る仕掛けになってんのさ。中身がどうなってるのか知らねえけどな」と言う。

へえ、世の中色んな物が出回ってるもんだな。と感心した俺は、中田にふとこんな質問をぶつけた。

「いったいそんな物どこで手に入れたんだ？」
すると中田から意外な答えが返ってきた。

「どこでつて…こないだお前の家遊びに行つたとき。やたら外見の若いおばさんにもらつたんじゃねえか。ほら、親戚だつた言つてたあの…立花、とかいう人だよ」

…聞かなきゃよかった。俺の友達に何を渡してるんだあの人は？
つてか、なぜ使い捨てカメラを改造した小道具なんて持つてるんだよ？そしてなぜ渡す？まったくあの人の行動は相変わらず訳わからん。……まあ、今回はそのおかげで助かつただけどき。

「いやー、あの面白いやなー？外見やたら若いのに声だけおばさんですよ？それに色々役に立つんだか立たないんだかよくわからん物くれるしさ？また遊びにいきてえよ。今度は何くれんだろ？」

あーはいはい、また今度な……つて待て、色々くれたつて言つたか？てことは他にもなんかあげてんのかあの人は…俺に隠れて何か危ないもの渡してないだろうな？今度釘を刺しておかなければ…。

しかし、下手に出るとあの人のことだ、うまい事言つて逃げるに違いない。じゃあどうするか……。

と俺が思案に暮れていると。

「おーい、閑歩？そんなとこに突つ立つてねえで、早く教室行こうぜ？」

中田が退屈そうに言つた。見れば、他の生徒も続々と登校してきており。下駄箱周辺はちよつとした登校ラッシュの模様を呈していた。

あと少し経つていたら、本当に登校ラッシュになつていたところだろう。人ごみが苦手な俺にとっては、このくらいがちょうど気にせず動けるボーダーラインであつた。俺は人込みに入ると、どうしてかうまく動けない。流れに身を任せたまま、行きたい方向がどっちかさえ、人にもまれてるうちにすっかり忘れてしまう。気が付くと、人ごみのはずれにつつ立っているという有様で、何が原因でこうなるのかもわからない。どうやら俺は本能的に人ごみがダメなよるうなのだ。

「ほら、早く行こうぜ？」

中田が軽くウィンクした。言葉は軽いが、人ごみが苦手な俺を氣遣つての発言だと俺にはよくわかった。こいつはそんなところも氣にしてくれるいいやつなのだ。

それが、俺が中田に信賴を置く理由のひとつだといえる。

「ああ、いくか」

中田の配慮に感謝しつつ、俺は言った。

「おい閑歩、どこ行くんだよ？」

校舎に入り、最上階へ続く階段を登ろうとすると。中田にそう引き止められた。

俺はとつさに「何だよ？」と聞き返しそうになったが、すぐにあることに氣が付いたのでやめておいた。

そうだ、俺今日から高二じゃねえか。

この場に居るほぼ全員がわかつていることを、どうやら俺はすっかり忘れていたらしい。忘却の彼方、ファーストウェーイだ。行くべき教室が変わっているのだから、今までどおりの教室に行こうとするのはそりゃ間違いに決まってる。

考えてみりゃ、今日は始業式で、生徒は誰しも進級しているわけで。クラス替えの発表もあり、さっきまで一年に引き続き同じクラスに配属された中田と、いくらか冷めた喜びを味わっていたはずなのに。俺は、すっかり進級していたことを忘れていた。

「あ、悪い悪い。ちつとボーっとしてた」

俺なんでもない様子で、中田に軽く笑いかけたが。中田はいくらか不審そうな目でこちらを見ていた。

「お前ほんとに大丈夫か？今日はいつにもましてボーっとしてるぜ？」

「大丈夫だよ、ただの春休みボケみたいなもんだろ……」っておい待て『いつにもまして』ってことは、いつもの俺もボーっとしてるってか？」

「あれ？違うのか？」

「違うわ、俺がいつぼーっとしてたってんだよ？」

「お前の存在感自体がぼーっとしてんじゃねえか？」

「うるせえや、悪かったな存在感なくて」

「おいおい、俺は別にお前の存在感が『ない』とは言ってないぜ？
言うならば『なきにしもあらんや』的なもんだと言って……」

「ややこしい上に何のフォローにもなってねえよ！」

勢いに任せて、つい大声でつつこんでしまった。廊下に出ていた生徒が、俺に視線を送ってくる。

ちよっとした注目を浴びて、バツが悪くなった俺の肩を中田が叩く。

「オツケー、そのつつこみのキレなら大丈夫だ」

何が大丈夫なものか。

だが中田は特に疑念を持たなかったようで、ちよっとした注目の中、無言で俺をうながすとクラス分けて配属されたクラスへと向かった。

実を言うと、いつも以上にぼうつとしていたのは事実だ（いつもぼうつとしているかはさておき）。

表面上何もないように振舞ってはいるが、内心はとても穏やかではなかった。ある懸案が、俺の心に重くのしかかっていたのだ。

ふと、廊下ですれ違う、知り合いでもないほかの生徒の顔をちらと見た。こちらが視線を送ったのにも気づかず、その人物は去っていった。その顔には本当に見覚えのない顔だった。そのことを確認して、安心する。

あれ以来 4人の人間がプロフィールされた、『リスト』を受け取ってから コレがクセになってしまった。

そう、俺の懸案事項とは、あの桜色の封筒に入っていた『リスト』のことである。

どうしてそれが懸案事項なのかというと、理由は2つある。

一つは、『リスト』に載っていた4人の内、二人はまったく知らない人物であったことである。名前も顔もまったく心当たりのない

人物であつた。勿論そういうことは別段珍しいことではないのだが。問題はその二人の年齢であつた。

その二人は共に、今年高校生になる年齢であつた。高校に通う俺に『リスト』が渡され、なおかつ俺がそのとき言われたのは「普段どおりの生活を送つても構わない」と言うことだつたのだ。と言うことは、少なくともその二人とはこの高校でとは言い切れないが、この近辺 要するに、俺の生活圏内、と言うことだ で接触することはほぼ間違いないと見ていい。

つまりは、『リスト』記された人物がいつの間にか近くにいたとか。実はあそこで出くわしていた。なんて事がありえるのだつた。『リスト』に記されえる人間は仕事上の最重要人物である。ちよつとした「接触でも気をつけなければならない。というのがルールであつた。

だから、道を歩くときは神経質に目を配らなければならないのだが、これが異常な負担となる。信じられないならやつてみるといい。通行人の顔を全て確認するなんて作業を。それも、もちろん誰にも気取られることもなく。

つと、はたから聞いても何のことだかわからないような説明をしても時間の無駄と言うやつか。

要は、『リスト』に載っている人間に不用意に出会つてしまわないようにしなければならない。と言うことである。

だが、俺の懸案事項はそれだけで済むものではなかつた。

もう一つ。

こっちは、どうなつても厄介でしかない。本当に苦労しそうなことであつた。

その心配は登校途中まで予感としてわずかに心にあつたが、クラス替えの発表時。その心配は現実のものとなつたのだと悟つた。

「おーっす」

中田が教室に入りながら適当に挨拶をした。どうやら一年時のクラスメイトがそのまま進級したようで、クラスの面子はほとんど変

わってないようであった。ちらほら新しい面子も見かけるが、知らない顔ばかりだ。

「おう中田、今年度も学級委員長頼むぜ？」

「へっ、任しとけ。このクラスまとめられんのは俺しかいねえからな」

これは中田と旧来のクラスメイトとの会話。紹介が遅れたが、中田は一年時俺のクラスの学級委員長だった。頭の堅い大人に言わせれば「最近の若い奴は…」といわれそうなラフな奴だが、リーダーの素質は十分にあり。社交的で、適度にまじめ。話のわかる頭のいいやつでもある。ちなみに成績はそこそこ。

クラス内では俺の唯一の友人でもある……友達少なくて悪かったな。

「おつす虎野、またよろしくな」

「ああ、よろしく」

比較的仲の良いクラスメイトから話しかけられ、対応する。そこそこ無難な対応をしたと思うのだが……。

「んだよ閑歩？暗いなあ！？もつと明るく『おーっす！またよろしく頼むZE』くらい言えねーのかよ！」

と中田にどつかれた。つか言えるかそんなこと。

その後、クラスメイト一同と話し込む中田を置いて、俺は自分に割り当てられた座席へと向かった。

が、その前を女子にさえぎられた。

前に立ちはだかったのは、どうやら一年時も同じクラスだったようだ。うだが、名前も覚えていない女子であった。顔は覚えてるんだが。

何事かと思ったが、その女子はぎこちない笑みを浮かべながらこんなことを言った。

「お…おはよう、虎野君…」

言った後、さらにぎこちない笑みを短めの前髪からのぞかせ、不自然にショートヘアを揺らすその女子に、おそらくもつとも適切だと思われる言葉をかけた。

「ああ…、おはよう」

するとその女子は「あはは…」とか不自然に笑いながら道をあけた。別段怖い顔をして言ったつもりはないのだが、女子の顔はいくら引きつっていた。

ちらと周囲を確認すると、窓際に固まっている三、四人の女子がこちらを見ながらニヤニヤしているのが見えた。

何だろう、新手のバツゲームかなんか？

とふと考えたが、特に気にせず。再び座席へと向かう。
が、今度は恐れていたことが起きた。

「やつほー！みなさんおっはよー！！」

突如として教室に響き渡る。透き通る声。軽快なリズムに乗って出される、まるでお祭り気分の明るい声。

「やつおはよー！おはよー！おっ！また同じクラスだねっ！よろしくっさ！およ？こちらさんはハジメマシテかなっ！？」

マシンガントークと言う言葉をそのまま具現化したような言葉の嵐。だがその声は決して耳障りではなく、まるでピアノの連弾を聴いているかのような心地よささえあった。

背中をバンツ、と勢いよく叩かれたのとほぼ同時に、言葉が飛んでくる。

「やつ！しずくんおっはよー！！」

振り向きざまに、そう言われた。その声の発信源は、太陽のような笑顔の持ち主。

深緑の長い髪の毛が、その人の存在を際立たせる。

今度は俺がぎこちない笑みを浮かべる番だった。

「お…おはようございます。……鶴屋さん…」

我ながら、情けないくらいにぎこちなさである。

案の定、その人 鶴屋さんに指摘される。

「あははっ！何でそんなにびっくりしてんのさっ！？」

鶴屋さんの勢いに圧倒されて、何もいえない俺であったが。目だけは俊敏に動き、鶴屋さんの背後に少し遅れてやってきた人影が居

るのに気が付いた。

ふわりとした茶髪と大きな瞳、この世すべての男の庇護欲をそそる恐るべき愛らしさを持つ少女。 朝比奈 みくる。

「おはよう、虎野君」

につこりと微笑み、実に丁寧に挨拶してくれた朝比奈さんに、俺はうなずくことしかできなかった。

「まっ！とにかくまた同じクラスだしっ！よろしくっさ！」

そう言って笑う鶴屋さんの顔を、俺はただ見ることしかできなかった。

もう俺は、この二人に何の言葉もかけられなかった。

ただ、二人の顔を交互に見て、ある記憶と照合していた。

ちくしょう！やっぱりそうなのかよ！

俺が脳裏にフラッシュバックさせていたのは記憶の映像。それは、四枚の『リスト』のうち『見覚えのある』方の二枚だった。

『リスト』を確認する限り、この二人がそうであることに疑いはなかった。だが、心の底では認めたくなかったのだ。

しかし、もうそんな儚い希望も消え去ってしまった。今、目の前に居る二人の少女。

鶴屋さんと朝比奈さん。この二人は、間違いなく『リスト』に記された人間であった。

仕事上の最重要人物。不用意に接触してはならない。たとえ、わずかでも。

いつの間にか、俺は唇をかんでいた。

何やってるんだらう、俺。

心に残ったのは、そんな思いだけだった。

く桜色・第一章(2)く

Coloring envelopes く桜色・第一章(2)く

疲れた。

その一言に尽きる一日だったと俺は思った。

始業式からこんなに疲れるとは思ってなかった。いや、疲れるとは思ってただけど、予想以上に疲れた。

そんな思いを抱きながら、俺はとぼとぼ家路についていた。

始業式を終えた後、放課後の予定もクソもない俺はさっさと学校を出ていた。

いや、出なければやってられなかった。

「ちくしょう」

心の中で何度呟いたかわからない、行先不明の消化不良の言葉。

今日教室で俺を戸惑わせたものに対するいらだちと、今俺がここにいる理由である「仕事」への義務感がその言葉を中途半端な物にしていた。なんだろう、憎いんだけど、それのお陰で今があるみたいな感覚だ。怒りがこもっているかと言うとそうでもなく、哀しみも喜びも入っている訳ではない。なんだか形容しがたいものが心にたまって、あふれた拍子に出たような、何の意味も持たない言葉。

「はあ……」

そして知らず知らずの内に、ため息をつく。

ふと心に浮かぶのは、二人の顔だ。

鶴屋さんと、朝比奈さん。

今日間近で確認した二人の顔と、『リスト』にのっている二人の顔……。

何回思い出してみても、同じである。二人で間違いなかった。いや、間違いあるはずが無かった。『リスト』にのっている情報が、間違っていることなどない。顔を確認せずとも、あの二人で間違いな

と特定する要素は山ほどあった。なんせ、いらん事までやたら書いてある代物だからな。

だが、信じたくなかった。

だってそりゃそうだろ？

ついこの間まで普通のクラスメイトとして普通に関わってたのに。

「仕事」上の理由で「不用意に接触してはならない」んだからな。

こっち行動がぎくしゃくしてかなわないね。

あの二人にとって俺がどうだったかは知らないが、少なくとも俺は大事な友達並みには思ってたさ。よく話したからさ。

特に鶴屋さんと話せないってのは……いや、何が「特に」なのか自分でもわからないが、なんだか、やりきれない気分になるのだった。そして、最終的にため息となってそんな気持ちが出される。

というかそれ以前に、朝比奈さんは兎も角、俺と鶴屋さんは良く話す間柄だ。それはあの学校で俺の金髪を気にせずに話しかけてくれた初めての人が彼女だったということもあったが。一年生時、運よく近くの席であった時期が長く、自然と話すようになっていたためだ。閉鎖的な人間関係になりがちな俺からしてみると、数少ない話し相手と言えた。

そんな人と、ある日突然「接触するな」って言われても。そんな事情知らない相手は話しかけてくるだろう、無視しようと思えばそりゃ無視できるが、不審に思われのは必定だろう。下手を打てば、余計に絡まれて対応に窮する事になりかねない。

一体、どうすればいいんだか。

少しの間、思いを巡らせ考えるが……やっぱりわからん。

あきらめて肩の力を抜くと、新学期早々からけだるさを感じる体がある。そこにあつた。

疲れた。

その一言に尽きると思った、改めて思った。

まだ、昼飯も食ってねえのに。

「ただいま」

扉を開け、家に帰った時に言うのが最も適切だと思われる文句を言い放った。

まず言っておくが、俺は一人暮らしでない。

俺が立花さんから預けられている三才児の明と、立花さんの育ての親（要するに、俺からみると育ての親の育ての親だ）であるおやつさんとの共同生活である。家事全般は俺が担当し、明の子守りも俺の役目である。おやつさんは「仕事」上の色々な調整をこなしているらしい。もっとも、忙しそうにしているところはついぞ見ないのだが。

ちなみに、そんな共同生活を送っている住まいは一戸建てである。角地、平屋建ての3LDK。3人で生活するには充分過ぎる広さを持つ家である。日本に初めて来た時、立花さんが「偶然」手に入れた（らしい）家でそれ以来この家が俺たちの活動拠点となっている。「みゃあー！しずにおかえりい！」

家に入るなり、甲高い舌足らずな声が俺を出迎える。奥の部屋から、小さな物体がこちらへ飛び出してくるのがわかった。

ぴよこぴよこ飛び跳ねるようにして俺に近づき、玄関に上がったばかりの俺にさっそくまとわりついた。

その姿があまりにも愛くるしく、しゃがんで、その小さな物体をやさしく抱えてやる。

「明、ただいまあ」

小さな子供の相手をする時、軽く猫なで声になるのは仕方が無い。口調を気にするのを忘れさすくらいに可愛らしいのだから仕方が無い。

普段は絶対こんな口調は使わないのだが、まあ仕方が無い。

そう、そんな可愛らしい存在、それがこの子。立花さんの娘・明である。今年で三才。最近、語彙が急に増えて会話できることが増え。ああ、成長してんだなあ。と実感させられている。立花さんも俺を育てるときはこんな気持ちだったのかとも思ったりもする。

「しずにい、おやじさんがね。ごはんまだあ？って」

持ち上げられた明が、気分よさそうにそう俺に伝えた。

おやじさん、とは先程ちらと出てきたおやっさんのことである。

「おやっさん」と舌が回らない頃に言わせようとしたのが原因で、

「っ」が言えず、自然とくだけて「おやじさん」で覚えてしまったのである。まあぶっちゃけ、別にどちらでも変わらないからいいのだが。

それにしても、帰ってくるなり「ごはん」か。はいはい、予想してましたよっと。

「よし、じゃあご飯にしようか、明」

「うん！」

純粹でいい子である。本当に立花さんから生まれたのか怪しいと思ってしまうくらいだ。あの人は生まれた時から規格外だったに違いない。

本人に言ったら、ぶん殴られるどころじゃ済まないだろうが。

家の中央に走る廊下を中ほどまで行き、右手に見える洋風の扉をひらく。六畳の居間、カーペットの上にもう春なのにこたつがでんと置かれている部屋。隅にはテレビが置かれ、お昼に定番のバラエティ番組を映し出していた。

「おお、閑歩。おかえり」

カーペットの上に寝転がりながらテレビを見ている人影が、俺が部屋に入るなりそう言った。

行動は完全にそこらへんのおっさんだが、やたらと声に重みと深みがあるので。どうも普通のおっさんと言うには威厳があつてためられる。

まあ、だから俺たちはこの呼称を使うのかもしれない。

「ああ、ただいま。おやっさん」

明をカーペットの上にやさしく降ろしながら、俺はそう応対した。そう、この人こそ俺たちが「おやっさん」と呼ぶ。立花さんの育ての親にして、俺たちのボスである人だ。

もう一度言うが、見てくれはどうやっても普通のおやじである。

だが、俺たちのボスなのだ。

とはいっても、何も何百人もの人間のトップに立つとか大げなことではない。

この人の『部下』にあたるのは、俺と立花さんを含めて三人（明を含めるというなら四人）しかない。

勘のいい人は気付いているかもしれない。「仕事」とか呼んでずいぶんと大がかりな事をやっているように聞こえるが、俺の所属しているいわば「組織」の実態は、構成員数名の、「組織」というよりは「集団」と言うほうがしっくりくるようなところなのだ。

俺の所属する「集団」には正式な名称は存在しない。

理由は単純。必要ないからである。

つまり、俺たちを一つの「組織」とみなして、便宜上俺たちをひとまとめにした名称で呼ぶような勢力が存在しないのだ。

それは敵がいなくてという訳ではなくて、例えば立花さん個人なら敵はいっぱいいるが、立花さんが勝手に動いて敵を作っているの、敵からしてみれば、立花さん個人が敵であって、俺たちの「集団」をそのものは特に気にしないのだ。呼ぶ必要そのものが無いのである。

ぶっちゃけ、立花さんはめちゃくちゃ勝手に動きまわって世界中飛び回っているし。ボスたるおやつさんはといえば、いつ仕事してんだ、本当は自由人なんじゃねえかと思うくらいに何もしていないで、俺はと言えば家事担当である。

要はそれぞれでんばらばらの行動をとっているの、一つのまとまった「集団」とみなす必要すらないのであった。

……。

そう、客観的に見れば。

確かにてんでんばらばらではあるが、俺は一つの「集団」であると信じている。

それは「家族」って集団だ。

そう思う理由は、俺のある特殊な出生からきているのかもしれない。確かにこの「集団」には本当に血のつながった者同士なのは（明と立花さん以外）いない。全員が、言ってしまうえば「他人」だ。でも、俺を育ててくれた「集団」という事実以上のものが必ずある。皆だつてそう思っているはずだ。

考えてみれば、本当の「家族」だつててんばらばらな事一人一人がやっているだろう？それでも「家族」ってまとまりだと言えるのは、そこにお互い確認する必要のない思いがあるはずなんだ。そして、それと同じものを俺たちも一人一人が持っている。うまく言えないが、きっとそうだと思っている。

「…おい、閑歩。どうした？ぼーっとして？」

「え？」

ふと気がつけば、俺は居間に入ったそのままの状態で突っ立っていた。

また悪い癖が出た。どうでもいいときにどうでもいいことをやら考えたがる。

「いや、大丈夫。なんでもないよ」

苦笑しながら、そう答えた。

「大丈夫か？具合が悪いのならすぐに言ってくれよ？」

なおもおやつさんの心配そうな声が続いた。

大丈夫だよ、そんなじゃないから。

俺は気を取り直して、居間の隣のある台所へと向かった。昼飯を作らなければいけない。

「しずにい、だいじょうぶ？」

明にまで心配そうな声をかけられた。大丈夫だつて。心配してくれるとは、いい子だ。

そろそろこう考え込む癖を何とかしたほうがいいな、と正直に思った。

飯の準備をしながら、ふと、何か忘れているような気がした。

だが、それがなんであったか思い出す前に。明が台所に入ってきた。

たのを追い出すのに気をとられて、遂に至らなかった。

はて、何だったかね？

それを思い出すのは、昼飯が出来た後になりそうだった。

「このコロツケ、うまいな」

「だろ？ 近くのそうざい屋でうまそうだったから買って来たんだ」
というのは俺とおやっさんの食事中の会話。

一般に昼飯ってのはラーメンとか、パスタとか、単調なめんものになることが多い。だが、栄養学的に言くと、昼飯をそんな単調に済ますのはあまり良くないらしい。

……って知ってはいるが、俺が作ったのはやっぱりラーメンなのだった。

全国の主婦の皆さんに同意を得られると思うので言っておく。昼飯って、作るのめんどくさいんだよね。なんか、気分的に。

まあ、栄養学的には兎も角。一般に昼飯とは一品料理にもう一品何か付けば妥当と言うところだろう。

ラーメンをゆでて、コロツケを惣菜屋から買ってきただけじゃねーかとか言わないように。

俺が帰って来てからものの三十分で、冬でもないのにこたつでラーメンを食べるといふ空間が広がっていた。もちろん、こたつの電源は入れてはいないが。

まあ、誰かが文句を言う訳ではないからいいだろう。

明が、小皿に分けてやったラーメンを一本ずつちゆるちゆる食べているのを横目に見ながら、俺は今日あったことをふと思い出した。それと同時に。

おやっさんがいつも以上の低い声で俺を呼んだのは。

「閑歩」

「ん？」

名前を呼ばれて反応したというよりは、条件反射で声をかけられ

たから反応したというのが正しい。

「『リスト』にのっている人間は全員確認できたのか？」

少し反応が遅れた、こんな唐突に『仕事』の話がくるとは思ってもみなかった。

「…いや、まだ」

四人中二人については、いやというほど確認したが、残りの二名は全く分らなかった。

が、おやつさんは特に残念そうでもなく。

「まあ、いずれ会うことになるだろうから、心の準備だけはしておけよ？」

と言った。

無理に探りに行かなくても、こちらから接触することになるってことか？はたまたその逆か？

と。接触という言葉を使って、思い出したことがあった。てか、家に帰ってすぐに明にからまれてすっかり忘れていたことだ。

「なあ、おやつさん…『リスト』にのってる人の話なんだけどさ」

「ん？どうした？」

「実は、その内の二人と同じクラスなんだよ」

すると意外、……いや、俺以外なら驚かない返事が返ってきた。

「ああ、まあそうだろうな」

「ん？あれ？何で「まあそうだろう」なんだ？」

内心、妙に嫌な予感がする。

「立花が『そういうことにしておく』って言ってたからな」

「……あんだって？」

ちよ、ちよっと待った。どういうことだ？原則関わってはいけない『リスト』の人間と、半日強制的に同じ空間にいさせるような状況に、あえて俺を置いたってのか？どういうことだそれは。

「閑歩、『不用意に接触するな』ってのは。何もそいつと一切関わるなって事じゃないぞ？」

おやつさんは俺の誤解を氷解させるのに十分な言葉をのたまった。

「あくまで自然に、現状維持で関わり続けて。無理に探りを入れるようなマネはするなってことだ」

……てことは、明るく挨拶してくれた鶴屋さんと朝比奈さんに一言も返すことなく過ぎて行っただあの時間は何だったのやら。

しかし、これで懸案事項が一つ解消された。

「うまかったぞ、ごっそさん」

おやつさんがラーメンのどんぶりに箸をおいて、両手を合わせるなりそう言った。どんぶりは知るまですっかりなくなった本当に空の状態であり、おやつさんの言葉をそのまま代弁していた。

だが俺は、このラーメンがうまかったかどうかよりも、聞いておきたいことがあった。

実はこのことは前々から聞きたかったのだが、『こういうことは立花さんに聞くのがスジだろうという判断からおやつさんに質問した事は無かった。

だが、立花さんに聞いても答えてくれなかったので、やっぱりおやつさんに聞こうと思っていたのだ。

「なあ、おやつさん」

はたから見れば、こんなこと聞くなんてあまりにもおかしいと思うが。

『リスト』なる個人情報ただ漏れな物を拝領し、これから『仕事』を俺もするのだ。と覚悟を決めていた俺であったが、どうしてもひとつ。大事な事を教えてもらってなかった。

それは知らなきゃ仕事もクソも無いようなことで、というか、今まで知らされなかったのがおかしい事であった。

すなわち、根本的な事。

「俺の『仕事』って、何やんの？」

そしたらすぐにとんでもない返事が返ってきた。

「さあ？ 知らん。」

「……………え？」

あっさりと「知らん」と言うおやつさんに、俺は言葉を失った。

なんじゃそりゃ。

く桜色・第二章（１）く

Coloring envelopes く桜色・第二章（１）く

朝。

現代人ならば誰もが、目覚まし時計という名前がそのまんま役割を表しているステキな文明の利器に叩き起こされて始まるであろうこの時間。

そのステキな文明利器は今俺の頭上でもうなりを上げ、その役目を全うしようとしていた。

俺はその音源を確認するまでもなく、素早くふとんから手を伸ばし、そいつにお役目は終わったと伝えてやった。

今、世界は科学技術の発展やら経済の発展やらでいろいろと騒いでるようだが。俺は全ての目覚まし時計に経済の発展に大きく貢献したとして、勲章を授与してもいいと思う。

だってよ、こいつがいなくちゃ、全ての社会人が定時に会社に来るなんて無理だろ？

だから俺はもう少し、この小さな枕元の功労者に感謝すべきだと思うね。

つてこないだ立花さんも同じような事言ってたっけ。

そう思うのと、凍えそうな冷水が顔にあたるのが同時だった。

ぼやけていた意識が、一気にはつきりした。その瞬間は気分がいいが、やっぱり冷たい。

俺は顔を洗う時、温水は使わない。別にガス料金を気にしてる訳じゃないぜ？

俺が育ったのが雪山であつたので。習慣の様なもので、冷水のほうが肌に合っているように感じるのかも知れない。

そう言えば俺、猫舌だな、そういうところにも関係あるのかもしれない。

そう思うのと、やかんが高いうなりをあげ、お湯が沸くのが同時であつた。

朝のぼんやりした思考回路に、終止符が打たれる。
時計の針は、五時三十分を指していた。

今日も、いつもどおり。

「おう、閑野、おはよう。早起きだな」

おやつさんが俺の一時間後くらいに起きて来たころにはその日もつていく弁当の準備も終えて、比較的ゆつくりと、居間でくつろいでいた。

「おはよう、いつものことだろ？」

俺は、朝は強いほうのはずだ。一応、去年一年寝坊はなかったし。

「まあ、そりやそうだが、な」

おやつさんが相変わらずの渋い声で同調した。

おやつさん。俺の育ての親 & amp; 名付けの親その2。ついでに俺をどこからか拾ってきたのもこの人で、更に俺の育ての親である立花さんの育ての親。

なおかつ、俺たちのボス。ということは、少し前に説明したばかりであるが。ここではもうちょい詳しく説明してみることにする。

そもそも俺の所属する『集団』

便宜上、そう呼ぶことにす

る。は何も無目的に集まっている訳ではない。それはまあ分かっていただけていると思うが、では一体何の『集団』なのか？それを説明しよう。

一言で説明する。真面目に言うので笑わないで聞いていただきたい。

俺たちは、世間一般的に『超人』と呼ばれる人間たちの集まりなのである。

そう、『超人』。通常の人間とはかけ離れた能力を持つような人

間のことだ。国語辞典的に言うと、もう一個某ドイツの哲学者が説いた、人間の理想的典型のことらしいが、それはここでは置いておく。

とりあえず、超人の集団なのだ。もつとも、人数は全員で五人だが。

まあ、んなこと急に言われたってさっぱりだろう。だから、まあ、説明していくことにする。

まずこの目の前にいるおやつさん。この人自身が『超人』である。どう超人なのか？ ずばり言おう。この人は聴覚が異常に発達しているのだ。少なくとも『超人』と呼ばれる程度には。

なんだ、そこまで大したことじゃないと思うかもしれない。だが、この人の聴覚は異常という言葉がそのままではまるにふさわしい、とんでもないものだと言っておく。

なにせ、二百メートル以上離れたところから、小声でぼそぼそしゃべっている声が聞きとれるのである。これについてはおやつさんが自分で実験しており、調子のいい時には五百メートル先の会話は聞き取れるらしい。一枚や二枚壁を隔てたくらいなら全く問題にならず、隣の部屋でなにが起きているかつつぬけだったりする。

だからまあ、ドッキリとかサプライズと名のつくものは通用しない人である。本人に曰く、それが生きている上で一番つらい事だという。

わかっていただけだろうか？ こんな感じの人間が集まる所なのである（とはいえ、総員五名だが）。

ここで注意していただきたいのは、『超人』と『超能力者』は違うということである。

同じじゃないか、と思うかも知れないが、違う。

ここで言う『超人』とは、その能力自体は人間が元々持っているものだが、そのレベル、おやつさんで言うなら、耳の良さが通常のレベルを「超越」しているから『超人』と言う。だが『超能力』つてのはすなわち人間が元来持ちえない、科学的に立証不可な、魔法

の類か念力か、はたまた透視か。そんな感じの能力を持つものを指す。

残念ながら我が「集団」にはそんな存在は集まってはこない。

とはいえ、この「集団」にも一名だけ。例外のように『超能力者』がいるのだが、まあそれは置いておく。

「ああ、そういえば昨日の遅くに、立花が帰って来たぞ」

おやつさんが、思い出したように言った。そのおやつさんは、朝起きるなりテレビをつけて、けだるそうにそれを見ながらお茶を飲んでいる。

俺は家にいる間、おやつさんが寝てるかテレビ見てるかパソコンやってるとこしか見たこと無いんだが。日本に来るまでは違ったのに。

そう感じながらも、俺は立花さんが帰ってきたのだという事実に純粹に驚いていた。立花さんは春休みの後半、始業式も間近と言う時に俺に『リスト』を渡した後、再びどこへともなく出かけて行っていたのだ。それ以来音沙汰なしといういつもの状態だったのだが、どうも急に帰って来たらしい。

「おつ、うわさをすればなんとやら…か、起きて来たぞ」

おやつさんが視線はテレビに向いたまま、言う。どうやら立花さんが起きたらしい事を、自慢の耳で把握したらしい。

これで立花さんが普通に今に来たら驚かなかったのに。

「おつはよー。早いねえー二人とも」

俺の向かい側、居間に隣接した和室のふすまが、すーっと開いたかと思うと、そこにはカットシャツに細身のパンツをはいた、絶対スーツ着て帰ってきてそのまま寝ただとつつこみたくなる装いで入ってきた。当然、長い髪はすんげーぼさぼさであった。いつもと違うところといえば、寝起きだからいつものごついサングラスがなく、どこかかわいい感じの目が印象的だということくらいか。

いや、問題は立花さんが出て来たところにあった。和室は、俺と明が寝ているところである。そこから寝起きの立花さんが出て来た

ということはずまり…。

「え、っ！立花さんもしかして和室で寝てたんすか！？」

「あり？気づいてなかったのかい？」

いんやまったく。朝起きる時も、明をなるべくおこさないように心がけて、電気もつけずにひっそりと素早く和室を出るから。立花さんがいても気づかなかったのかも知れないが。

「はっはーん？あたしはさ、起きた時びっくりさせようと思って明と一緒にしずくんを抱き枕にして寝てたんだけど。起きて見たらしずくんいないからさ。へえ、しずくんもこういうのに耐性ついて、あんまさわがなくなつたのかなーって思ってたのにねえ…なんだ、気づいて無かつたのかい」

そう言われてみれば、起きる時少し体になにかまとわりついてい
る感があったが、まさかそんなうれしい…じゃねえ、大変な状況だ
とはついぞ思わなかった。

てか、さすがに鈍感過ぎるぜ俺。抱きつかれてて気づかないとは
ちょっと反省だ、何に反省してんのかよくわからないが。

「ふひひ、じゃ今度はいやでもわかるようにぎゅーっと抱きしめて
あげようかい？」

勘弁して下さい。俺苦手なんですから、そういうの。応対に困
って言うか。

そう俺が抵抗しても、不敵な笑みを崩さない立花さん。どうやら
「苦手」と言っただのが逆効果だったようだ。

そんなこの人も、『超人』だ。

立花さんは視覚が異常に発達している『超人』だ。しかもそれは
単に視力がどうというレベルを超越している。

とりあえず、見えないものを探すほうが難しいかもしれない。一
キ口先、二キ口先のはあたりまえにはつきり見えるらしいし、
銃弾をかわすことが出来る動体視力（！）も持ち、近くとなれば下
手なルーペよりも小さなものがはつきり見えるとか。とにかく色々
超越しすぎている目を持つのだ。

そしてそれだけでもう十分なのに、おまけのごとく超人的な人格まで持つ、ある意味パーフェクト超人である。まあ、人格のほうについては、後々明らかになる時が来るだろうからここでは語らないが。まあ、一言で言うなら破天荒そのものであると言わざるを得ない。

ちなみに、『超人』であるかどうかはつきり分らないの一名いる。

それがさっきの会話にも名前が出て来た、立花さんの実の娘、明である。

おやつさん曰く、今のところ『超人』らしき兆候は見られないとのことだが。立花さんの娘である以上、何かありそうだというのは「集団」全員の感情。

まあ、明と一番よく接している俺も特に何も感じないのだから、何もないと思う…が。

そんな心配をしていると、今度は後ろからまた別の声が飛んできた。

「っはよ…うわ、弁当だ。相変わらずよく作るねえ、こんなの。あたしには無理だわ…」

けだるそうだが、どこか気が強そうな女の声。何でここにいらんだと思いつながら俺はそいつの名を呼んだ。

「…吉野？何でここに…？」

するとそいつは、くせの強い、ウェーブした（寝起きでボサボサの）髪をかき上げながら、

「…何よ、その不満そうな口ぶりは？あたしがここにいちやいけないつての？」

不機嫌そうにそう言い放った。はなからケンカ腰である。

「別にそうは言ってな…」

「じゃ、何よ！！」

聞きたいならしゃべらせろつての。

「あーあ、また始まったかい？」

あきれた様子で、立花さんがつぶやいた。

が、俺たちには聞こえなかった。

「別に何だっでもいいだろーがよ」

俺とした事が、突っぱねるようにいったのがよくなかった。

「何よその言い方！またあんた、あたしよりもちよつと優秀だからっていい気になって、あたしなんていらねーとか言うんでしょ！？」
「いつ俺がそんなこと言った。」

「だいたいあんたは昔からそうなのよ！何でもソツなくこなすからって兄貴面すんのが気に入らないのよ！」

「いつ俺が兄貴面したんだ。捏造すんな。」

「その無自覚なこと、だるい口調がム力つくのよ！」

知らん、もう勝手にしてくれ。

後に残ったのは、怒鳴り声で耳が多少おかしくなった俺と、怒鳴ってスツキリしたのか、いくらか気分の良くなったらしい吉野だけだった。

何も生み出さないとは、まさしくこのことだと思うが。

吉野はすぐに「顔、洗ってくる」とかぶつきらばうに言い放って、居間から出て行った。ああ、顔を洗って出直してこいとかうまいこと言ってやろうとか思ったが、やめておいた。

吉野 華恋。

それがあいつの名である。

「集団」の中では、唯一俺と同年代である。もともと、ホントは俺のほうが二つくらい年上らしいとのことだが。

俺と一緒に立花さんとおやっさんに育てられたので、いわば兄妹の様なものである。もともと、吉野はそれがいやらしいが。

ただ、今はフィンランド（どこかわかるかね？）にある俺たちの隠れ家で留守を預かっているはずなので、ここにはいないはずなんだが……。まあ、どうして日本に出て来たのかは、後になればわかるだろうな。

ちなみに、あいつも立派な『超人』だ。

察しのいい方ならもうわかるかもしれん。聴覚、視覚。耳、目とくれば、次は鼻。嗅覚である。

吉野は嗅覚が異常に発達しているのだ。

が、前の二人に比べると弱点が多い。確かに嗅覚は犬並み（本人いわく犬以上）であるが、本人に言わせると、鼻が敏感になり過ぎて苦手な臭いを嗅いだ時はたとえその発生源が遠くでも、くしゃみが止まらなくなるそうである。で、その苦手な臭いと言うのが意外に種類が多くて困るのである。

おやつさんに言わせると「ソフト面は発達してるが、ハード面が訓練不足なんだ」…だそうである。正直、良くわからん。

なんだか最近はその対策として薬をなんか飲んでるらしいが、吉野は効果があるのか微妙だと言っている。

どちらにせよ、俺にはわかりかねる次元の話である。

「おい、閑歩。そろそろ学校に行かなきゃいけないんじゃないか？ おやつさんにそう言われ、はっとなる。時計の針は既に出発予定の時刻を五分過ぎていた。

まあどうせ、いつも余裕をもって出ているから、運動がどうという問題ではないのだが。

それでも、俺は素早く弁当をカバンに詰め込み、そいつを肩にひっさげると玄関へ直行した。

一年間はいて、流石にボロくなってきたスニーカーに足を入れる時。俺を追いかけて来た立花さんが、ふと俺にささやいた。

「しずくん、今日は寄り道しないで早く帰ってきなよ？」

「え？」

まるで諭すように言ったので。その真意をはかりかねたのだが。

俺が立花さんの言葉をうまく理解できていないのを感じた立花さんは、俺のあごの下をつかみ、無理矢理自分のほうを向かせて言った。

「いいね？」

その時の立花さんはかなり真剣な顔で、全てを射抜くような、い

や、全てを見透かすような目で言った。

やっと俺は理解した、「とにかく、なんでもいいから早く帰ってこい」という意味なのだと。

と思った瞬間、つかまれていた顔が自由になった。

「いつてらっしゃい」

さつきとは比べ物にならないくらい柔らかい口調で立花さんが言った。顔には微笑みをたたえてさえいる。

このあたりが立花さんらしい。言ったら言いつばなし。相手に拒否権など皆無なのだ。

まあ、逆らうつもりは無いからいいけど。

「いつてきます」

俺も微笑み返して、家を出た。

四月もそろそろ後半に突入するかという頃合い。風はもうすっかり春であつた。

さて、俺の所属する「集団」の紹介はもう全部したかな。

いや、実を言うとなと一人だけ紹介していない奴がいる。

『超人』のあつまる「集団」の中で唯一の仲間外れの奴だ。そう、勘のいい人ならわかるだろう。「一人だけ例外的にいる超能力者」のことだ。

で、さらに勘のいい人ならわかるだろう。俺たちの「集団」は総勢五人で、今までに紹介したのは『超人』三人と「不明」が一人、だ。

ここまで言ってもわからない人の為にもう一声。紹介していないあと一人の話を、あんたはずっと聞いてるんだぜ？

「集団」に「所属」している残り「一人」、が「超能力者」ということは。

もう流石にいいだろう。もったいぶっても仕方がない。

では、一人だけいる例外的な「超能力者」は誰？

そう、俺だ。

く桜色・第二章(2)く(前書き)

今回、少し文章の表示形式を変えました。
気になる程度ではないと思いますが…。

く桜色・第二章（２）く

俺がこの道を初めて通ったのはいつだっただろうか。

あまりにも昔の様な気がしたが、よく思い返してみると、違つと気づいた。

しずくん、ここが君の通うところだよ？

初めてこの高校に続く、長つたらしい坂道を登り終えた後。立花さんがそう言つて北高を指差したのを覚えている。

あれが確か、一年半前。

日本に来たばかりの時だった。

あの時は、まだ何にも知らなかった。

俺のこの、「超能力」ってやつも含めて。

今もわからないことだらけではあるんだけどな。

「よつ、閑歩」

教室に入ると、中田がいつもと変わらん調子で軽い挨拶をしてきた。

「ああ、お早う中田」

こちらも、軽く手を挙げて挨拶し返す。

俺は人ごみが苦手だから学校に早目に来るんだが、中田は中田でいつも俺より早くいる。こいつは一体何しに来てんだろうね？

そう思いながら中田をちらと見たが、中田はクラスの女子と何か話しこんでいるようだ。

あの様子だと、特に確固たる理由は無さそうであつた。

というか、その方がいい。

ぼんやりとかばんを探り、今日授業のある教科を頭で思い返しなが

ら、教科書を取り出す。

そういや、数？の宿題があつたっけか、まあやってあつたと思うが。数学のノートをぱらぱらとめくると、しっかりと宿題をやり終えたページがそう探さなくても現れた。

我ながら、しつかりとやってるじゃないか。と、軽い自己満足に浸っている。ふと、かばんの中で目につくものがあるのに気がついた。

日本史と物理の教科書に挟まれた形で、クリアファイルがあつた。なんだか、嫌な予感がして、教科書に挟まったままの状態で、クリアファイルの中身をのぞき見た。

瞬間、しまったと思った。

そんな時に、わざわざ後ろから声をかけてくる人がいたもんだからたまらない。

「やあ、お早うさんっ！」

背中軽い衝撃と共に訪れた、底抜けに明るい声。

後ろを振り向かなくてもわかる。その声の主が。

そう、鶴屋さんだ。

「やあやあ！いつものことだけど早いねえ、しずくん！」

俺があいさつを返すよりも早く、すらすらと口から言葉を発する鶴屋さん。

本当は「わっ！？」とか叫んでしまいそうなくらい驚いたし、心臓が止まるかと思うくらいにドキッとしたのだが、俺にしては本当によくこまかした。

かばんの中身を、鶴さんに少しでも気にされてはまずかった。

何せあの中には、
鶴屋さんを含む、四人分の『リスト』が入っているクリアファイルがあるのだから。

どうやら、昨日教科書をかばんに入れる時、何かの手違いでノートが教科書にはさまり、かばんに入ってしまったのだらう。

自分で言うのもなんだが、もうちょっと注意して扱えよ俺。何で教

科書なんか挟まるかなあ？

こんな見つけ方でもしたら、おおごとである。

「？しくん、どうかした？」

鶴屋さんが俺の様子を見て、どうもおかしいと感じたのだろう。勘のよい方だ。

まあ、かばんの口を閉じてしまえば。別に焦る必要はない。

「いや？何もありませんよ？」

しれっと、自然な笑顔で俺は応対した。

さりげなくかばんを机の横にかけて、遠ざけておくのも忘れない。

「そっか、で、しくんさ。数？の宿題ってやってきたによる？」

そりゃ、やってきましたが。

「そりゃよかった！それでさっ、よければ教えて欲しいんだけどいいかなっ？」

そりゃ、拒否する理由もないし。鶴屋さんになら喜んで教えますが？でも、基本的になんでもこなす鶴屋さんが、数学が出来ないってことがあるのかね？

「……みくるに、だけどね」

…なるほど。

鶴屋さんの後ろから、控えめに朝比奈さんが出て来た。

「虎野くん…よければ、お願いします」

嫌というくらいにかわいい仕草でお願いされる。

いや、別にいいんですけど、ね…。

なんだか期待外れな勘が俺の心を取り巻いて、鶴屋さんをちらと見やった。

別に、朝比奈さんだからどうということじゃないんだが…。

「朝比奈さん、それ式間違えてます。3xじゃなくて4xですよその値」

「えっ？あ、ほんとだ…やだ、私ったら…」

「だからこれは相反方程式ですから、両辺をx二乗で割って、その

あと整理して……」

「ああ、ここでこの値を t と置くんですね」

「そーです。これで、あとは大丈夫ですね？」

「うん……ちょっと待って……あつ、できたあ！」

「ほーっ、よかったねえ、みくるっ」

「はいっ、虎野くん、ありがとう」

「いやいや、大した事はしてませんって」

実際、朝比奈さんは最初に問題を写し間違えていただけで。俺はその間違いを指摘したにすぎない。

それに、朝比奈さんは、本来こんな問題が解けないはずがない。なぜなら。

いや、よそう。ここでこんな事考えるのは。

「それにしても流石しずくん、数学得意だねえ」

出来るにこしたことはないのでやってる、と言えばそれまでですけど。

なんだか鶴屋さんにほめられると嬉しいな、とか思っていると、ふとある考えに思い当たった。

「ていうか、さっきの、鶴屋さんが朝比奈さんに教えればよかったんじゃない……」

「しずくん、モチはモチ屋という言葉があつてだねえ……」

要は、得意な奴に教われというわけか。

その分野のことは、その分野の人間に任せるのが、一番いい。

？

何だか、心に引っかかるものがあった。

だが、その時感じたのはそれくらいだった。

鶴屋さんとも朝比奈さんとも、今は何の気兼ねもなく、以前のように話すことが出来る。

だが、それは「今」の話。

二人とも、いずれ俺の「仕事」に何らかの形で関わってくることは

明らかなのだ。

それが、どうやって関わって、その後の二人の関係がどうなるのか、それは全く分からない。

俺がその頃持っていた、漠然とした不安。

その不安の序曲が、この日の授業中に。

突然やってきたのだ。

確か現国の授業中だった。

「すいません、ちょっと」

気分良く、小難しい古文調小説の解説をしていた国語教諭に、扉から控えめに声をかける人がいた。

昼下がり、クラスの少なくとも2割は睡眠学習体制に入っている教室で、その人はクラス全員の視線を集めた。

俺の見る限り、その人は事務の人のようだった。全校集会かなんかで見かけたことはあるが、教室で授業をしているところは見かけない人だったからだ。

「虎野くんってのは……いるかな？」

「はい？」

視線が、今度は俺に集まる。

事務の人が手招きするので、何だろうと思いつながら、ためらいがちに席を立った。

なんとなく気になったのは、目の端でなんとなくええ鶴屋さんの表情が、……ぞつとするくらい、にこやかだったことだ。

朝比奈さんや中田、他多数はキョトンとしていたのだが。

「家から、電話来てるぞ、すぐ帰って来いって」

で、聞かされたのはそんな話だった。

なんだ？ 一体何があったんだってんだ？

「何だが大変なことがあったみたいだったぞ、すごい剣幕で『いいから早く帰してくれっ！』って」

事情はよくわからなかったが、一つ確認しておきたかった。

「すいません、それ女の人の声でした？」

「ん？ああ、若い女の人みたいだったけど？お姉さんか？」

よくわかった、これは早く帰らないと殺られる。

教室にもどり、教科書をかばんに放り込む。

視線は相変わらず俺に集まったままだった。

とりあえず、教壇につつ立ったままの教師に一言。報告した。

「すんません、早退します」

なんとなく言葉足らずな気がしたので、付け足した。

「家庭の事情で」

クラス中が茫然とした雰囲気の中。

鶴屋さんが、笑っていた。

俺には、そう見えた。

誰もいない廊下を駆け抜け、学校の外へでる。

校門の外に、黒塗りのタクシーのような車が止まっていた。

助手席の開いた窓から、見慣れたサングラスがのぞいていた。

俺は迷わず後部座席に乗り込んだ。

「遅い」

助手席の窓を閉めながら、立花さんがそう言う。

「まじめ過ぎるのも考えもんだねえ？しずくん？ケータイの電源し
っかり切ってるし」

そりゃ、授業中なんで。当然です。

「連絡付かなくて困ったんだよ！気いきかしなさいよ！！」

そう言うのは、運転席に座る吉野だった。無茶言っな。

それにしても、一体どうして呼びだされるような事態になったのか
？てか、ぶつちゃ何が起きた？

立花さんに聞こうと思ったその時。吉野にあっさりと遮られた。

「行くよオ！つかまってなあ！！」

あまりに男らしすぎる掛け声と共に、吉野がハンドルを握りなおし

て、ギアをドライブに入れた。黒い手袋をはめた手が、目にもとまらぬ速度で不吉に動く。

体にとんでもない重力がかかり、座席に体が押し付けられる。せめてシートベルトを締めさせてくれ、と言おうとしたが。もうあまりにも遅かった。

車がスグースピードで走ってるのがわかった。正確には、とりあえず車が動いているのがわかったという次元の話だったが。

ドア上部についている、手すりにしがみついてなんとか体勢を維持していた俺であったが、その時、おそらく立花さんがつぶやいたのであろう小さなつぶやきを、俺は鮮明に覚えている。

「初『仕事』だねえ、しずくん」

本当にそう言っていたのか、空耳だったのか。

どうであるかは分からないのだが。

恐いぐらいに、印象に残っていた。

それはきつと、これが序曲だったから。

く桜色・第二章（3）く

C・eく第二章・（3）く

「ついたねえ」

いつ車が止まってたのか、てかいつまで走ってたのかすら俺はわからなかったが。立花さんのその一言で、とりあえずひと段落したことを知った。

「ちよつと！何寝てんのよ！氣い抜いてんじゃないわよ！」

ようやく体の感覚が、停止した車に戻ってきて、生きた心地がしてきた所で、吉野にそう叫ばれた、頼むから静かにしろ。

とりあえず、車はどこかの路地に停車していた。

俺は後部座席にへばりついており、吉野は相変わらず黒い手袋をはめたまま運転席に、立花さんは。

車の外で、なにやら携帯をいじくっていた。

胃腸がひっくり返るような感覚をなんとかおさえて、窓越しに立花さんを見やった。

「あいいい、位置ここで合ってるの？で、大丈夫？そつちはばれてないかい？うん」

何やら、あんま聞かんぼうがいいような話を携帯でしているようだった。もつとも、窓越しでよく聞こえなかったが。

再び視線を車内に戻す。ようやく狂った三半規管が回復し、脳みそが平衡感覚を獲得していくにつれ、俺の中で何か別の感覚が出現しているのに気がついた。

「？」

それは、どこかで感じたことのある違和感。

どこかへ、誘われているような。いや、いるべき所はここではないと体が言っているような。そんな感覚。

何かに呼ばれているような、そんな感覚で不意に車の外へ出た。
出てみるとそこはどこかの裏路地で、車も人もめったに通らない
ような、閑散とした通りであった。

傾きかけた陽が、路地を斜めに照らす中。電話を終えたらしい立
花さんが、そつと俺に言った。

「さ、行こうか」

俺はうなずいた。

何をすべきか、なぜかわかっていた。

こつちだ。

人気のない裏路地を、ずんずん進んでいった。

見たと事もない道であったが、どこへ向かえばいいか、なんと
なくつかむことが出来た。

「おつ」

思わず、声を上げる。

立花さんが聞いてきた。

「おや、ここかい？」

「はい、ここです」

そう答えながら、俺は自分の先に広がるものを見た。

何の事はない、相も変わらず人気のない路地が広がっているだけ
だった。俺には違ったものが見えていた。

「ほいじゃ、行こうかねえ？」

「はい……つてえ？立花さんも来るんですか？」

立花さんは、そりやそうでしょといった感じで言った。

「何のためについてきたと思ってるのさっ？」

「いやまあ、確かにそりやそーでけど。」

「さっ、早くいくよ？」

そう言っ立花さんは、すつと手を差し伸べてきた。

なんとなく気恥ずかしいながらも、立花さんの手をとった。予想
以上に柔らかくて暖かい手に驚いたりしながらも、進むべき方向へ

と向き直る。

後ろで、立花さんがクスツを笑ったのが聞こえたが、何で笑ったのかなんて気にしない事にした。

「立花さん、目を閉じていてください」

そう言いながら、俺は手を握っていない方の手を、前へ伸ばした。はたから見れば、虚空に手を泳がせている妙な風景に違いはないだろうが。

伸ばして泳がせた手が、何かに入り込むような感覚を感じ取った。手の一点から、少しずつ感覚が広がっていく、水の中に入るような、違うものに、空気の違いを感じるような感覚。

一步、踏み出せば、その感覚が半身を覆い。もう一步、歩くと、全身が包まれた。

そこであたりを見渡せば、どこまでも暗闇が広がっていた。何も見えない闇。

何も見えないが、どこへ向かえばいいのかは、なぜだかわかった。歩き出すと、つないでいる立花さんの手が、俺の手をさっきよりも少し強く握っているのに気がついた。

流石に、目を閉じて何も見えない状態だと、立花さんだって不安になるのだろうか。

だが、歩みは止めない。

そして、それほど歩かない内に景色がひらけた。

そこに広がるのは、先ほどの人気のない路地。

が、しかし。その景色はさつきとはまったく違う印象を感じさせるものだった。

一面の灰色。

色を失ったような景色が広がっていた。街並み自体は変わっていないが、空に太陽なく、周囲に人がいる気配が微塵もない。

全体がうす暗く灰色で、夜の様だが、建物に光はともっていない。沈黙した灰色に包まれたと言った感じだった。

「もう大丈夫です、立花さん」

俺は周囲を警戒しながら立花さんにそういった。

「ここが……かい？」

立花さんがつぶやくように言った。

「ええ、ここが、」

その言葉が出かかって、気づいた。この言葉を口にするのは、い
つぶりだろうと。

閉鎖空間。

その名の通りの、閉ざされ、一部の人間しか出入りできない空間。
もつとも、ここに来るのは初めてではないが。

「相変わらず、不気味なとこだねえ」

このうす暗さの中でさえ、サングラスをかけたままの立花さんが
言った。確かにそうとしか言いようがない空間だ。

この空間はいったいどういう空間なのか、なぜ発生するのか、ど
うして俺が入れるのか。

もし普通の人間がここに入ったなら矢継ぎ早にそんな質問をふっ
かけてくるだろうが。残念ながら、そのほとんどの質問で俺は十分
に答えられない。

Q・どういう空間なのか？ A・外部との接触の断たれた一時的な灰
色の空間。科学的には不明。

Q・なぜ発生するのか？ A・空間自体は『ある少女』が生みだすら
しい、多分そう。

Q・どうして俺が入れるのか？ A・そういう超能力者だから。
すまんね、そうとしか答えられない。

なにせ俺だって、「言えない」「んじゃなくて」「わからない」「んだ。
ただ、明らかなことは、俺は『三年前』に突然この力を得たらし
いということ。

その力は『ある少女』によってもたらされたらしいということ。
俺以外の『そういう超能力者』は、『機関』とう組織に集められ

ているということ。

そして、『そういう超能力者』の俺たちは、『この空間』でのみ、超能力者でいられるということ。

「どうも、こんにちは」

不意に、背後から声がした。

ぱっと、振り返ろうとして、立花さんの手をまだ握りっぱなしだと気がついたが、その時にはもう立花さんが手を振りほどいていたかと思うと、ジャカツ、という音と共にもう拳銃を構える立花さんがそこにいた。早い。

立花さんが拳銃を向けた先にいたのは、

「……どうやら、はじめまして。と言っておくのが適切でしょうか？」

背は少し高め、俺が言うのもどうだと思うがルックスはいい、飄々とした態度と嫌に丁寧な口調。そしてなんだか顔に貼り付けたような微笑み。

立花さんに拳銃（一応言っとく、多分マジチャカである）を向けられても、顔色一つ変えず、微笑みを顔に貼り付けたままのコイツ。俺にはその顔に見覚えがあった。

「古泉、一樹か？」

「おや？あなたとは初対面ではありませんでしたか？」
そいつはすこし驚いた様子で言った。

「いんや、ツラを合わせるのは多分初めてだ」

そう、『会う』のは初めてだ。

そうか、コイツか。と俺は確信した。

四枚の『リスト』の内、見覚えのない二枚のほう。

なるほどな、そしてコイツもここにいてことは。つまりコイツもか。

「お前も超能力者ってことか」

「『お前も』とききましたか、ええ、まあ。否定はしませんが。『

機関』の人間であると言えば十分でしょうか？」

微笑んだまま、返してくる。

「実を言つと、僕もあなた方のことは知っていたんですよ」

そう語りだしながら、古泉は立花さんの方をちらと見た。立花さんはまだ拳銃を構えっぱなしだったが、古泉は別段ひるむ様子もなかった。おい、マジでやる時はやるぞその人は。

「今、僕があなたたちに接触したのも、上から言われたことでして。今回僕はちよつとしたあいさつに來たようなものなんですよ。上も、いつかは『こうなる』と思っていたんでしょね」

ずいぶんとひつかかるいい方をしゃがる。

「『こうなる』ってなんだよ、お前の上は俺らが何すると思つてんだ」

「強いて言えば、今回の様に、『この空間』へ干渉することです」
古泉はキツパリとそう言った。

「あなたが『この空間』に入る力があることは認めます。それはあなたが超能力者であり、僕たちと同類であることを証明しています。ですが、あなたは『ここに入ることしかできない』、ということをお忘れしないで下さい。我々からしてみれば、同じ『使命』を負いながら、その『使命』を果たすことも出来ない方に、無駄に振り回されたくないですよ、わかりますか？」

くそつ、と呟きたくなつた。コイツの言うことは正しい。

それはどういうことか？それは多分、もう少し時間がたてばわかるさ。いや、もうすぐかな。

この空間が出現する真の理由が、俺の存在意義を霞めるのだ。こいつが言ってるのはそのこと。

「ふん」

突然、口を開いたのは立花さんだった。そういえばさっきまでずっと黙っていたが。

「そりゃあ、あんたらの都合じゃないのかい？それも勝手なね。あたしらが関わろうが関わるまいが、あんたらにや関係ないだろう

に？逆に言やあね、あんただけが『あの娘』に関わる権利を持ってるって勘違いすんなって、あたしは思うけどねえ？」

古泉はゆつくりと立花さんに向き直った。いつの間にか、立花さんは拳銃を降ろしていた。まだ手に持ってはいたが。

「我々からしてみれば、あなたが一番の危険人物なですよ？立花さん？」

古泉が、先程よりいくらか冷徹な口調で立花さんに言い放った。なんだそれ、立花さんが何かしたってのか？

「あまり『機関』を挑発されるような行動をとられると。我々もそれ相応の対応をしなければなりませんので」

「下っ端定番の口上だねえ、あたしが怖いならそう言いな？」

俺が付いていけない中、挑発しあう（ように見える）二人は、お互い睨み合って動かなかった。

そして、時間がやってきた。

青い光が、俺のはるか後方から昇った。

古泉は立花さんから視線を離し、青い光へと向き直った。

灰色の世界に、何よりも目立つ巨大な青い光。それが、ビルの高さ以上の人型になっていく。

『この空間』が発生する真実の意味。

これが現れた途端、俺の存在意義は無に帰す。

誰も、何もしゃべらなかつた。

く桜色・第二章（４）

C・e第二章・（４）

巨大な青い光が、灰色の街をやたら明るく照らし出す。

やがてその光は巨大な人型にまとなり、頭と思われる部分に顔と思われる赤黒い光を付けた。

その人型の光が誕生する瞬間、それはとてつもなく幻想的で超常的な光景だ。

人によつては感動を感じるし、恐怖にも感じる光景であろう。

ふと、俺はどちらだろうと考えた。

そしてかき消す。そんなこと、どうでもいい。

「さて、」

古泉が口を開いた。

「そろそろ、危険ですのであなたがたは退去なされた方がよろしいと思われますが？」

そっけなく言いやる。

「あんたこそ、さつさとあたしらなんて放っておいて行かなきゃいけないんじゃないのかい？」

立花さんはやはりケンカ腰で応対する。

古泉はふつ、と不敵な微笑を見せた後、俺に向かって、こう言い放った。

「ええ…、残念な事に。私は暇では無いですからね。力を持ちながら、『神人』を倒す使命を持たない方、とは違いますからね」
露骨な嫌味であつた。俺にとっては最大級の侮辱である。

『神人』。こいつら『機関』の人間はあの光の巨人をそう呼ぶ。

そして、少なくとも『機関』に所属する『超能力者』たちは、この『神人』を倒す力を持ち、なおかつ、この空間に出入りできる。

では、俺はどうであるのか？

俺が、この『超能力』を持ちながら、機関の人間にならなかった、いや、なれなかった。その最大の理由は、

「では、これで失敬させていただきます…。『同じ使命を持つ仲間達』のところへ行かねばなりません」

意地悪く笑いながら（少なくとも俺にはそう見えた）、そいつは俺らから二、三步後ろに離れた。

そして、少し距離を取ったのを確認してから。古泉はその『超能力』を発動した。

瞬間、古泉の姿は赤い光に包まれた。いや、古泉自身が赤い玉になった。

そして赤い玉は俺たちの前で浮き上がったかと思うと、高速で

『神人』の方へ 飛び立って行った。見ると、青い光に照らされた『神人』の周囲には、同じような赤い玉が飛び回っていた。と言っても、ここからでは遠く、小さく赤いものが飛んでいるのが見えただけだったが。

巨大な青を取り巻く、多数の赤玉。

しばらくもしない内に、『神人』はその巨大な腕を振り上げ、近くにあった、『神人』と同じくらいの大きさのビルに、振り下ろした。

「うわっ!？」

立花さんが珍しく、驚きの声を上げた。

無理もない。『神人』は、上げた腕を振り下ろしただけで、その先にあつたビルを完全に倒壊させていた。ビルはすさまじい轟音と地響きをおこしながら崩れていく。

「かぁーっ……ハデにやるねえ……」

俺は目の前の光景に目を見張りながらも、立花さんの言葉に冷静に同意していた。

なぜか頭は冴えわたり。目の前で起きていることを『当然のこと』として俺の頭はとらえているようだった。光の巨人が灰色の街を壊

していても、何も感じていなかった。

なんだろう。今目の前で起きていることの理由を、始めから全部知っているような……そんなよくわからない感覚。

『神人』はなおも、周囲の建物を破壊する活動を続けていた。

動作は比較的ゆっくりだが、圧倒的な力でひたすら壊していく。ビルをへし折るだの、踏みつけるだの、押し倒すだの、あつという間に『神人』のいる周囲は廃墟以下の荒れ地へと変貌しているようだった。目の前に建物があつて実はここからじゃ良く見えないんだけどさ。ビルの屋上とか行けば、きっと世紀末な景色が見れるだろうが。

と、そこへ。

再び腕を振り上げようとする『神人』の顔（と思われる部分）をかすめるように赤い小さな玉が横切った。

『神人』は一瞬ひるむような動作をした後。そのスキを狙ってか、今まで『神人』を遠巻きに囲んでいた赤い玉が、一斉に『神人』への包囲をせばめた。様々な角度から、『神人』へ高速で接近していく。

「……………ちっ」

目の前で繰り広げられる、一般人にとっては理解の範疇にとうていおさまるはずもない戦い。

それは同時に、俺の絶対的にどうしようもない『超能力者』としての欠点を見せつけられているのである。

そう、俺と、今目の前で神人との戦いに参加している『超能力者』との最大の違い。

俺は、『神人』と戦えない。

理由は単純。俺はあいつらみたいに赤い玉になれない。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

なぜだか知らないが、『超能力者』はこの空間に出入りし、出現

するあの『神人』とやらを倒し続ける『使命』を負ってやがるのだという。

そうしないと、いけないそうだ。誰が決めたかなんてするか、知りたくもないね。

ちなみに、俺にも『神人』と戦う力が全く無いわけじゃない。

俺は左手を前に突き出し、手の平を上に向けた。

そして一回その手を握り、もう一回。左の手を意識しながら手を素早く開く。すると。

バレーボールくらいの大きさで、きれいな球体をした赤い玉が、手の平の上に音もなく浮かび上がった。

効果音をつけるなら、ぼっ、って感じだろうが、素っ気なく、音も出ない。

ロマンもかつこよさもあつたもんじゃない、おまけに。

俺は、少し助走をつけて、ハンドボールの要領で『神人』に向かつてその赤玉を投げつけた。

我ながらなかなか勢いのある感じで飛んで行った赤玉であったが、『神人』までの距離は残念なくらい離れており。あんな大きさの玉では、その距離まで届く前に、目で見ることが難しい大きさになってしまつて、当つたのかどうかさえ分からなかった。

当つていたとしても、神人に何か変化があつた様子はまったく見られなかった（ちなみに当っているかどうかは立花さんに聞けばわかるが、虚しい回答以外が返ってくる可能性はゼロなため聞かない）。

中途半端な上に、まったくの役立たず。

それが、俺の持つ素晴らしい『超能力』だ。

サイコーだね、くそつたれめ。

「……あーあ、情けねえ……」

ぼそつと、自分で自分につぶやいた。

すると、立花さんが何か言いたそうな顔をしたが、何も言わなかったので無視した。

そーいえば、どうして俺ここにいるんだっけ？

なんだかんだで一番重要なところを失念していたことに気づいた。が、それはまた、ビルの倒壊とは違う地響きがその思考を遮った。散々周囲を破壊していた『神人』が崩れる音だった。

どうやら赤い玉諸君は協力しながら、『神人』の胴体部分を真つ二つにし、『神人』にあきらかに再起不能なダメージを負わせることに成功したようであった。

再生能力でもありやいいのに、と何か知らないが思った。

『神人』はうめき声を上げるわけでもなく、その体を崩壊させるがままとしていた。赤い玉はなおその周囲を飛び回り、執拗に『神人』の腕やら足やらを切断し続けていた。

意外にちまちました戦い方である。実務性重視って感じの。

『神人』があんなにスケールがでかいのだから、こっちもそれなりの大技かなんか出せねえのかな？

……あ、いや。普通に能力も使えない俺が言っただけはじまる話じゃないけどさ。

ここからでは視界を遮る建物があるため、よく見えなかったが。背の高さを半分以上に縮小され、おまけに行動不能になった『神人』は、どうやら塵芥となり消えうせたらしかった。さきほどまで青い光に照らされていた『神人』の周囲も、今は灰色の世界と同化していた。

ひとまずこれで、おしまいである。俺は本能的にそうだと確信した。

いままで『神人』を倒すために飛び回っていた赤い玉は、どうもそれぞればらばらに別れて帰っていったらしい。

が、その中の一つは（なんとなく予想はしていたが）、こっちに向かって飛んできて、俺たちの前で軟着陸した。

赤い玉の光が弱まり、次第にその中から人型が浮かび上がる。最後に、先程と変わらない笑みを貼り付けた古泉がいた。

「おや？まだいらっしやっただんですか？」

相も変わらず、微笑みながらそう言う。便利だな、その顔貼り付けてりや表情変えなくていいから。

おまけに、イヤミ言う時余計に憎たらしく聞こえるからな。

「どこにいようが、あたしたちの勝手だろい？ 違うのかい？」

立花さんが再びケンカ腰になる。なんでこいつにそんなに噛みつくんだろうか？

「ええ、まあその通りですが……」

古泉は変わらぬ笑みのまま言った。

「しかし、あなたたちがここに来てても意味がないのはもうわかりでしょう？ それを踏まえて、『機関』を代表して忠告させていただくならば。あなたたちは、ここに来るべきではない、と言わざるを得ないということです」

古泉はすらすらとそんなことを言った。俺が言うのも難だが、間違っていないような気がする。

癪に障るけどな。もろもろ全部ひっくるめて。

が、立花さんは不敵な笑みを浮かべて古泉を睨んでいた。

そして、詰め寄るようにこう言った。

「ふうん？ じゃあ、どうしてあんたはここにいるんだい？」

「はい？」

古泉が、微笑みを貼り付けたままキョトンとした声を上げた。

「何で『神人』を倒したあとまっすぐここに来たんだい？ あんたらのお上にそうしろと命令されでもしないとそんなことしないでしょ？ そもそも、あたしらが『機関』にとつて『意味もないのに勝手に空間に入ってくる』程度の重要性しか持っていないなら、何も『超能力者』であるあんたが直接、それもわざわざ『この空間』で接触する必要はないんじゃないのかい？」

「……どういう意味でしょうか？」

古泉の微笑が、わずかに曇った。

「困るんじゃないの？」

立花さんが、露骨ににやりとした。感じの悪いにやけだ。

「あたしらがここに居ちや困るから、あんたはわざわざここに来たんじゃないのかい？」

古泉は、特に何も反応していなかった。無視しているようにも、また、立花さんの言葉を計りかねているようにも感じた。

対して俺は、ぶつちやけ立花さんが何を言っているかわからなかったが、立花さんの側に立つ手前。訳知り顔で黙っていた。

「それは……」

古泉が何か言おうと口を開いたが、すぐにつぐんだ。

何か立花さんの言葉に思い当たるフシでもあるのだろうか？ 煮え切らないような、不気味な物を見るような目で古泉が立花さんを見ていた。よく見直すと、その表情は微笑んでいなかった。

まるで、何かを見透かされてしまったと。恐怖しているようにも感じた。

だが、俺はふと別の異変に気づいた。

「あつ」

思わずつぶやく。

ふと見上げた灰色の空に、いくつもの亀裂が走っていた。

薄い氷が割れるみたいに、空に入った亀裂はどんどん大きくなり。

パリン、と割れた。空が、バラバラと崩れる。いや、周囲の建物も、遠景も、全部が。

だが、崩れるのに何の音も聞こえることは無かった。無音の灰色はやはり無音で崩れていった。

閉鎖空間は、『神人』の消滅と共に消滅する。

ほんの数秒と数えない内に、灰色の空間すべてが崩壊した。

古泉と、立花さんと、俺。

一人は安心したような、一人は不敵な笑みで、一人は間抜け面。

三人はそのまま、おかしいところなど一つもないと信じて疑わずに回り続ける、いつもの世界へと、再び放り込まれた。

ここで一つ、自己反省じゃないが言っておきたいことがある。

この時の俺はまだ本当に何も知らなかった。

この世界の行く末とか、『機関』の奴らの事とか、宇宙人の存在とか、世界をぶち壊してしまうかもしれないとんでもない破天荒少女の実態とか、鶴屋さんの事とか。

だから、この頃の俺は本気でこう思ってたんだ。

また明日も、ごく普通の生活が送れる、と。

こんな出来ごとに遭遇しておいて何言ってただと思われるかもしれないが、俺にとってはそんなもんだった。

なにせ俺には『超人』に囲まれる生活が普通だったからな、このぐらいのことは、連休中に小旅行にでかけたような、ちよつと日常から離れただけだと思っていたのだ。

だが、次第に俺は気づかされていくことになるのだった。

俺の日常のなんてもん、スクラップにして裁断して粉々に砕いて献身しても、次の瞬間とんでもないことになってるかもしれない世界に俺はいるのだということ。

ああ、笑えねえ。

く桜色・第三章（1）く（前書き）

ようやく第三章。ここからやっと物語が動き始めます。

今までの展開があまりにゆっくりだったのを反省してます……

投稿直後に誤字修正してます、すいません。

く桜色・第三章（１）

C・e 第三章

GWが明けると、けだるそうな顔が教室に並ぶいつもの日々が戻ってきた。

四月はもうとつくに暮れ、桜はとつくに葉桜だ。

淡い桜色は、見る影も無くなっていた。

季節はこれから梅雨へと突入する前段階といったところ。春が少しずつ遠のいていく時期であった。

そう、そんな頃だ。俺が世紀に残る大失敗をしたのは。

俺の日常という歯車は、その頃……いや、その時にもうすでに狂いまくっていた。

その事実を俺に知らせたのが、ただ意外な人だったと言うだけで。

「元気ないねえ、しずくん」

GW明け一日目、だんだん暖かいを通り過ぎて来た日光を浴びながら、机に突っ伏す俺に、鶴屋さんがそんなことを言った。

「……そーっすか……？」

突っ伏したまま、顔を声のした方に向ける。我ながら確かに元気なさそうな仕草であると感じたが。まあそれは置いておいて。

ふと見渡せば、教室中がけだるい気分に含まれている。休み明けで、皆休日気分のままなのであろう。その中には当然、俺と似たような状態の奴もいるわけであって。俺の元気のなさが特に異常であるとは思えなかった。

ところが、そのことを鶴屋さんに伝えたところ。

「いんや、しずくんの元気のなさは異常っさ」

と、ちよっと心配そうな表情で返された。

心配してくれるのはありがたいし、嬉しくもあるのだが。

俺は自分が疲れている理由を思い起こし、そしてすぐに打ち消した。

言えん、こんなこと言える訳あるか。

確かに疲れているのは真実なのである。

事実、この三日間ほとんど寝ていないというのがその原因だが。

肝心なのはその『寝なかった』理由であった。

三日間、毎日夜中に立花さんが俺を叩き起こし。吉野が運転する、プロのドライバー＆スタントマン顔負けにアクロバティックな拳動をする車にのせられ、それだけで既に二日は寝込んでもいいグロッキー状態なのに、更に立花さんを閉鎖空間へと案内しなければならなかったのであった。

そして閉鎖空間で一連の動きを見、帰りは再びアクロバティック。前後不覚という状態で済めばまだマシである。

しかも驚くべきことに、起こされてから帰ってくるまでの全行程は一時間以内で終了するのであった。

あらゆる意味でめまぐるしいのである。これで疲れないほうが異常だ。

唯一の救いは、閉鎖空間い出入りした三日間。いずれも古泉、もとい『機関』の人間と接触することがなかったことぐらいだろうか。あの状態は他人だろうが、知り合いだろうが見られたくない。特にあのニヤケ野郎には。

だが、誰かに会おうが会うまいが、俺の睡眠時間と狂わされてしまった体内時計と一生分に相当する車酔いによるダメージはどうにもならない訳で。

結果、現在くたばっているという訳である。

寝不足にも程があるのだが、疲労感の割に昼間は眠くならないので困っている。幸いとすべきか、不幸とすべきか。

「んあれ？あ、またあの娘だ」

不意に、鶴屋さんが声を上げた。廊下のほうを見やっている。

「どうしたんですか？」

「あいや、少し前にも見た娘だなあ、と思ってさ」

少し前に見た娘？誰ですか、それ。

すると、鶴屋さんは少し困ったような表情をして。

「ほら、ちよつと前からウワサになってるじゃん。一年のすんげーべっぴんな娘がさつ。なんだがすんごく変わった娘らしくて、学校中の部活に入部して退部してたり、休み時間中学校うるついついてるって話」

そこですぐに見当がついた。あいつだ。

「涼宮ハルヒ、ですか」

「そうそれさつ」

鶴屋さんがうれしそうにあいづちを打つ。

それと同時に、

「へえ、閑歩。お前の口からその名が出るとはなあ」

と、どこからか声が飛んできた。

声のした方向を見てやると、我がクラスの愛すべき学級委員長。

中田が近づいてきていた。

授業の合間たる今は空席となっている俺の前の席へ腰かけると、続けて話し始めた。

「お前は噂話とかまったく興味持たねえだろうからまさか知ってるとは思わなかったぜ」

そんなことをのたまりやがった。まあ、否定はしないのだが。

「あんな、俺だって良い年頃の男子高校生だぜ？流石に噂話のいくつかは耳にとめておくつつうの」

へえ、そうかい。と中田は意外そうな顔をしえ、「やっと学生らしくなったのか、お前」とぬかした。このやろう。否定はしないけど。

一応中田の名誉の為に言っておく（俺の名誉か？）が、さっきの俺の発言はウソである。涼宮ハルヒと言う名は、噂で知ったのでは

ない。ていうか、そんな噂が流れているということはなんとなく知っていたが、それがそいつの事だとは知らなかった。噂もたまには聞いておくもんだな。

ではなぜ『涼宮ハルヒ』と言う奴を知っていたのかというと、…察しのいい方ならわかるだろう。

そう、四枚の『リスト』の内、最後の一枚
通称・『世界を終わらせてしまいかもしれない少女』
それが、涼宮ハルヒのものだった。

四枚の『リスト』は、どれも信じがたいことがさら々と書いてあるものだった。

例えば、古泉のそこにはさらつと『超能力者』と書いてあり、鶴屋さんのそこには『機関』の間接的スポンサー』とかあんまり知りたくないことも書かれていた。

それだけならまだいいが、朝比奈さんのそこには『未来人』とはつきり読み間違いが起こるはずもないくらいはつきり書かれていた。『リスト』の情報は特に断りが無い限り100%正確だ。しかしこの時は流石に信じられなくて立花さんに聞いてみたが、「間違いない」らしかった。なんてこつたい。俺も超能力者なだけださ。

だが、それ以上に信じられないことが書いてあるものが存在した。

『自らの願望を実現することが出来る、世界を終わらせてしまいかもしれない少女』

ぶっちゃけると、俺は今までに『仕事』に関することをほとんど聞かされていない。それがどうしてなのかは知らない。だが、『この少女』に関することはやたらみつちりと教え込まれた。

中学時代にその少女がおこした数々の奇行。有形無形、恐らくはどんなことでも実現することができるといふ『神』のような能力。そして、その能力が発動することを抑えている、少女の論理的思考

と常識。その絶妙なバランスによって保たれている安定。あの『閉鎖空間』は、あの少女のフラストレーションの具現化であるという事。そして、俺や古泉の『超能力』は少女から与えられたということ。

必要以上にいろいろ聞かされたような気もする。

それらのほとんどが、とても信じられるような話ではなかったのだが。

だがそれだけの話を聞いて知っていても、俺は涼宮ハルヒという人物を一回、それもちよつと見かけた程度でしか見ていなかった。もつとも、顔は写真で覚えているのだが。

しかし、一応は理解していた。『涼宮ハルヒ』が俺の仕事のいや、全世界の命運を握っているという事を。

まあこの頃はまだ半信半疑だったんだが。

「そういやそいつ、学校中全部の部活に入部して退部したって話だっけか。てことは、書道部にも来たんですか鶴屋さん？」

中田が鶴屋さんに問いかける。ああ、そっぴや鶴屋さんと朝比奈さんは書道部だったっけ。

「えっ？あ、いや、えーとね？」

なぜか、鶴屋さんは少し慌てて、つかえながら答えた。その様子はどうもいつもと違っていた。

ように見えたのは、俺の錯覚だったのだろうか。

「その時はさっ、ちようどあたしも家のことが忙しくってさっ。サボリ気味の時だったからわかんなくてねー。気が付いたら入部して退部した後だったと思うっさ」

口調はいつもの調子であったが、なんとなく答えに違和感を覚えた。

が、その時はどうもつつこむ気力がなかったため、「へえ」とあいつを打つくらいの反応だったが。

「あいたー、そいつは残念。俺そっぴや変な女けっこっ好きなん

で、話聞こうと思ったんだけどなー」

中田が頭をかきながら言う。お前そんな好みだったっけか。

「あははっ、キミそんな変わった趣味だったによる？」

鶴屋さんが笑って言う。中田も笑っていた。が、否定しないということは、そういう趣味なのか。

いつも通り、クラスメイト同士談笑している図。

その中で鶴屋さんはひときわ明るく笑っている。

屈託なく、快活な笑顔は。見る人全てを幸せにしまいそうな不思議な笑顔だった。

この後、その笑顔の裏。

他の奴らはほとんど見ることはないであろう、鶴屋さんの『違う笑顔』を見ることになるということに。

俺はまだ気づいていなかった。いや、気づけるわけがなかった。

そのあとの休み時間だった気がする。

昼休みだったかな、空腹と眠気に同時襲撃され、どちらを優先しようか少し迷った後、昼飯を食った後の方が快適に眠れるだろうとひとまず弁当に手を伸ばした時だった。

「おややつ、ホントに元氣無さ過ぎだよしずくん。動きがナマケモノみたいだよ？大丈夫？」

後ろから鶴屋さんの声が降ってきた。

「あは、大丈夫ですよ。休み明けで、ちょっと気合いが入らないだけですから……」

実態は、8割睡眠不足からきているのだが。こう答えたほうが無難だろう。変に詮索されないように気をつけねばならない。

と、思っていた矢先だった。

小声で、囁くように鶴屋さんは言った。

「ふーん……？……しずくん、目の下にクマ出来てるよ？」

「えっ！？」

あろうことか、俺は多少動揺し、取り乱した。目の下をあわてて触るが、触ってわかるもんじゃない。

しまった、これじゃ睡眠不足なのにそれを隠してるとのがバレバレじゃないか！なのに平静を装ってるなんて俺なんて恥ずかし…。

そこまで思った所で、俺は目の前に映る光景にア然とした。

目の前にあったのは、俺自身の顔だった。見ると、いつもより元気はなさそうだが、それ以外は特に何もない。少なくとも『目の下』には何もない顔がそこにあった。

鶴屋さんが、俺の目の前に手鏡を差し出していた。

あまりに突然のことで、俺の思考は完全にストップしていた。

「冗談っさ」

違った。俺の耳は一瞬、この言葉が誰のものかわからなかった。

少なくともいつもの鶴屋さんの声ではなかった。囁く声ような声であるはずなのに、耳にまっすぐ言葉が突き刺さるようだった。

でも、その声は誓って鶴屋さんのものであると確信できた。

俺の目の前から俺の顔がなくなった。鶴屋さんが手鏡をひっこめたのだ。

「寝不足は感心しないなあ」

俺は、鶴屋さんを恐る恐る見上げた。

するとそこには、今までに見たことのないような、うつすらと口は微笑んでいるが、目はちっとも笑っていない。不気味な笑みを浮かべた鶴屋さんがそこにいた。

「帰ったら、ちゃんと寝るによろよ？」

が、それも一瞬だった。もうこの時には鶴屋さんはもういつもの笑顔になり、口調も戻っていた。

そして俺の頭をポンポンと叩きながら去っていった。

俺はその後ろ姿を、人生の中でワースト3位に入るくらいの悪寒を感じながら、ただ、見送っていた。

もう、序曲は終わっていたのだ。

く桜色・第三章（２）

C・e 第三章（２）

GW明け、それを待っていたかのように事態が動き始めた。それが目の前の現実となつて現れたのは、GW明け当初のつらさを乗り切つて。ようやく一晩中ぐっすり眠れる夜がいくらか続いた後であつた。

「S・O・S……団？」

俺は目の前に置かれた藁半紙のチラシから、その団体名をとりあえず読み上げた。

そして、俺の机にそのチラシを置いた張本人、中田が「そう」とあいづちを打った。

俺はもう一度チラシに向き直り、団体名と併記されている「世の不思議」を求めているという意を述べている文を見。その意味不明すぎる文にいささか困惑しつつ、このチラシの存在そのものが不思議だろうという結論に至つて俺の思考は中断した。

「なんじゃこりゃ」

「そうなんだよ。なんじゃこりゃ、なんだ」

俺の率直な感想に、中田はカラカラ笑いながら反応した。

「ただ、こつからわかるのは、入学から一月余りで、校内最高の知名度を得た変人美少女が、どうにかこうにか変な団体を立ち上げたらしいということだ」

直接名前を言わずに、個人を特定できるよう話すところに、なんとなくコイツのいやらしさを見たようなきがしたが、そんなことは置いておいて。

「涼宮ハルヒ、か」

その名をつぶやいた。

通称、「世界を終わらせてしまいかもしれない少女」の名を。

正直俺は困惑していた。今まで『リスト』にある四人の中で、一番動きがなかった（部活に入ったり辞めたりはしてたようだが）にも関わらず最重要人物だったあいつが動き出した、ということに。

もちろんそれが具体的にどういった変化を及ぼすものなのかはわからなかったが、嫌な予感のすることだけは確かだった。

どうも、薄気味悪い。

そう考えていた矢先のこと。

「やあやあ！しずくに中田うち！おはようさんっ！」

いつもの跳ねるように快活な声。鶴屋さんだった。朝一番フルスロットルである。

適当にあいさつを返す俺たちの横に、鶴さんはやってきた。

が、俺はその姿になんだか違和感を感じた。それはこの前鶴屋さんに手鏡を突き付けられた時の不気味なものとはちがったが、何か足りないような、そんな印象を受けた。

そこでふと気がついたのは、いつも鶴屋さんの後ろでひかえめにあいさつしてくれるあの人の姿が見当たらない。

「あれ、鶴屋さん。朝比奈さんは？」

後から考えると、これが地雷だったらしい。

その場の空気が、一瞬で張り詰めた。

え？何だ。俺なんかまずいこと言ったか？

本日最高度の困惑に陥る俺に、中田があきれながら助け舟を出した。

「ああ…鶴屋さん。こいつ、いつも即下校で放課後ちつとも学校にいねえから、わかんないんですよ…バニーガール事件を」

「バニーガール事件？」

聞き慣れ無さ過ぎる言葉に、思わず聞き返す。その際、反射的に声のトーンが上がっていたせいで、周りのクラスメイト数人の視線を集めてしまった。中田がしーっ、と口に指をあてる。

「お前ほんとに知らんのか？このビラが配られた方法を？」

中田はヒラヒラと、先程まで机の上のせていたチラシを、俺の目の前に持ってきて言った。

「知らん、配り方くらいどうにでもなるだろうが」

「ならなかったんだよ、あの変人美女にかかると、な」

一息入れ、周囲に少し視線を配った上で。中田は話し始めた。

「事の発端はな……。昨日の放課後、それも割とすぐ。正門に突如……二人のバニーガールが現れた」

「はあ？」

「まあ最後まで聞け、……いいか？その正門に現れた二人のバニーガール。一方はその変人美女だったんだが、もう一人は誰だか、わかるか？」

んなもんわかるわけね……ってあ、まさか。

「そのまさかだ、あの朝比奈さんが、超セクスイー・バニーガール姿で正門のところに立ってた。

……何がどうしてそうなった。

「知らん、だがこれはマジだぞ。バニー美女のツートップが、正門を通りかかる人に無差別ビラ配りテロを敢行したんだよ。お前あれは世界の終わりかと思っただね。やっぱあれだな、バニーってのは古風なエロさが漂っていいねーな！もうあれだ、あのバニー二人には恐らくこの世の男の九割は目線釘づけ間違い無しかった！本当だぞ？写メとったから見るか？」

そう言うなり、中田はケータイを取り出して、頼んでもいないのに写メを見せてくれるらしかった。

いや、なんつうか。そんな奴だったっけ、お前。

「バツカおめー、エロは世界を救うんだぜ？」

知らん。

ケータイをいじくっていた中田は、ずいっと俺の前のケータイ画面を押し付けてきた。

見ると……なるほど、確かにそこには、背景が正門なのがもった

いないくらいの。素晴らしい光景が写し出されていた。

なんていうか、ありがとうバニー。」

中田が器用にケータイを操作し、俺に見せながら画像を切り替えていく。…顔アップ、ヒップ、バスト、上半身、なぜかうなじのアップ。朝比奈さんのばっかだったが、しっかりもう一人も撮ってた。

「……………」

涼宮ハルヒ、か。こうして見ると、なるほどこりやどえらい美人だ。じっくり顔を拝んだりなんてことはなかったが分、新鮮な発見だな。そんでもってなるほど確かにスタイルがいい。で、中田君よ、なんでまたうなじのアップがあるのかね？

中田がさらに画像を切り替えると、今度はバニーガールに駆け寄る教師陣の写真だった。俺にいつも絡んでくる生徒指導の奴もいた。

「だが、天国は10分と続かなかった…まあ、泣きじゃくる朝比奈さんをバッチリ撮れるアングルに移動してくれたのは感謝だぜ」

今度は連行されながら泣きじゃくる朝比奈さんの写真が写し出された。なんていうか、あれ、扇情的です。

ところが、そう思いながら画面を見る俺の目の前から、ケータイが忽然と姿を消した。

「はい、それまでーっ！このけしからん写真群はたった今このあたしが預かったあ！」

今まで沈黙を守っていた鶴屋さんが、突如実力行使に出た。中田からケータイを取り上げ、何か操作している。

「えー！ちよつとお！写真くらいいいじゃないですか鶴屋さん！みんなそれくらい撮ってますよあ！」

「はいはい、それをあたしの前で公開したのが運の尽きさねっ。ほいつ、消去っ」

「んなあああ！そりやないですよ鶴屋大明神さまあああ！」

中田の絶叫も届かず、画像は無事に葬られたようである。ちょっと残念。

「うわーっ！本当に全部消えてるーっ！？んな無慈悲なーっ！」
中田が取り上げられたケータイを取り返した時には、もうすべて終わった後であった。どんまい。

どうやら画像を失ったのが相当ショックであつたらしい、中田は「そんな…」とかぶつぶつ呟きながら、自分の席に戻っていった。
まあ正直、自業自得だけだな。ふらつきながら遠のく背中にななこととても言えなかったが。

そこへ、鶴屋さんがゆつと寄ってきた。

「あれえ？しずくんも残念そうな顔だねっ？……ひょつとしてしずくん、かわいい顔してスケベさんかなっ？」

いやそんなことは…と言いつ返そうとして、己の口元を触ると、何かにやけていた。体は正直つてやつか。

「それにしても、あの朝比奈さんが…あんな格好するなんて…」
あはは、とか適当に笑いをつくらつて俺が言う。

「無理やりさせられたのさっ！でないとみくるはあんなことしないよっ！」

多少憤慨気味に鶴屋さんは言った。

でしようね。今朝比奈さんが休んでいるのは、そのトラウマ決定の記憶から逃れるため、つかそりや学校来れねえわな。あんなこと無理やりやらされたら。

それにしても、朝比奈さんと『あいつ』。一体なにがどうしてつながつたのだろう。

二人とも、『リスト』によって無駄に知っていることが多い分、あまりに共通点のない二人がどうしてダブルバニーになるような事態に？

これも、『あいつ』の力なのか？

ふとそんなことを考える。確証はないが。

そう思考に浸ろつしていると、がらがら、と教室の引き戸が開く

音がして。少し薄毛が気になるらしき、化学の教師が入ってきた。てっぺんが禿げるタイプの薄毛持ちだ、バーコードにはしていない、中途半端に残すくらいなら全部剃ればいいのに。おやっさんみたいに。

ってうげ、そっぴや一時限目は化学だったけか。

苦手なんだよなー化学。モルとか、クロマトグラフィーとか？さっぱりだぜ……とか俺が割とどうでもいいことを考えながら、化学の教科書を机の中から引っぱり出した時だった。

「……あれ？」

机の上に、中田が残していったはずのチラシ……SOS団の所信表明うんたらかんたらのビラが、なくなっていた。

おかしい、放心状態の中田がそのまま放っておいたはずなのに。風にでも飛ばされたのかと思っただけを、あたりを見まわしたが、チラシの影すらなかった。

「……きりーっ」

中田の元気が無い声で号令がかけられたため、いったん探すのをやめたが。その後も見つかることはなかった。

「れー……」

いや、その日の夜までは。

「ちやくせきー……」

どこを探したって見つかる訳なかったのだが。

まず、その日の放課後はおかしいと思った。

授業が終わる頃には、消えたチラシの事なぞ気にもとめていなかった俺は。その日まったくの唐突に、鶴屋さんから「一緒に帰らないかいっ？」とのうれしいお誘いを受けたのだった。

何でも、本日は書道部が休みで、おまけに朝比奈さんがいないので一緒に帰る人がいないのだという。

朝比奈さんには悪いが、何という幸運。

うん、幸運だった。

その後、鶴屋さんと他愛もない話で盛り上がったたり、通りかかったお店にたまたま置いてあったいかにも売れ無さそうな商品についてくだらん議論に花を咲かせたり、夕日をバックに大笑いする鶴屋さんに見とれてたり……。

非常に健全で楽しい、高校生の放課後を楽しんでいた。

ついつい楽しくて、鶴屋さんの家（これがとんでもないでかさの屋敷なんだが）の近くへ来ても話しこんでしまい、気がつくとい日暮れてしまっていた。

その後、流石に残念そうにしながらもお互い別れたのだが。すさまじく幸せな気分が俺が帰宅したのは言うまでもない。

そうだな、強いて言うなら。幸せすぎたのかも知れない。

家にたどり着き、今日の夕飯は何にしようかと考えを巡らせていた頃。

いつもの要領で開いた郵便受け。

たった一通だけ入っていた、見覚えのある『それ』に、俺の幸福感はどうかに吹っ飛んだ。

桜色の見慣れた封筒が、ただ一通。

もう桜なんて、どこにも見えない季節なのに。
ただ、あった。

く桜色・第三章（3）く

くC、e 第三章（3）く

「行つてきますっ！」

五分前に入つたばかりの家を飛び出す。

日中の春の陽気、それを忘れ去つたかのような暗い道が続く。

ぼつぽつとしかない街頭、無機質な明りで照らすそれを辿るように走る。

行く道は、通い慣れた道。

北高への道、だ。

日はすっかり暮れていたのだ。

家に帰ってきて、目にした封筒。そこには一言だけ、そっけなく文字が書いてあった。

『見たらすぐ開けるように』

その筆跡が立花さんのものであると確認するまでもなく、俺は封筒を破るように開いた。

中には白い紙。パーティの招待状とかに使いそうな、ポスターのサイズ。

裏表真っ白なその真ん中に、何かの文字列が書かれていた。

『何か』と言ったのは、おおそ一般の人間には読めない言語で書かれているから。

その分野の学者でもない、さらりと読めたりはしない文字列だ。俺には読めるからいいのだが。

その意味を解した瞬間、俺は家へと駆け込み、おやっさんに出かけるという旨と、遅くなるかも知れないから夕飯は適当に頼んだと伝言。荷物を放り出し、明にただいまといい、冷蔵庫にちゃんと食

材があるか確認し、冷たい麦茶を一杯、腹に流し込んで、そして家から飛び出した。

文字列を意識するところだった。

『北高正門前、すぐ来ること』

いつものんびり歩くと長い通学路も、走るとなかなか短い。

自転車で行けて？もってたらそうするさ。

しかし長距離は嫌いな方じゃないが、なるほどこうしてみると意外と気分がいいかもしれない。

もつとも、北高へ至る最終難関。長大な坂道を登り終えるころにはそんな気分は消えうせていたが。

体力が切れて苦しかったからというのもあるが、

坂道の頂上、正門前にいる人影を発見したからでもあった。

「走って来るとは、感心感心」

正門前、門横の壁に寄り掛かる立花さんが笑いかけてきた。

「『すぐ』と書いてあったんで」

俺は多少の息切れと脚にたまった乳酸を引きずりながら、立花さんの前で歩みを止めた。

「さて、仕事だよ」

休む間など立花さんがくれるはずもなく、矢継ぎ早にしゃべり始めた。

「もう知ってつと思うけど、涼宮ハルヒがSOS団っていう、なんだかよくわからない団体を立ち上げた。もちろん学校側公認じゃないけど、その存在は校内で知らない人はなし。当然、しずくんも知ってるよねえ？」

俺はうなずく、肯定だ。

とはいえ、中田がチラシを持ち出してこなきゃ知らなかったかもだが。

「よろしいつ。では、そのSOS団が文芸部室を本拠としている

のは知ってるかい？」

首を横に振る、否定。

そんなことしたこっちゃねえ。

「いかんねえ…、その意識の無さはまだまだだねえ。まあ、今はいいや。いいかい？今は、そのSOS団が何をどういう活動してるのか、しようとしてるのか、どなくなくだらないことでもいいから、少しでも情報を手に入れることが先決なのさ」

俺の反応をうかがいながら、立花さんは続けた。

「今回は、文芸部室を調べるよ」

そう言って立花さんは自分のジーンズのポケットをまさぐった。

何かを取り出し、俺に差し出す。俺が手のひらを出して受け取る意志を示すと、チャリン、とそれが手のひらに落ちた。

それは、何かの鍵だった。

その辺の市民プールのロッカーキーみたいにオレンジのタグがついたその鍵。何の鍵かは大体想像がついたが、そのタグに記された文字を読む。

『文芸部室 予備』、だとさ。

毎度思っんだが、あんたはどっから取ってくんだ、こついうの。

「そいつで文芸部室に入って、部室になにかがあるのか、本来あるはずのないもの、おかしいもの、あって不思議でないが、なんか不自然なもの、……なんでもいいから、調査すること。メモもつとつて、後でちゃんと報告出来るようにしとくんだよ」

そう言うなり、立花さんは俺に手の平サイズのメモ帳を押し付けた。ご丁寧にペンもつけて。

「ほいじゃ、がんばってね」

くるつと回り、背を向けた状態でひらひら手を振りながら、立花さんは立ち去ろうとする。

で、ちよつと待った。あんたは帰るのかい。

「て、立花さんは調査しないんですか！？」

「あたしゃあね、忙しいのさ」

顔だけこっちに振り向いて、立花さんはさらっと言った。

「そうじゃないとしくん呼んだ意味ないじゃん。あたしで出来たら一人でやるよっ」

そりゃー…、そうでしょうけど。

反論したいのだが、なんか反論できない俺を置いてけぼりに。立花さんはゆっくりと闇に消えていった。

その後ろ姿が見えなくなる直前、「うまくやんなよ…」と聞こえた気がしたが、俺は応えなかった。

鍵さえあるなら、夜の学校に侵入して、部屋を調べるなど造作もない。

と、今どき鍵のかかってない正門をゆっくり開けながら思いついた。不用心だな、この高校。さすが平和な国。

『うまくやる』もどうもこうもないだろ、と。

そう思ってたんだ。

「およ？あ！しくんだっ！やつほーい」

その声を聞くまでは。

結論から言うと、俺の余裕は五分と続かなかった。

昇降口の扉をゆっくりと開け、今まさに学校へ踏み込む、というその時。

後ろから飛んできた明るい声、俺の鼓膜は、それを鶴屋さんと断定するのに一秒とかならなかった。

ドキッとして振り返ると、そこには夕方下校した時と同じように制服に身を包んだ、いつもの鶴屋さんが立っていた。

なんでここに、と脊髄反射的に言おうとして飲み込む。落ち着け、まずは落ち着け俺。

「あっはは！しくん何そんなにコソコソしてんのさっ！？ドロボーみたいだよっ」

まあ、似たような後ろめたさはあるかと思いますが。

と、そんな事を考えてる間ではなかった。この状況をいかに説明すればよいのやら。

「いやー、それにしてもしずくんもとは。奇遇だねっ」

「え？」

「しずくんも忘れもの、取りに来たんでしょ？でなきゃこんな時間になんか来ないっさねー」

「え、あ、はあ、まあ、そうです…ね……」

鶴屋さんに言われて、慌ててうなずく。思えばそれが一番まっとうな理由である。助かった。

「じゃ、一緒に取りにいこっか。教室でしょ？」

言うなり、鶴屋さんはガラスと昇降口を開け、大胆に侵入した。校内には宿直の先生とかいるはずなので、あんまり見つかりたくない俺としてはあまり物音を立てたくなかったのだが。そんなこと知る由もない鶴屋さんは、つつ立っている俺に手招きして言った。

「はらはやくっ、別に悪いことしてないんだからさっ？」

そうして、半ば勢いに押されて俺は校舎へと侵入した。

とりあえずこの時俺は、まあ仕方がない。と思った。

とにかくこの場合は忘れ物を取りにいっくフリをして。鶴屋さんと別れた後、改めて文芸部室に行こう、と考えた。

まあ、俺にこれ以上の判断を要求するのは。無理だったろう、気が動転してたし。

だが、最悪の判断だった。俺は太甘だったのだ。

それに気づくのさえ、五分とかからなかった訳だが。

昇降口を過ぎて、廊下に出ても人影はなく。ただ静かな夜の校舎。蛍光灯がついてない事以外は、なんら変わらないいつもの学校だ。足元がすこし見づらくくらいの廊下を、並んで歩く俺と鶴屋さん。廊下には無駄に非常灯がついている（電気消してもついてる薄いみどりのアレだ）ので、お互いの表情までは見えないものの、どこにいるかくらいはわかる明るさだった。

少し歩くのをためらいそうな暗さだが、鶴屋さんはズカズカ歩いていく。それにならんで、俺も。

そのズカズカ歩く姿が、なんとなく立花さんに似てるなとか思ったが、言わなかった。まあ、言ってもわからないだろうし。

「夜の学校つてのもなかなか雰囲気があるねっ」

ふと鶴屋さんがそんなことを言った。

「ええ、まあ、そうですね。もちっと迫力があってもいいですけど、なんか出そうな感じとか」

もつとこう、お化け屋敷並みに不気味かと想像していた俺が、正直にそう言つと。鶴屋さんはクスクスと笑った。

「もうっ、しずくんはロマンチックの欠片もないっさねえ」

何か場違いな事言つたのだろうか、俺。

そうこうしてるうちに、階段の踊り場まで来た。

並んで歩くそのまま、階段をいつもより少し慎重に上る。

「よっ、と。しずくん、大丈夫？足元見えてる？」

踊り場のところに丁度非常灯が付いているが、そうなると逆に階段の半ばが一番暗いということになる。俺を心配したのか、鶴屋さんが声をかけた。

「大丈夫ですよ、夜目はきく方なんで。鶴屋さんの方こそ大丈夫ですか？」

答えながら、なんとなく何かがひっかかった。

「あははっ、あたしはいつも鍛えてっからねー。ちつとくらい足元見えなくても、すつころんだりしないによるよ！」

うん、そうだ。足元が見えにくい。ん？なんだ、何かがおかしい。「ずいぶん頼もしいこと言いますね、一体なにで鍛えてるんですか」

階段を上り終えた。踊り場の非常灯が、目的地へ続く廊下も照らしている。

「鶴屋家に代々伝わる、鶴屋流古武術っさ。伝統あるし、役に立つよ？しずくんもどうだいっ？」

階段を上れば、あとは廊下を直進するだけだ。目がだいぶ暗さに慣れて、鶴屋さんの表情がぼんやり見えるようになる。

「いやー…、遠慮しますよ。あんま荒っぽいことはできないんで…」

そうだ、どうして目が暗さに慣れる？暗いから。そりゃそうだ、じゃどうして暗い？

「えー、しくんひ弱そうだし。ちゃんと鍛えないとだめによるよ？自分の好きな女の子くらいは守れるようになってくれないとねっ」
電気がついてないからだろ、そりゃそうだ。ん？なにかおかしいところがあるか？

「そんなこと言われても…、あ、大丈夫ですよ、僕は強い人を好きになっておきますから」

まあ、鶴屋さんみたいな人ならしっかり守るつもりですが。って、そうじゃない。何かがおかしい。

「まーたーまた。そうやって逃げないっ」

そうこうしているうちに、目的地の教室までやってきた。

非常灯のぼんやりした明りが、見慣れた教室の扉を照らしている。間違いなくここだ。

鶴屋さんが扉に手を掛け、カラカラと開けた。

そこには、廊下より暗い感じの、いつもの教室が広がっていた。

「まあ、一つ言っとくと」

鶴屋さんが不意に言った。さっきの会話と声のトーンは同じだ。

「女の子は、みんな意外と強いけどね」

暗がりの中で、にこりと笑ってそんなこと言う鶴屋さんの姿を俺の夜目はとらえた。

とらえたと思ったその時だった。

パチン、と。無機質な音がする。どこかで聞きなれた音。

「わ、」

途端に、さっきまで暗かった世界に光が満ちた。

教室の蛍光灯がついたのだ。つまりさっきのはスイッチを入れる

音。

暗がり目が慣れていたせいで、大量の光に思わず目をつむる。とても目を開けてられない。

まぶたの向こうに広がる光の世界を感じながら俺はようやく気がついた。

頭の中でぼんやりしていたひっかかりが、確かな疑問へと変貌する。

そうだ、どうして。

どうしてここに来るまでに、電気をつけなかったんだ…？

ようやく疑問にたどり着いた俺をしり目に、鶴屋さんは教室の中へ進んで行った。

「いやー、英語の教科書忘れるなんてついてないっさねー。あたし明日訳で当てられるってのにさっ」

目を閉じた暗闇でその声を聞きながら、俺はまぶたの向こうに確かな危機を感じた。

なにかが、危険だ、と体に警告していた。

ようやくうつすら目を開けることができた俺の目は、まず鶴屋さんをとらえた。

いつもの鶴屋さんだ。教室に立つ、いつもの鶴屋さん。

その安堵と、ついさっきの疑問符と、出所不明の警告。

頭にうかんだそれらは、飛んできた声にはじき飛ばされた。

「ねえ、しずくん」

恐ろしく冷徹な声が飛んできた、感情を殺したような声。

だが、それは確かに『鶴屋さん』の声だった。信じられないくらい、確かに。

手鏡の時以上の冷たい声が俺の鼓膜を揺さぶった。

「……しずくんの忘れものって、何？」

目を開いて確かに鶴屋さんの姿をとらえた俺は、その声の発信源

は鶴屋さんだと二重に把握し。

また、あの、不気味な笑みを浮かべる鶴屋さんを見た。
そして、見た。

その鶴さんがこちらに差し出す手。その手に、オレンジ色の夕
グが見えた。

見てしまった。

笑えない事に、二人きりの教室で。

笑えない事に、二人きりの夜の校舎で。

笑えない事に、今さらさっきのやりとりでの『ロマンチック』の
意味を把握して。

冷や汗が一筋。

俺の額を流れて落ちた。

く桜色・第三章(4)く(前書き)

どうでもいい話ですが、このお話からとうとう原稿をデジタル化！
でもお話のぐだぐだ感のアナログ原稿時代と変わらないのであしからず)

く桜色・第三章（４）

Coloring envelopes 桜色・第三章（４）

光に満ちた教室で、俺は鶴屋さんと二人っきり。

ああ、ちくしょう。なんてしあわせ空間だバカヤロー。

光量が多い蛍光灯の人工的な光は、ただ、無為に俺を照らし、不気味な笑みを浮かべる鶴屋さんを、はつきりと見せ付ける以外の役割を持たなかった。

「えっ……？」

俺はあまりに突然のことで頭が回らず、ただ無意味に声を漏らすのみだった。

おいおい、これじゃ蛍光灯と同価値だな俺の存在意義。

「しずくんの、忘れ物、何？」

鶴屋さんは今度ははつきりと。一句一句区切ってはつきり言い直した。

その表情は、相も変わらず、恐ろしく不気味な笑みであった。

にたりとしたような、鶴屋さんに似合わないその笑いは。不気味さで俺を金縛る程度にはインパクトがあった。

それに加え、出所不明ながらも、さっきから危険信号を伝える俺の勘がさらに警報をがなりたてているようだった。「ここは危ない、逃げろ」と俺の勘は言っていた。確かにやばそうな雰囲気であることは確かだ……が。

「……………」

俺は混乱した頭を抱えて、思考がままならなかった。当然、鶴屋さんの問答に答えられなくても何の不思議も無いとする。

だが鶴屋さんは、間髪入れずに俺の尋問タイムへ突入し、俺の思考を追い詰めた。

「それで、」

鶴屋さんは左手に持つ『それ』を、俺に見えるように掲げて言った。

「これは、何かなあ？」

「――！」

鶴屋さんの左手には、鍵、があった。 見間違えようもない、

オレンジのタグがついた『それ』が。

ほとんど金縛り状態であつた俺の体は一気に硬直へとステージを進めた。

だが、右手をポケットに突っ込む程度の余裕だけはあつた。

本来あの鍵があるべきポケットを確認する。

当然のごとく、ポケットには何も入っていなかった。

今度は思考も一緒にフリーズする番だった。

鶴屋さんが、盗った？このポケットから？

混乱の上に疑問符が上書きされる。

いつ？いつだ。いつそんなことが可能な時が…。

電気をつけたときだ！

あの時反射的に目を閉じた俺は、確かにポケットなんて気にしてられなかった。

だが、そう結論付けたとしても。そんな推論はこの場では無力かつ無駄であつた。

俺はこのとき、そんなことを考えるよりも、まずどうして鶴屋さんが鍵を持っていることを尋問するのか、その理由を考えるべきだったのだ。

ほんと、何してんだろうな。俺は。

「なあんで、しずくんが、文芸部室の鍵をもってるのかなあ？」

核心を突かれ、俺の焦りは最高潮に達する。

「そつ」

何か言おうとして口を開くが、混乱した頭で何も気の利いたことが言えるはずも無い。

なんだなんだなんだ。

どうして俺は鶴屋さんに問い詰められてるんだ？

馬鹿、そんなもん決まってるだろ。

何で？

鶴屋さんが、俺の『仕事』を知ったんじゃないのか？

それでどうした、それがどうしてこの状況になるんだ！？

んなもん知るか、くそつ、落ち着け俺！

「…しずくんは、あの娘が気になるのかなあ？」

身包みはがされるような気分で、俺は鶴屋さんの声を聞いていた。核心にさえ切り込んでさらに核心をつかれたような、そんな気分。この状況で、『あの娘』が誰を指すかなど、わかりきっている。

俺たち『集団』、と古泉ら『機関』。そのどちらもが追いかけている共通の存在。

涼宮ハルヒ。

やなもんだ、こうとしか考えられないのも。

普通男女が二人つきりでこんなとこにいて、「あの娘が気になるんじゃないの？」と言えば、たいていが痴話喧嘩の類だと思いがな。いや、こういうのは修羅場って言うんだっか？笑えんな。

俺も鶴屋さんと痴話喧嘩してえよ馬鹿。

「あつははは！…図星、による？」

一瞬、いつもの快活な大笑いをする鶴屋さんに戻ったが、すぐ元に戻った。不気味な笑いと、刺すような視線で俺を射抜く。

とりあえず、図星だろうと言われる程度には俺は間抜け面をしていたようだ。

まあ図星だしな、しょうがねえや。

俺はなんとか少しずつ平静を取り戻しつつあった、とにかく落ち着こうと努力したのは功を奏し、なんとか自分と周囲の状況を分析できるようになってきていた。

いやもう正直なところは逃げ出たくてたまらなかったんだが、その時を見計らったように鶴屋さんは揺さぶりをかけてきた。

鶴屋さんはすつと、鍵を持っているのとは逆の手をあげた。

そつえばそつちにもなんか持つてるな、と俺が気にしたその瞬間。

俺の視線は、鶴屋さんの手に釘付けになった。

バカな、いくらなんでも、あれは盗られるわけがない。

鶴屋さんの手には、少なくともこの学校の人間には見せたことがなく、恐らくおやつさんあたりもまさかその隠し場所を知っているはずのないもの。しかし、俺が常備している大切なもの、だった。

「それと、こんな物騒なもの。持つちゃダメによるよ」

その手には、小型のナイフ。

俺の、大切なナイフだった。

「えっ！？それはっ…！？」

少し離れた位置にいる鶴屋さんだったが、その手に握るナイフが俺のモノであることは明白であった。

全長は20センチくらい、折りたたみ式でたためば大きさは10センチ前後、スリムでシンプル。

俺が何かあったときのために、ベルトの裏に仕込んでいるナイフだった…。

なぜ、それを鶴屋さんが持つのか。俺にはさっぱりわからなかった。

ただ、手をゆっくりベルトに這わせる。ナイフを仕込んでるはずのところの手が到達しても、なにもなかった。

既に冷や汗で満員状態の俺の額にさらに冷や汗が追加される。なんだ、コレ、どういうことなんだ、誰かわかりやすく説明してくれ、五十文字以内で簡潔にな、あ、句読点も含めよ。

掏られるはずのないところにあるナイフが盗られている、こんなところ、事前にそこにあるとわかってなければ盗れる訳もない、鍵も

然り、ナイフも然り。

ということは、鶴屋さんは知っていた？俺のナイフの仕込み場所
さえ？そしてあの時 電気を突然つけ、俺の視覚を奪ったあの時
同時に抜き取った？

そんな、バカな。

そんな芸当普通の人間ができるわけがない。

だが目の前にある現実はその俺の推論を全て打ち砕く程度の破壊力があった。

どうなっただ。

というか、それよりも重大な事実がそこにある。

鶴屋さんは『知って』いたんだ、俺のナイフの隠し場所を。

そして『あの娘』。鶴屋さんは確実に俺の事について、いくらか知って欲しくないことまで知っている。

それだ、それがおかしい。

鶴屋さんは、『機関』のスポンサーである鶴屋家の次期当主。そりゃ『機関』の情報が伝えられても何の不思議もない。しかし、鶴屋家と『機関』は実は相互不干渉の盟約を結んでいるのだ。鶴屋家は『機関』のやることに関して一切関知しない、だが、援助はする。そんな不思議な関係なのだ……が。

この世界中、どこを探したって俺のことを調べてるのは『機関』くらいなものである。俺は立花さんみたいに世界を飛び回ってあちこちで恨み買ったりなんてしてないからな。気楽なもんさ。

つまり、鶴屋さんが俺の『仕事』云々について知っているということは、間違いなく『機関』の情報であると思われる。

だがそれは……相互不干渉の盟約に反することではないか？

『リスト』に鶴屋さんが記載されながらも、重要人物のランクとしては低い位置であった。その理由はまさしくこの相互不干渉があったから。関係者でありながら、関係者でない。そんな存在であるはずだった。

「しずくん、お互い様。よろよ」

鶴屋さんが似合わない不気味な笑みで言った。

鶴屋さんが、こうやって俺を尋問すること。これも盟約違反のはずだ。『機関』のやろうとしていることの関係者。それに必要以上に干渉している。

しかし、この俺の考えは少しズレていた。俺はこの時こんなことに頭を回すべきでなかったのだ。

鶴屋さんが、盟約に反する、とわかっていながら、俺を詰問している。

その理由に頭を回すべきだったんだ。

どうも俺と言うのは、その場その場の出来事について深く考えるが、その理由を追うのは苦手らしい。

そして、鶴屋さんはゆっくりとこう宣言した。

「しずくんがあたしのことをすっかり知ってるのと同じように、あたしもしずくんのことを知ってるのさっ」

それは、俺が鶴屋さんの情報を知る根源、『リスト』の存在を知っているのだと言うことをにおわせた発言だった。

同時に、鶴屋さんが俺を知るため、『リスト』に似たものを利用して、と言っている感じもした。

要は、お互いの手の内はわかり切っている。と言うことを言いたいらしい。

こっちは思いっきり想定外なんだけどな。

そして認めたくない事実が一つ。

俺と鶴屋さんは、晴れてお互いを探りあい牽制しあう、…敵味方の関係と認め合ったと言うわけだ。

思わず表情が歪む。

最悪だ。こんなにやろう。

そう考えてる俺の顔を見て、鶴屋さんは何を思ったのだらう。なぜか少し悲しそうな表情をしていた。

不気味な笑みは影を潜め、見たこともない悲壮な表情…のように俺には見えた。

だがその表情も一瞬後には変貌していた。

次に俺が見たのは、手に持つナイフを振り上げ、いつでも投げられるような体制をとった鶴屋さんだった。

「えっ？」

俺は困惑した、いくらんでもまさか、鶴さんがそんなことするはずがない。

これは牽制か、ハツタリだ。もしくはパフォーマンス。

そう思ってた時期が俺にもありました。

スローモーションで見ているように、鶴さんが振りかぶったのが見えた。右手、親指と人差し指で挟むようにしてナイフを持つてるのがわかる。（つかみやすいでしょ、鶴屋さん。それ俺の特注なんすよ。）鶴さんの長くて綺麗な髪が、体の大きな動きに合わせて綺麗にウェーブした。（美しい、かの葛飾北斎が見た波間越しの富士山なんてのがあったか、俺は鶴さんの髪越しがいいな。）鶴屋さんの目が、すさまじい視線の鋭さをもって俺を見ているのが見えた、その表情に笑みはひとつかけらもない。（ああ、やっぱり鶴屋さんは笑顔が似合うよな。）そしてそれほどの間もなく、その手は振り切られ、手から放たれたナイフは、高速で回転しながら、俺に向かってきていた。（え？投げた？）

ナイフは俺の顔をめがけて飛んできて、右耳をかするようにして通り過ぎていった。

後ろ、教室のドアが、カツ、という音が聞こえた。刺さったんだろ。何が、だなんて考えたくない。

冷や汗なんてもう枯れた。

「……………これは、警告だよ。しずくん」

恐ろしいくらい普通の鶴屋さんの声だった。

消え入るような、鶴屋さんの声が響いた。

「これ以上君が関わったって、何も幸せにならないっさ…」

鶴屋さんは、うつむいていた。その表情がどうであるか、俺はうかがい知ることはできなかった。

ただとても、悲しそうな声であった。

俺はこの時なんと言えよよかったのだろう。

いや、このときの俺はもはや、まともに言語を話せたかどうか疑問だった。

次々に起こる予測外の事態。浴びせられる質問。飛んできたナイフ。

あいた口が塞がらない？馬鹿言え、口すら開けん。

「……………」

何もしゃべれない俺を見てなんと思ったのだろうか。鶴屋さんは、顔を上げた。

そこには、いつもの明るい表情をした鶴屋さんが立っていた。

一体俺はこの時間だけで、鶴屋さんの表情をいくつ見たんだ。

だが、いつもと違うのは、あの底抜けに明るい声と帯同してないということか。無言だった。

鶴屋さんは手ぶらで、教室の出入り口へ向かった。まあそれはつまり、入り口で立ち尽くす俺の側にくるってことなんだが。

鶴屋さんは、俺の横を通り過ぎる時。まったくいつもの調子でこつ言った。

「それじゃっ、また明日っ」

「……………」

俺は答える術など持ち合わせるはずもなかった。

そして鶴屋さんはそれだけ言い終えると、何の未練もなさそうに、普通に教室から歩いて出て行った。

その影が廊下の闇に消えた後も、俺はまだ動くことができなかった。

蛍光灯はただ無為に、そんな俺を照らすためだけに、目いっぱい
の光量を出していた。

なあ、誰か教えてくれ。

俺はあの時、なんて言えばよかったんだ？

俺は、どうすればよかったんだ？

背後のドアに刺さったらしいナイフが、重力に負けてするりと抜
けたらしい。

俺の後ろで、カラカラと金属の跳ねる音。

それでもまだ、俺は動けなかった。

まるで頭の中まで蛍光灯で照らされているような、そんな気分だ
った。

く桜色・第三章(4)く(後書き)

第三章はこれにて終わり。第四章からは、いよいよ(ようやく)『機関』と『集団』の駆け引きがあつたりなかつたりの予定です…たぶん(お

く桜色・第四章（1）く（前書き）

新章突入。ですがスローテンポな展開は相変わらずです。

く桜色・第四章（１）く

Coloring envelopes く桜色・第四章（１）く

暗闇の中、唐突に猛烈な音が鳴り響く。

その音源をコンマ一秒で特定し、布団の中からの確な攻撃を下す。音を鳴らすのを止めたそれをひつつかんだまま、俺は動かなかった。

疲れていたから、ではない。

心の中でぐるぐると、あまりにいろんな感情が渦巻いていた。

外では、まだ日の出の時刻でもない空が、暗く鬱屈した闇を作っていた。

薄暗い静寂の中。さっき沸かしたばかりのお湯でコーヒーを入れる。

どうも気分が優れないので、普段飲まないものに手を出した。ちなみに普段だと、朝は断然牛乳派だったりする。たまにココアも飲む。うまいよな、アレ、牛乳万歳だ。

コーヒーはおやつさんが飲むのだが（立花さんは甘党なのであんま飲まない。飲んだとしても砂糖を大量投下する）、特にこだわりのあるようではなく、普通に市販のインスタントだった。

適当にマグカップを取り出し、インスタントの粉末を入れてお湯を注ぐ。

するとあっという間にコーヒーらしき液体が誕生する。考えてみるとすごいもんだ、スプーン一杯の粉をつつこんでお湯入れるだけ

でコーヒーになるんだもんな、昔の人が見たら腰抜かすぞ。

わりとどうでもいい事を考えるようにしながら、春も終わるかと言う時期に、まだこたつ出してる我が家のリビングへと向かう。

そのままキッチンで立ち飲みしてもよかったんだが。なんとなくゆっくり飲みたい気がした。

コーヒーの素とお湯しか入れてない液体のにおいを嗅ぐ、なるほど、これはなかなか頭の冴えそうな匂いだ。こういうコーヒーはなんて言うんだろう、ストレートコーヒーか？そーいやブラックとかエスプレッソとか言うよな、あれってどう違うんだろう。今度おやつさんに聞いとう。

別に寒くはないのだが、テーブルにカップを置く都合上。コタツに入らなければ不便なのでコタツに入る。もちろん電源は入ってないので熱くも寒くもない。

コーヒーをぐつと一口飲んだ。思ったより苦くない。

が、のどを通したところで、後味が少し苦かった。のどが辛くなる。

水を取りに行こうかと思ったが、やめた。

もっと焼け付くように苦くなればいい、なんとなくそう思った。

全部飲んでみると、後味の苦さもいいもんだと思えるようになってきていた。

でも次飲むときは少し牛乳入れよう、うん、牛乳万歳。

さて……。

そこで俺は動きを止めた。

瞬間、ああ、しまった。と思う。

でも遅かった。

すぐに浮かんでくるのは、あの時の光景。あの時の教室。あの時の自分。あの時の鶴屋さん。

目の前に軽い言葉では片付けられない何かが列挙される。考えて後悔したところで所詮それはもうどうしようもないことだ。あの時

鶴屋さんとの問答を避けていたとしても、あれと似通った事態には遅かれ早かれなったのだろう。しょうがない。最初から敵味方の関係であることは明らかだった。ただ相互認識が足りなかっただけ、確認しただけなんだ、あの時のほ。

必死にそう片付けようとした。しかし、俺の中で、ああ、やはり鶴屋さんは『機関』側の人間なんだな

、と認識するのが少しづらかった。

ほんのごくわずか、俺はついこないだまで、鶴屋さんは味方になってくれるんじゃないかと淡い幻想を抱いていた時期があった。

鶴屋さんは決して『機関』と決定的関わりがあるわけではない。と、そこに一縷の望みがあった。

それは確かに馬鹿馬鹿しい妄想かもしれないが、決して絶望的な話でもなかったはずだ。『あの娘』、涼宮ハルヒに直接鶴屋さんが関わるような事態か、もしくは機関と鶴屋さんが直接つながるようなことがなければ、最悪でも中立でいてくれる存在だったはずなのだ。

それが今は、俺が鶴屋さんを知っているように、鶴屋さんも俺を知っている。そんな意味の鶴屋さんの発言は、俺を敵とみなしたと言うのと同義であった。少なくとも俺を調べた『機関』から情報を受け取るようなことがあったのだろう、俺の望みは、あっさりとその色を失ったのだ。

くっそ。

舌打ちを交えて、俺の中にうずまく疑問が浮かび上がる。

あの日あの時からずっと囚われている疑問へ。

俺は何でここにいるんだ。

何のためにここにいるんだ。

わからなかった。今までもわからなかったような気もするが、余計にわからなくなった。

深い思考の淵に沈みながら、俺はうなだれたように空のカップを握り締めていた。

だから最初その声が聞こえてきてもうまく反応できなかった。

「……んにや……しずにい……」

眠そうな声だった。か細い、子供の声。

それが明のだと気づくのには、少しの思考を要した。

「明……？どうした、トイレか？」

薄暗い部屋の中、明が眠そうにうなずいたのが見えた気がした。見れば、隣の和室から、扉を少しだけ開けてこちらをのぞくように明が立っていた。

和室の向かいにあるキッチンから差す、無機質な白の灯りのみか明を照らしていた。きつと明からは、俺の姿が不気味に見えるのだろうか。いや、逆光でしかも暗いから、黒い影にしか見えてないかもしれない。

ある意味それが正解と言えるような気もしたが。

ひとまずお互いに近づかなければ何も出来ない。俺は立ち上がって、扉に体を支えながら立ちすくむ明の頭をなでた。まだ眠そうだ。まあそれは当然か。

とにかくトイレに連れて行こうと、眠そうな明を抱えて持ち上げた。まるで眠ってしまったかのように力が入っていなかったその体は、かなり容易に抱えられた。

抱えられながら、明は言った。いや、寝言だったのかもしれない。

「……………しずにい、なにかあったの……？」

「えっ？」

明の声で、ふっとそう聞こえた気がした。

だが、薄暗い部屋の中では。明が起きているかどうかさえ定かではなかった。

「……………すごく、……………かなしそうな……かおしてるよ……………」

やはり寝言なのだろうか、どこかしらつかえつつかえの明の声

を聞きながら。今度は俺が立ちすくむ番だった。

「……………」

何も応えられなかった。

明に言われるくらい、俺はひどい顔をしていたのだろうか。

そんな動揺の中にある俺を差し置いて、明は肩を枕にすうすう眠っていた。

明の前で、そんな姿を見せるようじゃあ、俺も終わりだ。

だから、少しの間をおいて俺は応えた。

「…何もないよ、大丈夫」

つとめて優しい声で言った。表情は、気持ち微笑んだつもりで。

明はすうすう眠ったままだったが。

その時の俺は、笑えていたかね？

学校に行っても特に何か変わるわけでもなく、気分も沈んだままであつた。

ただ、一部の人間はどうも落ち込みオーラを発する俺を感知したらしかったが。もともとクラスでの存在は空気程度の俺は、誰に気にされるということもなかった。

それまで毎朝あいさつをかわしていた鶴屋さんとは、やはりあいさつもせず。お互い一言もしゃべらなかつた。

目すら合わせなかつた。

その様子を不審に思つたのか、中田が鶴さんのいない時を見計らつて、こつそり「…なあ、お前と鶴屋さん。ケンカでもした？」などと聞いてきた。半分正解で半分不正解とでも言つて、その観察力をほめてやりたかつたが、あいにく俺はその程度の心情的余裕すら持ち合わせていなかった。

「さあな」

短く、否定とも肯定とも取れる返事をして濁した。

悪いな、中田。

お前にはとても言えない事なんだ。

幸いにも、学校の授業とは。周囲の人間と目をあわすことがなくとも受けれるようになっていく。

俺と鶴屋さんは、幸か不幸か、どちらも何もしゃべらずにその日を過ごした。

もつとも鶴屋さんは、俺以外のご友人とは元気に話していたのだが。

まあ、だから中田に心配されたのか。と俺は思った。それすらも、どうでもいいとも思ったが。

昼休みになった。

手早く弁当をかきこんだ俺は、教室になぞ元から居場所もないので、腹ごなしの散歩へ出かけた。

いつもは適当に、午前の授業で出された宿題でもするのだが。今日は座っていたくない気分だった。

校舎内を適当に散策し、中庭、校庭をちらっと回り、また校舎へ戻る。

すると、なつかしい一年生の教室が見えてくる。

ぼんやりしながら眺める。もはや一年の時のことなんてすっかり忘れた。…ある一個の出来事を除いて。

まあ、それはいいや。と、せっかく思い出したことを脳裏から振り落として、散歩を続けた。すると、進んだ先に、埃っぽい階段を見つけた。

おそらく屋上へ続く階段なのだろう。普段通られることがないため、美術関係のあれこれが所狭しと置かれていた。物置状態だ。

「……へえ、こんな場所があんのか」

俺は素直に感心した。しかし掃除もされていなかったようで、そのあまりの埃っぽさには閉口した。

お世辞にも、腰を下ろすに適したところではなかったが。校舎中を散歩して回って、いいかげん少し休みたかった俺はここを休憩所

に選んだ。

埃かぶった階段の、すこしはマシだと思われる部分に腰掛ける。それだけでも、若干の埃が舞った。

「俺もこの置物といっしょだよ」

隣に並べられた、同じように埃をかぶった美術品群を眺めてつぶやく。

こいつらも、かつてはどんな目的でここに来たんだろうか。もう捨てられるのを待っただけなんかね、こいつらは。

「何のためにいんのかわかんね、だけど埃かぶってもまだここにいる。よくわからんことに連れ回されて、好きな人に嫌われて、ていうか敵になつて。それでも俺がここにいる理由ってなんなんだよ」何を言っている、ここに来なければ、鶴屋さんに会うこともなかったし。この学校自体と会うことがなかった。この学校生活があるんだから、お前は己の存在理由なんて問い返す必要もないじゃないか。お前の居場所は希薄だがクラスにあるし、何を卑下する必要があるのか？この学校で出会ったものすべてに感謝すべきだろう？

ほこりかぶったなんかの肖像画がそう言った気がした。

そんな気がしたが、やはり言ったのは俺だった。

「そりゃあそうだよ、でも裏を返せば。俺はここに本来いないはずの人間なんだ」

今度は肖像画も何も言わなかった。

「ここにいなければ得られなかった何かなんてどうでもいい。俺は、どうして、『ここ』にいなければいけないんだ？」

考えてみればみるほどそんな気がしてくる。

ここ最近起こった出来事と『仕事』のあれこれ。

俺が必要だったか？

問い詰めて、突き詰めていくと、それらは一つの結論に辿り着く。ぶつちやけ、俺がいなくてもどうにかなっただろ？

百歩譲って、俺が必要だったのは『閉鎖空間』の一件くらいなものだろう。

なら俺はどうしてここにいるんだ。
どうしてここに、送り込まれたんだ。
俺でなければいけない理由はなんなんだよ。

階段に腰掛け、俺はうなだれていた。

頭を抱える。頭をぐしゃぐしゃにしてみる。

何も変わらなかった。もともとサラサラした髪質の髪は、どんなにぐちゃぐちゃにしたって、元通りだ。

なんとなく、そのまま俺を表しているような気がする。

どうあがこうが、何も変わらない。

いや、悪い方向にのみ変化している気しかない。

なんとなく、そこで立花さんの顔が浮かんだ。

「しずくん、事が悪い方向に進むって事はだねえ。少なくとも良い方向に進む余地があるってことなんだよ」

頭の中で、おばさんくさい声が響いた。そういやそんなこと言われた様な気がする。

良い方向に進む余地がある？

俺のこの状態にも、何か希望があるってか？

ていうかあの人は、いろんな言葉に深みとか意味とか込めすぎなんだよ。あの人の言うことはなんだか小難しいことばっかな気がする。もつとさ、簡単に教えてくれよ。アフォーリズム、警句みたいな感じでさ。

そう思っていたとき、不意に俺の右ポケットで何かが振動した。

「うおっ？」

驚いて、声を上げる。

あわてて振動するそれをポケットから取り出す。ポケットの中にあつて振動するものと言ったら答えは限られる。てかむしろ、携帯以外にあるのだろうか。

開いて液晶を見る。

画面に表示されていたのは見知らぬ番号だった。

だが、俺は通話ボタンを即押しした。

確かに見知らぬ番号だったが、どこかで見たことがあるような感じがしたからだ。

そしてそれは、本来ここに電話をかけて来るはずのない番号だった。

耳に携帯を押し当てながら、俺は自分の予感が当たっていることを確信した。

第一声。今すぐ殴りに行きたくなるようなニヤケ面が、脳裏にしっかりと浮かんだ。

「おや、出てくれましたか」

向こうから聞こえてくる、妙にすました声。きっと顔は相変わらずの貼り付けたような笑顔だろうよ。

「何の用だ、古泉」

俺は不機嫌にそう言った。ようやく一人になれる時間すら、テーマが奪おつてのか。

くつくつと、不快に笑うそいつの声を聞きながら、俺は埃かぶった美術品群を眺めた。

俺はまだ、埃かぶることさえ許されないようだぜ。

さっきしゃべったような気がした肖像画が、それでいいじゃないか、と言った気がした。

余計なお世話だ馬鹿。

だが、虚空に浮かぶたった一本のロープ。自らを繋ぎ止める一本の可能性。

そんな思いで携帯を握っていたのも事実だった。

俺は美術品群の元から離れ、歩き始めた。
じっとしていられなかった。頭を動かすために、
ひよっとすると俺はこのとき、まず足を動かす。
少し微笑んですらいたのかもしれない。

く桜色・第四章（２）く

Coloring envelopes く第四章（２）く

歩きながら、俺は人気の無い場所を目指した。

ケータイで話しているところを、教師諸賢に目撃されたら事である。特に俺の場合容赦無い処罰が待っているだろう。

しかしそうやって周囲を警戒しながらも、俺の耳はスピーカーから聞こえる声を一字一句聞き漏らさぬようにと細心の注意を払っていた。

「ひよつとしたら出てくれないんじゃないかと思いましたが、意外に僕とお話する気はあるんですね。てつきり嫌われたものだと思っていましたか」

そう言つて、またくつくつと笑いやがる。ニヤケ面がくつきりと脳裏に浮かんで、非常に俺の機嫌はよろしくない。そう言つてやろうかと思つたが、ここで言つても大して効果もなさそうなのでやめておいた。

「うるせえな、気味悪い笑い方しやがって。何の用だよ」

と思つたら、気づくと口から悪態がすべり出ていた。ああ、俺って意外と考えることすぐ口にするタイプだったんだろうか。

だが肝心の相手の方はやはりまったく効果がなかったようで、「おや、これは失敬」とかいいいながら、話を仕切りなおそうとしていた。まあ、そっちの方がいいんだけどな。

そして古泉のほうから話を切り出してきた。何のことは無い、あいつがここに電話をしたのはただ単にこのためだった。

「話し合いの場を持ちませんか、僕たち『機関』とあなたたちの『集団』とで」

古泉は極めて冷静にそう述べた。

「なんだよ、話し合いって」

こちらも至極冷静に受け応えてやる。

「なんだと言われましても、涼宮さんの事以外で何かあるでしょうか。このままではお互いに理解し合えないまま、意味もなく対立してしまいそうなので。我々はそれを避けようと、とにかく互いの意見を確認しあうだけの場だけでも作ろうと言っているのですよ」
和して同せず、というような状況にしたいってわけか？

石井「ランシング協定。ふと、頭にそんな言葉が浮かんだが、かき消した。」

「ええ、まあそんなところです。とにかく、そちらの上のほう…立花さん、などにお伝えしていただけると幸いなんですが」

そこでなんとなく、俺の脳裏に疑問符が浮かんだ。

なぜ俺に伝言を依頼するんだ？

話し合いの場を持ちたいなら、俺に言うより立花さんに直接交渉したほうが早くないか？それかおやっさんに話をつければ、立花さんも俺もくつついてくるだろうに。

なんとなくそこに、糸口がある気がして。俺は古泉にそれを問いただした。

「なあ、伝えるのは別に構わねえけどよ。何で俺に言うんだ？立花さんとかに話つけたほうが早いだろ？」

すると、電話口の向こうでは、なぜかあきれたため息が聞こえた。そしてどこか力の無い声が、受話器の向こうから聞こえてきた。

「…それが出来たら苦労しませんよ」

急に三日連続残業した直後のサラリーマンみたいな疲れ切った声をだしやがった。あつこの野郎あからさまにわざとらしくしやがって、8割演技だな？譲歩しても4割はそうだろ。

「普通に考えれば、あなた以外に話のつけようが無いじゃないですか」

……？

それは、どういうことだ？

まあ確かに立花さんに直接話しても、いろいろはぐらかされてなかなか話がまとまらないかも知れないが、しかし立花さんだって一応話は聞くと思うぞ？

すると、古泉は今度こそほんとにあきれた様な口ぶりで言った。

「単刀直入に言えば。あなた以外にこちらから接触できる方なんていないんですよ。それもこんなふうに、誰にも怪しまれることなく、ね」

今度は急に、耳元でひそひそ話をするときにように声をひそめた古泉が言う。事実携帯のスピーカーは耳元にあるので、実際にあいつが俺の耳元で声を出しているような気がして非常に気分が悪い。ていうか、声のトーンをいちいち変えるのはよさんか、疲れる。

しかし、そうか。

俺は、頭の中のつつかえが。ひとつ外れたような感覚でそこに立っていた。

その後、古泉はできれば今週中にその場をもうけたいという『機関』側の都合と、確認のために明日今と同じ時間に連絡すると言う旨を言い残した。

俺は、その両方をかなえてやりたいが。あいにく立花さんが日本にいるかどうか不明だから、すぐ連絡がつくか分からない。と答えた。

「それでもまあ、確認のため明日もかけますから。連絡がつかなかったときはつかなかったときで、その時考えましょう」

ひとまず、お願いしますよ。と古泉は言った。俺が、ああ。と答えると、どちらからともなく、通話は切れた。

虚空に浮かぶロープは切られたのだ。

だがロープが切れたときには、もう俺はロープに頼らなくていいところまで自分を引き上げていた。

俺にも、できることはあった。

ケータイを握り締めながら、俺は口元が緩むのを止めることがで

きなかった。

そんなちっぽけなこと、と笑いたければ笑うがいい。

誰からどう見たって、今の俺は『話し合い』とやらの開催を立花さんたちに伝えるだけの小間使いだろうよ。今はそれでもいいんだ。ここにいるからには、動かなきゃしょうがない。

俺は歩き出した。そろそろ昼休みが終わる。

歩きながら、俺はある一つの計画を。そつと胸の奥で組み立てた。ありがと古泉。お前が『話し合い』とかいうのをもちかけたお陰で、俺にも良い考えが浮かんだ。

和して同せず。お互い意見や立場が違うのはわかるし、行動が噛み合わず対立するのもわかるが、ひとまず対立せず仲良くしていきましょう。そんな意味合いの言葉だ。

そうだ、その手があるじゃないか。

昼休み終了の鐘が鳴り響いた。

どうやら予想以上に古泉との会話で時間をくっていたようだ。俺は半ば慌てて駆け出した。

だが、その顔はにやけたままだったに違いない。

貼り付けたような笑みなんかじゃないぜ。心の内から湧き上がるような、本当にうれしい微笑みさ。

なんだか全力疾走したくなって、俺は教室までの道程をダッシュした。

そうさ、まだ。全てが終わったわけじゃないんだ。

俺は、新しく見つけた希望へ向かうかのように。走った。

ああ、もうメロスとでもなんでも言ってくれ。

「ただいま」

俺は郵便受けをしつかり確認した後、家の施錠を解除し。帰宅した。

基本的に家の鍵は俺が持っている。とはいえ、立花さんとおやつ

さんがそれぞれスペアを持っているので、特にどうということはないのだが。

帰って早々リビングに飛び込んだ。おやっさんはいつもそこにいる。

「おお、おかえり閑歩」

なにやらパソコンをいじくりながら、首をひねってこちらを振り返るおやっさんが言った。

明は、リビングと続きの和室で寝ているようだった。

俺はざっとキッチンから和室まで眺め、立花さんの姿が無いのを確認してから。

「おやっさん、立花さんは？」

と聞いた。

するとおやっさんは、どうもネットサーフィンしているらしい様子でマウスをかちかちやりながら。

「あー…どこだったか。ちょっと待ってくれ、確かメール着てたはずだ…」

見た目からして明らかなおっさんであるわりに、おやっさんはパソコン関連というか、電子機器にめっぽう強い。かなり慣れた手つきでメールボックスを開き、お目当てのメールを探しているようだ。余談だが、俺はこういうの疎くて吉野によく勝ち誇った顔をされるのが常だ。どうせ機械音痴だよ。

ていうか、おやっさんと立花さんのやりとりはメールなのか。

「えー、どれだったかな、と。確かそんなに遠くないとこだったんだが…」

遠くない方が助かる。できれば日本国内であるほうが望ましい。今週中にここに帰ってこれるならなお良い。

「ああ、あった。立花なら、今パリにいるな」

見事に国外じゃねーか！しかも遠っ！

これじゃ帰ってこれるかどうか不透明すぎる…。

そう悲観的になっている俺に、おやっさんが希望の一言をくれた。

「おつ、どうやら明日には帰ってくるみたいだぞ」

またそりや急な話だ、明日から飯一人分多く作らにやいかんじやないか、食材足りたかな？

つてそうじゃない、今は『話し合い』の方が懸案事項だ。

「そういえば、急に立花の事なんて聞いてどうした？」

おやつさんが、今度は体ごとこちらにむけて、俺に向き直った。対する俺は、学校帰りの格好のままで荷物も降ろしてないままだった。今日の昼に古泉から持ちかけられた『話し合い』についてのことを報告した。

おやつさんは少し驚いたような表情を見せたが、すぐに平常の無表情になり、無精髭をいじくりながら。

「そうか」

と短く答えた。

「それにしても話し合いを持ちかけてきたか、やつらも相当焦ってるようだな、これは」

独り言のようにおやつさんがつぶやいた。この時にはもうおやつさんはネットサーフィンにまたその身を委ねていた。

「『話し合い』を受けるんだよな？」

「もちろん、受けない理由はないからな」

俺はふと不安になったことを聞いたが、その心配は無用だったようだ。

「立花には俺から言っておこう、明日もう一度連絡が来るんだっかな？」

低く、重みのある声が問いかけてくる。

俺はなんだかかしこまって、「はい」とか答えた。なんとなく、そんな雰囲気だった。

「今週中に開くのも良し、いつでもいいと伝えておけ。それと、話し合いには立花と閑歩で行け。向こうが何人で来るかわからんが、二人で十分だろう」

「えっ？」

「ん？どうした」

驚きの声を上げた俺に、おやつさんが問い返す。

「…いや、おやつさんと立花さんが行くのかなと思ってたから…」
俺は正直な感想を述べた。だってそうだろ？『集団』の中で一番このことに精通してるのはその二人だし、俺は行ってもどうせたいしたことじゃべれないし（ていうか、知らないし）。立花さんとはともかく、どうして俺が行くのか。ていうか、立花さんを連れて行ったらもう話し合いになんかならないんじゃないかとすら思う。当然立花さんを俺が抑えられるわけ無いし、だからおやつさんが出て行って、しっかり立花さんを抑えつつ『機関』のやつらと話し合うべきじゃないのか？

その旨をおやつさんに正直に申し述べたところ、おやつさんは「がっはは」とか豪快に笑いながら。

「お前が行かなきゃ意味が無いだろ、閑歩。逆に、俺が出て行く意味は無いぞ」

と、よくわからないことを言った。

そのときの俺ははぐらかされたと思ったもんだ。

俺はその後も、おやつさんにどうして俺が行かねばならないのかを問いただしたが、納得できる答えは得られなかった。

何はともあれ、俺は立花さんと一緒に。『機関』の連中と話し合わなければならんらしい。

別に話し合うのはいいんだが、なにを話し合うのかわからんという不安と同時に、相方が立花さんでまずロクな事にならないだろうな、という厄介ごと確定の不安感が俺を取り巻いて。非常に前向きになりづらかった。

どう考えても俺を不安にたらしめる要素しかないのだが、それでも俺はいくらか前向きであった。

俺は『リスト』を取り出して、ある番号を携帯に登録した。
もちろん、古泉のじゃないぜ。

『機関』との話し合いが迫る中、俺の中ではもう一つの『話し合い』の計画を進めていた。

これはそのためのものだ。

ひよっとすると、俺らと『機関』の間にも同じことが言えるのかもしれないが。お互いに知っていることが少ない。

いや違うな、お互いにお互いを調べ上げてるから「知っているつもりになってる」んだろう。

だから最初から、相手とは話し合いにならない、相手と対立するのは仕方が無い。とあらかじめかかる。だから無用に対立する。

分かり合う、分かり合えない、それ以前に。もっとお互いを知ろうとすることが必要で。お互いを知ろうと思ってるなら、知る機会を作ればいい。相手を密かに調べ上げるなんてことしないで、本物の相手と向き合ってみないと、わからないことなんてたくさんある。それを知って、初めて相手を「わかる」んじゃないだろうか。

ただそれは、お互いが「知りたい」と思わないと成立しないことだ。

俺にはそれが一縷の不安だった。

相手が、あの人が、俺のことを知りたくないのなら。これは俺の独りよがりだ。

俺の気持ちを唯一マイナスの方へひっぱるベクトルは、それであつた。

どの不安よりも大きいそれは、しかし今の俺を劇的に改善するかもしれないブラックボックスでもあつた。

どう転ぶかは、俺しだいで、あの人しだいなんだ。

そんなふうにはうつと考えていると、隣の部屋からテレビの天気予報が聞こえてきた。

どうやら明日は、なかなかの快晴で、気温もだいぶ高くなるらしい。まさしく初夏の気候になるそうだ。

やれやれ、まだ夏服の移行期間でもないのに。明日はブレザー着込んで、汗だく必至だな。

ハンカチ一枚多くもつてくかな、あいや、ハンカチで汗拭くのはおっさんくさいだろうか？

できるだけどうでもいいことに思考を預けながら、その日は暮れていった。

言い換えれば、久しぶりにそんな穏やかな気分でいれたのだ。

太陽は、核融合全開で俺の真上にいるようだ。

人気の無い、美術備品倉庫代わりの階段。

そこにたたずむ俺の右ポケットが、小刻みに振動し低いうなりを上げる。

俺はそれをポケットの中から手早く出し、番号を確認するまでもなく通話ボタンをプッシュした。

「おや、早いですね」

「かかってくると判ってりゃ、そりゃ早えよ」

お互いに関心がないようなふうで、言葉を交わす。

「どうでした？そちらのご予定は」

「オッケーだ、今週中ならいつでもいいとさ」

「わかりました、では日曜の午後2時ごろでいかがでしょう？」

そりゃまたずいぶんと半端な時間だ。だがまあ、断る理由もまたないだろう。

「ああ、いいぜ。たぶんこっちに問題は無い」

「それはよかった。ところで、そちらからはどなたが出席なさる

のでしょうか？」

む、古泉が探りを入れてきた。

「ん？ああ、こっちは立花さんと俺が出る。そっちはどうなんだ、お前が出るのか？」

が、古泉は答えず。代わりにくつくつとあの憎たらしい笑いが返ってきた。

その時俺は、あつ、正直に答えてやったのは失敗だったのかと思った。

「いえ、まだわかりません。正直こちらの人選はまだ決まっていないのですよ」

くつくつと続いていた笑い声が消え、古泉の発言だけをケータイは拾ってきた。

「ですが、あなた方の人選を参考にさせていただくのは、間違いないでしょうね」

この野郎、体よく俺から出席者の情報だけ掠め取りやがって。

いやまあ、真正直に答えた俺も俺だし。わかったところでどうなんだといわれりやそうだけど。

なんだか今すぐケータイを切りたい衝動に駆られたが、どうせすぐ切ることになりそうなのでやめておいた。

「では、日曜日の午後2時、ということ。その時に、直接お会いしましょう」

「ああ」

俺は多少不機嫌そうに言った。

「では、失礼」

携帯が切れた。

そこでふと、ん？と思う。

あいつ、なんか最後に引っかかること言わなかったか？

しばらく考えた後、あつ、あの野郎。ともう一度思つはめになった。

何が、『人選は決まってるだろ』だよ。

少なくとも、お前が出ることはわかってんじゃないか。

俺はそこでようやく、古泉を含む『機関』の連中が、わりかしたたかだということを思い知ったのだった。

その事実はこの先にかけて懸案事項以外になり得ず。

今週末に直面することが確定した、『話し合い』という出来事においても俺の気持ちを落ちこませるもの以外の何物でもなかった。

だが、逃れようと思っても時の流れに抗える訳も無く。

週明けが誰にでもやってくるようにまた、週末は俺にもやってくる。

俺はその週末が来る前に、やっておかねばならないことがあった。

それは、俺の『話し合い』へ向けての下準備である。

『はい？どちらさん？』

受話器の向こうから、聞きなれた快活な声が聞こえてきた。

俺は、息を思い切り吸い込み。とにかくはつきり言うことに気を付け。ゆっくりとしゃべった。

「鶴屋さん、俺です。虎野です。虎野閑歩」

『えっ？』

正直な驚愕の吐息に、俺は逆に安堵した。
そして恐らく、電話口に立っているであろう彼女がまだ状況を理

解できていないうちに。俺は用件を言う必要があった。

「鶴屋さん、切らないで、とりあえず俺の話を聞いてください」
俺は必死の思いでそう言った。

そして俺は、できるだけ早口で用件を話した。彼女は驚いたまま
で、何も返しては来なかった。

「学校で、良いかどうか確認しますんで。そのときまでに考えて
てください。じゃあ」

まるで、留守番電話に伝言を残しているかのように俺はしゃべっ
た。

それは彼女の方から何も反応がなかったからというのもあるが、
最初からそのつもりだったというのもある。

これで俺は、二つの話し合いを整えた。

もつとも、どちらもうまくいくかはよくわからん。

だが、ただ一つ言えることがあった。

「何もしないよりは、マシだ」

言い聞かせるように自分に言い、俺は携帯を放り出した。
賽は投げられた、ってな。

そこ、笑って良いぞ。

そして、なんにも知らない太陽が、日曜の朝を告げにやってきた。

く桜色・第四章（3）

Coloring envelope 第四章（3）

いつも通りの朝だった。拍子抜けするくらい。

なにも普段と変わらない日曜日で、少し変わったことといえば。

「閑歩、パンにバター塗りたいんだけど」

「ねーよ、マーガリンならあるけど」

「はあ！？なんでバター無いのよ！」

「うつるせーよ朝から、マーガリンで我慢しろ。バターは割高なんだよ、すぐ食べねえし」

まだコタツを片付ける様子の無い我が家の居間には、朝から怒号が響いていた。

その発信源はいわずもがな。俺の同僚にして幼馴染、吉野である。それにしてもコタツがつけっぱなしの食卓で朝飯がパンに卵、ベークンと味噌汁という組み合わせってのはどうだったかな。俺は好きんだけどこの組み合わせ。洋食の割合がでかいだろとか言うなよ。

今はその食卓をおやつさん、立花さん、俺、吉野、そして明が囲んでいる。

珍しくフルメンバー。全員そろっての朝ごはんだ。

そしてぶつくさ言いながら、吉野がマーガリンをパンに塗り始めた。別にマーガリンだからどうということも無いだろ、動物油脂か植物油脂かの違いなんだからよ。なんでバターにこだわるんかね？

「しずくん、砂糖」

そこで飛んできたのは立花さんの声だった。例のおばさんくさい声で砂糖を要求される。

「え、あ、はいわかりました。いま取って来ます」

俺は立ち上がった、キッチンへ砂糖を取りに行った。そうだった、立花さんのいる食卓には砂糖が必須だったのを忘れていた。

ん？卵やベーコン、それに味噌汁の食卓に、どうして砂糖が必要なんだって？それはこの人の食事を見てれば、大体分かる。

立花さんは、かなりの偏食家なのだ。

俺はとってきた砂糖を立花さんの前に置いた。満足そうに「ありがとね、しずくん」と言うなり、立花さんは目の前の目玉焼きに砂糖を振りかけ始めた。

それも、ぱつ、とじゃない。けっこう、どばつ、と。

そんな調子で隣のベーコンにも砂糖が降りかかり、次に味噌汁も犠牲になって、最終的にパンにも結構な量の粒子が降り注いだ。で、シメは、砂糖の容器をコーヒークップの上へ移動させ、もはやドサツという音が耳に届きそうなくらいの量が、黒色の水平線を揺らした。あれは、何コーヒーと呼ぶんだろう。

俺はコーヒーを飲まない方だが、それでもあの飲み方が常識から外れをとるというのはわかる。いくらなんでも、わかる。

そして立花さんはそのコーヒーを念入りにかき混ぜた後、一口のみ。サングラス越しで満足そうな笑みを浮かべた。あ、立花さんは寝起き以外はいつもサングラスをかけているのが普通だ。

そんな調子で砂糖ふりかけ卵焼きにも手を伸ばし、満足そうに食べている。そして食べ方はナイフとフォークを使って、非常にお上品な食べ方だ。

そして卵を食べての第一声。

「うんうん、やっぱ日本の砂糖は違うねえ」

……ついこないだまで行ってたパリでも、それやってたんですか立花さん…。

非常に気になったし、現地の方々からどのように見られたかと思うと。少々どころでなく気にしたが、なんだか怖いので聞かないでおくことにした。

食卓は、しばし無言であった。俺たちの食卓は、全員そろっても

無言であることが多い。

それぞれに考えることってのがあるのだろう。だが別に、食事中は私語禁止とかそういうきまりがあるわけでもない。

だが無言であるほうが、ご飯はすぐ終わる。

しゃべりながら食うと長引くからな。そういう意味では、効率がいい。

そう考えているうちに、全員朝飯を食べ終わっていた（明にはおやつさんが悪戦苦闘しながら食べさせていた）。

いつものことだが、家事係は俺なので。その片付けも俺の役目だ。

「あと8時間って所だな……」

明との朝食戦争を終えたらしいおやつさんが、つぶやいた。

あと8時間。何を隠すまでも無い、『機関』との話し合いまでの時間である。

「よし、閑歩、華恋、立花。話がある、集まってくれ」

おやつさんが呼びかける。俺は食器を運んでいる最中だったので返事はしながらも、ひとまずテーブルの上を片付けてから向かうことにした。吉野は「あーい」とか言いながら、朝飯を食べたままの場所で待機。立花さんに限っては、朝飯を食べたその場から少しも動くことなく、不気味な笑みもまた浮かべっぱなしであった。

キッチンにそこまで多くない食器を置き、俺は居間へ戻った。テーブルを拭くための台拭きも忘れない。

俺が朝飯と同じ場所に収まるなり、おやつさんは話し始めた。ひとまずテーブル拭きは後回しだ。

「みんな分かっていると思うが、今日『機関』側と話し合いの席がある」

俺たちはうなずいた。ちなみに明はおやつさんに抱えられているので、結局全員この話を聞いている。

「で、最初は立花と閑歩の二人で行ってもらおうと思ったんだが……」

おやつさんが、ためらうように吉野の方を見た。

それを待つてましたと言わんばかりに、吉野が宣言する。なぜか視線を俺に向けながら。

「あたしも付いていくよ」と言い放った。

どうやら、話し合いに吉野も付いてくるらしい。うん、三人寄らば文殊の知恵って言うし…。

「って待て、どうしてお前が付いてくんだよ！」

俺は思わず追及の声を上げざるを得なかった。言っちゃわるいが、吉野はとても話し合い向きの奴じゃない。どっちかって言うとな立花さんタイプだ。人の話を聞かないで猪突猛進、唯我独尊みたいな感じ。

そんな奴が話し合いに同席するって、ややこしくしかならないと思うんだが。

「まあまあ、閑歩。吉野がどうしても行きたいって言ったんだ、別にいいだろう？」

すると、にらみ合う俺と吉野を見かねたのか、おやさんがそう言っただけで俺を諭しにかかった。

ん？吉野が行きたいって言った？

それはそれでなぜなのか気になるところだったが、おやさんが話を先に進めたい風だったので、ひとまず放置しておいた。

そしたら、唯我独尊吉野があっさり自供した。

「へん、閑歩。あんただけ日本で活躍させたりなんてしないんだからねっ」

ふん、と俺を鼻で笑うような仕草をしながら、吉野はそんな事を言った。そんな理由かよ、深く考えて損した。いや、気になって損した。

ていうか、そんな理由でよくフィンランド（俺たちの本拠地だ）からここまで飛んできたもんだ。

「ま、多少動機は不純だが。まあいいだろう、人数が一人くらい増えてどうということはあるまい」

おやつさんがそう統括して、ひとまず話を続けた。

「まあ最初の話し合いでどうこうということも無いだろう。次回の話し合いの約束を取り付けるだけのつもりで行ってこい」

「えっ」

流石にこれには反応せざるを得なかった。

「どうした？ 閑歩」

おやつさんが俺の方を向いて言う。いや、どうしたもこうしたも

「いや…、次回の話し合いの約束だけしてこいって、そう聞こえたんだけど…」

それは話し合いとしての態を成してないんじゃないだろうか。

そんな俺の疑問を、何のことは無しにおやつさんは笑い飛ばした。

「あつはは、そうか、閑歩は真面目だからな。本当に『機関』の連中と話し合うつもりだったのか」

え、俺なんかおかしいこと言ったか？

立花さんを見れば、別にあきれるでもなく笑うでもなく、不気味な沈黙を保っていた。いや、もとより表情の変化は読み取りづらいが。そして吉野はあまりよくわかってないふうな顔をしていた、間抜け面してんぞお前。そして明はなにもわかってない笑顔だった、かわいいな、お前はかわいいなこんちくしょう。

「いいか、俺たちと『機関』は。元来解りあうはずの無い二つのグループだ」

そこで、突発おやつさん講座が始まった。

「それが一回の話し合いで妥協点を見つけたり、なにか取り決めたしたりなんて出来るわけが無いんだ。最初から折り合いが悪いうえに、主張が食い違ってるんだから、言い争ってまとまらないのは必定」

うつむ、確かにそんな気がするが…。

「だから最初は、話し合いが長期戦になることを見越して、定期的に話し合いの席を設ける約束をとりつけるということをする。そこで、最低次の話し合いの席を取り付けて来いと言ったわけだ。同

時に、先方がこちらと本当に話し合いをする意思があるのかどうかも確かめると言う訳だ」

それは、この話し合いが『機関』側の見せ掛けかもしれないということも示唆していた。

つまりは、俺たちを牽制するために、一応の話し合いの場を一回だけ設けたのではないかと。

「ま、いきなりあちらから。話し合いが出来るような重役が出てくるとも思えないしな…」

おやっさんは最後につぶやくように言った。ううん、ということはこの話し合いとは一体何なんだろう。なんだか恐ろしく無駄なこととしているような気がしてきたぞ。

「ま、大丈夫さね」

ふいに、居間に立花さんの声が響いた。

凜とした、よく響く声だった。

「いざと言う時は、あたしが、この話し合いを一回きりになんてさせないようにするからね」

そう言って立花さんが口元を歪めた。

いや違った、微笑んだのだ。微笑みがそうは見えないほどに立花さんは不気味な笑みを浮かべていた。

俺は、あと八時間後のわが身に。わずかな危機を覚えたのだが。

そのときは何も言わなかった。

あれは、立花さんが何か口クでもないことを考えている時の顔だ。なんだか不意に、俺死ぬんじゃないかとかさえ思った。

おおげさだったのは、わかってるんだけどな。

そして気づけば、約束の二時まであとわずかとなっていた。

それまでの間のことは、正直あまり記憶に無い。

まあそれは特に何もなかったからなのだが。

吉野が運転する車（免許持ってるのか？と気になったが、聞かないでおいた）に乗って、『話し合い』の場所に移動する。場所は北口駅、そのロータリーだ。

それが先週の間だけ恒例になった、古泉との定時連絡で伝えられた集場所だ。

実を言うところは、市内の中心部であり。休日にはどこから沸いたんだと思うくらいの若者でこったがえす。正直人ごみが苦手な俺には、勘弁して欲しい場所だ。

吉野は適当な100円パーキングを見つけて黒塗りの車を止め、そこから徒歩でロータリーへ向かった。

超人が二人いようが、することは普通の人間と同じである。

なんとなく皮肉だなあ、と笑い出しそうな俺を、立花さんが突然小突いた。

「やあしずくんさ、にやけてるってことは。ずいぶんと余裕があるんだねえ？」

駅前へ向かう道を歩きながら、立花さんの方がよっぽど皮肉っぽく俺に言った。

俺の方は、駅前に向かうにつれ増えていく人ごみに注意深く目を走らせながら。

「そんな、余裕なんて、無いですよ」

ロータリーにたどり着けるかどうかという、話し合い以前の心配で既に頭が一杯の俺にはそれくらいの応答が精一杯であって。

「…ナイフは、ちゃんと仕込んでるかい？」

という立花さんのささやきを、危うく聞き漏らすところだった。えっ、と立花さんの方を向く。すると、立花さんはサングラス越しに苦い顔しながら、「前向きな」という合図を首から上だけで送った。俺は慌てて前を向く。

吉野は、俺と立花さんの少し後ろから付いてきている。立花さん

のささやきはギリギリ聞こえないようだ。

「しずくんは、銃は使ったことあるっけ？」

また立花さんが囁いた。なんだ、何でこんなことをいま聞く？

「…立花さんに教わった以上のことは、まだ」

俺も同じささやきの波長に合わせて言う。同時に、子供時代に立花さんに無理やり銃の扱い方を教わった時の事を思い出す。…あんまりいい思い出じゃないなあ…。

「そっか、じゃあまだ持たせないほうがいいね」

なんだ、いったい何の話なんだ。

俺は横目で立花さんを見た、立花さんはいつもと変わらない様子で、俺と並んで歩いているだけであつた。時たま、すこし顔を近づけて囁く。

再びサングラスが耳元に近寄つてきた。

「吉野はねえ、銃持つてるからね…アレはけんかつ早いから。

いざというときはしずくんが抑えておくれよっ？」

なんだか物騒な話になつてきたぞ？

「抑えるって、どうするんですか？」

立花さんはさも当然という風に言い放つた。

「マジでヤバイ時は、銃持つてる腕を折るとか、首筋にナイフ突きつけてやるとか、ちゃんと止めないと。吉野があいつらの息の根止める前にねっ」

あいつら、とは当然今日の話し合いに出る『機関』の連中のことだろう。確かに吉野はちよつとした挑発にすぐ乗る程度にけんかつ早い、まあいわゆる危ない人である。立花さんは冷静沈着でありながら、ここぞというときに武器をぬつと出すので。危ない人でもちよつと種類が違う。

「はあ…わかりましたが…？」

俺は頭の中が疑問符だらけだつたが、とりあえず同意しておいた。吉野は確かに話し合いにはさっぱり向かない地雷だし、けんか売られたと思つたら（勘違いでも）勇んで買い取る奴なので、気をつけ

るってのはわかる。

しかし、『機関』の連中が。わざわざ吉野や俺たちを煽るようなことを言い出すのか？

吉野だって、特に何も挑発されなきゃ普通の女の子だ。

俺はすこし後ろを歩いてついてくる吉野をちらと見た。身長は俺より少し低いくらいでスラッとしてる、金髪のウェーブヘアが歩くたびに揺れる様は、明らかに日本になじまない西洋人形のような雰囲気をかもし出していた。気が強そうできりつとした表情。それこそ口元が不機嫌そうにゆがんでなくて、服装もなんでかライダースーツを着込んで真っ黒でなければ、雑誌のモデルといっても差し支えなさそうな容姿ではある。

すると、俺の視線に気が付いた吉野が不機嫌そうに一言。

「あによ。あたしの顔になにか愉快的なもんでもついてんの？ガンつけてんじゃないわよ」

……ああ、今、中田がたまに使う「残念な美人」って言葉の意味がなんとなく分かったただだから気にすんな。

そう思ったが、当然ダイナマイトの導火線で遊ぶ気なんてさっぱり無いので。何も言わず、肩をすくめて前に向き直った。

かわいい仕草の一つでもみせりゃあ、まだましなだろうけどな。そうして俺たちは、北口ロータリーへ確実に歩を進めていった。

はつきり言うと、この時の俺は認識があまかった。

どう認識が甘かったかって？

俺は思ってたんだ、互いの主張をぶつけ合うだけで、この話し合いはまあ平行線で終わる。問題は次回の機会を作れるか否かというところだけにあるのだ、と。

そして俺は、立花さんと『機関』の連中との掛け合いを見て聞いて置けばいい話で。

いわばその俺と同列の傍聴席に、ちょっとあぶなっかしい奴が同

席しただけの事だと、そう思っていた。

だが実際は、同席したのはちよつとどこるか完全に危険物、話し合いをぶち壊しかねないダイナマイトで、その導火線の短さについては俺はさっぱり認識していなかった。

そしてもう一個認識が甘かったことがある。

これは立花さんの方ですら予想外だったようだ。

この話し合いを持ちかけてきたのは奴らのほう、ということとは、奴らの方がこの話し合いを大事にするはず。と思つてたんだ俺たちは。

ところが奴らは案の定、俺たちの持ち込んだダイナマイトに興味津々だったという訳。

分かりにくい？

ああ、じゃあ、もうちよつと分かりやすく言おう。

俺たちが認識甘かったこと。それは、

『機関』の御連中が、予想以上に火遊びがお好きだったって事。

く桜色・第四章（3）く（後書き）

はい、第四章はまだまだ続きます。

かたくなに一章四部の構成を続けて来ましたが。今回は五部くらい行ってしまういそうな勢いです。かと言ってなにか急展開があるかと言うとそんな事はありませんが

諸事情（主に受験的な）により、しばらく更新停滞するかもしれません。できれば月一更新は続けたいと思っていますんですが、現状どうなるかわかりません。

ひとまず、気長に続きを待っていただければ幸いです。というか月一更新自体がゆったりしすぎな感もあるので、特に問題で無いかもしれませんががg（ry

兎にも角にも、ここまで読んで下さっている皆さん。ありがとうございます。
ございます。

続きはいつになるやらですが、必ず書きますのでお待ちあれ…w

く桜色・第四章（４）

Coloring envelopes 第四章（４）

俺はなんだか不思議な気分だった。

日曜日の午後、北口ロータリー。

噂通りとしか言いようの無い、どこから出てきたんだという人だかりをかき分けて、進んでいく。

そこでふと気が付いた。

俺はロータリーの中央部を見、それから全体を見渡すようにぐるっと視界を一回転させた。

別に人ごみの量を確認しようってわけでもなく、ロータリーを囲む建物を確認しようだなんておもっちゃいない。ましてや、『機関』の連中がいなかどうか確認したわけでもなかった。

一つの間が俺を取り巻いていた。

ロータリーに入った途端、俺だけが感じられる違和感。

それは、俺が初めて閉鎖空間が『ここにある。』と感じた時と同じ感覚だった。目で見ても何も無い、しかし第六感のようなもので、『何かがある』と確信している。そんな感じ。

だが、だが俺は同時にこれが『閉鎖空間』ではないと確信していた。なぜだかわからないが、した。

それがまた違和感となつて俺を襲った。なんだ、これは。

そして、閉鎖空間とは違うところがある一つ。

入り口が、さっぱり分からなかった。

しかし、何かここにあるという感覚は、異常に俺の六感を刺激してやまなかった。

「どーしたい？しずくんさ？スナイパーでも潜んでたのかいつ？」

俺の前で、人ごみをかき分ける役目をしていた立花さんが。俺の拳動に気が付いて声をかけてきた。

後ろの吉野も少し不審そうな目で見ていた、俺は立花さんに向き直りながら。

「…いえ、なんでもないです……」

と心にも無いことを言った。

立花さんは、歩みを止めないながらもまっすぐ俺を見つめた。

そして、数瞬の間があり。

「ふうん、そうかい」

と、なぜか意味深に微笑んだ。

思えば、この時から何かおかしかった。

そつえば俺はこの時、人ごみにまったく流されることが無かった。

立花さんが先導していたというのもあるのだろうが、それ以上に、なぜか人ごみの中を冷静に進めたということがあった。

何が原因でそうだったのか、それはさっぱりわからないのだが。

そもそもその時はその理由を究明しようだなんて思う暇も無かった。

「おや、お出迎えとは、気前がいいねえ」

人だかりがすこしまばらになった時、立花さんのその一言で、俺は妙な空間の感じとか、人ごみをかき分けられた理由とか、そういうのをまとめて置いておかざるを得なくなった。

立花さんが進もうとする先、見事に人が避けて行き。まるで海が割れたように出来た道の先、俺たちがその対岸へ進むのを待っているような、怪しいくらいに黒塗りの車の側に立つ男女の組を見つけたからだった。

何だろつな、超能力者でも超人でも、使う車は黒塗りなのな。

と、そんなどうでもいい事を考えながら。俺は待っている男女の片方が古泉であることを確認した。もう片方は、その辺のキャリアウーマンをひっつかまえてきました、と言った感じの女性だった。

女性物ではあるが、やはり黒のスーツで決めており、しかしその顔は意外にも柔和なように見えた。そして何より、結構な美人だ。

どうやらお互いの存在に気づいたのはこちらが若干早かったらしい。柔和に見えた女性の表情は、こちらにちらと視線を向けた途端、きりりと引き締まった。

うつむ、この人もきつと鶴屋さんと同じで、笑顔が魅力的な人だと思っただけだなあ。残念。

とまた俺の思考はどうでもいい方向に飛んで行った。おかしいな、さつきから考えがあっちこっちに飛んでく。

「……『立花さん』、ですか？」

「ほうよ、いかにもお」

警戒したようなその女性の声に、だらけきつたとしか思えない声で肯定する立花さん。お互いの距離は3メートルくらい離れており、普通に話をするというにはあまりに離れた距離からのやりとりであった。

つまりそれだけ俺たちを敵視してるってことだが、俺らはそんなに物騒に見えるのだろうか？

まあ確かに、立花さんに関して是否定しないし、吉野にいたって是否定する要素も見当たらないが……。

「森さん、後ろの背の高い男性が、虎野さんです」

唐突に俺の名前が呼ばれる。普段苗字で呼ばれる機会が少ないので、気づくのにも多少の時間を要したが。

俺の名前を呼んだのは古泉だった。俺が視線を向けると、どこか困ったように微笑んだ。おっ、今の演技はうまかったぜ。

古泉の発言が正しければ、どうも黒スーツの女性は森さんとおっしゃるらしい。

ちなみに古泉はこれでもかというくらいカジュアルな格好だった。ローカルなファッション雑誌からそのまま出てきました見たいな格好で決めている。いや、様になってはいるけど、その森さんとの服装の兼ね合いとか気にしなかったのかおまえは。

「それで、後ろの方は…？」

古泉が、本来ここに来るはずの無かった人影に視線を合わせ、見知らぬ人物だとわかった途端、俺に紹介を求めるような視線を送ってきた。

俺はわずかに肩をすくめ、その視線に応じてやることにした。その視線すら芝居がかっているのが相変わらず気に食わなかったのだ。

「こっちの黒いのは、吉野、って名前だ」

「ちよつと、黒いのって何よ」

「うるせーな、間違つてねえだろ」

「あーはいはい、二人とも、また始める気かい？」

対古泉の芝居くささで既にいらいらしていた俺は、ましてや吉野の紹介を丁寧にする気になるはずもなく、至極適当にした。当然それに吉野が噛み付いたところで、立花さんが諭しにかかってくる。そうだ、ひとまず今はやり合ってる時じゃない。

「なるほど…『立花さん』に、吉野さん、ですか…」

森さん、というらしい女性が、目を細めながらそうつぶやいた。確認するように復唱していただけかもしれないが、なんだか俺は違和感を覚えた。

この間の鶴屋さんの一件で俺も学習したのかもしれない。

俺は違和感の正体にあっさりと気づいた。古泉の所作に気がいつていたせいではわからなかったが、そういえば森さんの方は、吉野を見ても別に驚いた様子を見せていなかったことに気が付いた。古泉から、（俺が前日うっかりしゃべってしまった、『話し合い』へ参加する顔ぶれの）話を聞いていれば、吉野は彼らにとって、『訪れるはずの無かった予想外の人物』のはずだ。

それなのに、少しも動じた様子も無い。

ハッタリの可能性もあったが、俺はそうだと思わなかった。直感だ、ああそうさ、所詮直感だとも。

だかこの世には、時として、直感ほど頼りになる感覚もない。と

いう時があるのさ。

この時頭のうしろで軽く引かかったかのような違和感は、この後具体的な形を帯びて現れることになった。

だが、一ついえることがあった。

どうやら、古泉も、俺も、大して変わらないらしい。という一つの安堵のようなもの。

俺が『機関』の連中をほとんど知らないのと同じように、古泉も吉野のことを知らなかった。

結局のところ、俺もお前も下っ端なんだな。と、なんとなく同情的な視線を送ってやる、あいつの方は特に反応を見せなかったが、その事実俺の心を少しだけ軽くした。

まあ、それだけの事と言えば、それだけのことなのだが。

「自己紹介が遅れましたね、私、今回の会合で『機関』側の代表を務めさせていただきます。森 園生、と申します」

うつすらとした、しかし形式的ともとれる笑みを浮かべながら森さんは頭を下げた。

「もう見知っているとは思いますが、こちらは古泉、あなた方との面識があるのは古泉しかいませんので、今回の会合に同席させていただきますが、どうか」

立花さんに確認をとるような目線を送り、森さんはそう言った。

「うんにゃ、別に良いよ。こっちもよくわからんの二人連れてるし」

立花さんがしれつと言った。

ってちよつと待って下さいよ、それじゃ俺までよくわからんの扱いですか。別に俺は来なくなかったのに。

そう思っ立花さんを見たが、当の立花さんは森さんを注視していて横にいた俺になど目もくれないし、ちらと後ろを見て吉野と視線がぶつかったが、お互い無言で睨み合っただけで、何も言わなかった。なんだかすぐ生産性の無い行動をした気分だ。

「それでは、場所を移動しましょうか？そちらでどこか用意があ

りますか？」

いんや、と立花さんは首を横に振った。

「でしたら、その喫茶店にでも入りましようか。あまり、堅苦しいところはお嫌いでしょう？」

そう言つて森さんは、駅前すぐそこにある喫茶店を指差した。

何の事は無い、普通の喫茶店で、普通にお客が入っていて、普通に営業している店だった。

外から見ると、どこまでも普通であつた。

いや中に入つても普通だと思うけど。

しかし仮にも超能力者機関と超人集団との会合が、まったく普通のところでいいのかよ。もつとこう、秘密の場所みたいな、誰にもわからなくてやるのが普通じゃないのか。とか思つて立花さんを見たが。

「おういいねえ、とりあえず腰を落ち着けようかね」

とか言つて、「では」と一行を扇動して喫茶店へ向かつた森さんへ、躊躇することなくついて行つた。

いや、いいのかよ！とつっこみたかつたが、いろいろと他人の目があつたのですんでところで思いとどまつた。

いや、しかし、なんというか。

俺は、いろいろ言いたい気分の口を一文字に縛り。立花さんに続いて喫茶店へ向かつた。

緊張感があるんだかないんだか、さっぱりわからない状態に、俺はもうどうすりゃいいのか訳がわからなかつた。

「あんた何してんの、まぬけ面してるわよ」

ふいに俺の隣へ来た吉野が、そんな事を言つた。

おまえさんは、人が苦惱してる姿をまぬけ面と言いのたまうか。

俺は吉野に何も言い返さず。相変わらずミステリアスな雰囲気を漂わせる立花さんの後ろ姿を見つめて、ただとぼとぼ歩いていた。

まず最初にはつきり言っておこう。喫茶店はこれでもかと言うほど普通だった。

頭に、チェーン店っぽくない感じで、別段客が入りまくっているというわけでもないが、潰れかけていると言う感じでも無く。それなりに常連がいそうで、かつそこそこ良い雰囲気のカフェを思い浮かべて欲しい。

オーケー、それで大体俺達が今居る空間は大体あってるはずだ。

その四人用テーブルに、もうひとつ椅子をどっかから持ってきて、無理やり五人席にした感じ。それが今の俺達の状態。

本来二つ椅子の入る所に、森さんと古泉は悠々と腰かけ。反対側にいる俺たちは、二人席のところに無理矢理三つ席を入れ、森さんと相對する形で立花さん、間に俺、そして端に吉野。とつめつめでなんとか向き合っていた。

そしてスペースが狭いので、吉野と俺の体が時々ぶつかり、そのたび吉野が舌打ちした。いやお前、本当に何しに来た。

俺たちは適当に注文を伺いに来た店員に適当に注文した。『機関』側がなにを頼んだかよく聞いてなかったが。立花さんがサングラス越しの無表情で、「オレンジジュース」と言ったのははつきり聞きとった。それに森さんと古泉が不覚にもすこし驚いたような表情をしたのを俺は見逃さなかった。まあ、それが普通の反応だ。ちなみに俺は適当に「紅茶、暖かいのストレートで」とか頼んだ。いや、こついうとこであんまり飲んだこと無いからさ。

そしてそれぞれが頼んだ飲み物が来てから、話は何のきっかけも見出すことなく唐突に始まった。

「それでは、始めましょうか」

森さんが、まず切り出した。

腕を組みながら、さっき来たオレンジジュースの明るい黄色を見つめていた立花さんは、わずかに顔を上げ。森さんへ視線を移した

ように見えた。

「まずは、こちらの考えから。とりあえず言わせていただきます」
誰も何も、遮らなかった。

「第一に、我々『機関』はあなたがたと結託もしくは協力する意志は、一切ありません」

冷たく。俺たちの間に言葉が染みわたった。

その考えを改めて計る必要もない。言われるとは思っていた。
しかし、最初に言うか。という意外性を俺は感じていた。

「我々の要求は、あなた方が即『彼女』 もとい、涼宮ハルヒ。
より、一切の干渉をしないと約束し、同時に、我々『機関』に対する妨害行為の数々を、停止するように求めます」

滔々と、そうのたまった。

カタリ、と俺の右手で音が鳴った。

音の発信源は、吉野であつた。

鋭い視線を森さんへ向けながら、何か言いたそうに唇を震わせている。

俺はそんな吉野を見ながら、何か不吉な予感がするのを抑え。森さんが次に放つ言葉を待った。

「現時点でのあなたがたの行為は無駄です、あなた方が『彼女』へ干渉することは事実上不可能であり。あなた方が『彼女』へ干渉する権利は無い」

森さんは、一気にそう述べた後。一息置いてから。

「端的に言えば、あなたがたは邪魔なんです。世界を、『彼女』を守ろうとする全ての組織にとって、です」

しん、と沈黙が横たわった。

誰もが、森さんの発した言葉を最後に何もしやべろうとしなかった。

だが誰もがその言葉の意味を理解していた。

理解していた。全員が、理解の仕方は違ったが。

俺は、重い沈黙の中。素早く視線を走らせ、全体の様子を把握す

ることに努めた。

森さんは、言うべき事は言ったという表情で座っている。古泉はいつも通りだ、むしろ変化などあっても気にするか。立花さんは、相変わらず腕を組んだ姿勢で固まっていた。その漆黒のサングラスの下がなにを見ているのか、想像することはできなかったが。その口元がすこし動き、なにかしゃべろうとしているのを俺は認めた。立花さんが、言われっぱなしになることなく、何か言い返そうとしている。俺は多少の期待と、はたして何を言うのかという好奇心で、立花さんの口の動きに視線を注いでいた。注いでいたので。

俺はすぐ右隣にあつた、火のついた導火線に気が付く事ができなかった。

「ヘイ、ヘイ、アバズレ。好き勝手言いやがってこの野郎？ええ？」

吉野が、テーブルに体を乗り出し。最高に最悪なケンカ腰で森さんに噛みついた。

あつ、ばか。と俺は反射的に吉野を抑えようとした。しかし、それよりも吉野の口が開くのが当然早く、同時に、奴らが導火線に油を注ぐのも早かった。

「邪魔だ？無駄だ？んなもんあんたらに言われる筋合いなんざないんだよ！てめえらなんざ、大した事してない癖にあたしらにあれこれ指図すんじゃないやねえや！！」

「おい吉野、やめろ」

吉野はまだ何か言い足りないように唇をわなわなさせていたが、俺が腕を前に入れたおかげか、少し落ち着いたようだった。どうも自分たちのやっていることを『無駄』だの『邪魔』だの言われて否定されるのがそうとうに悔しいらしい。

「ここで言い争っても仕方がない。落ち着け、な？」

ここは話し合いの場だ、互いの主張がかみ合わないのは仕方が無いことと、まずは割り切らなければならない。割り切った上で、解

かりあつ点を見出さなくてはいけない。そこが、重要なのだ。

それをなんとか悟ってもらいたかったが、意外なところから注がれた油で、それは叶わなかった。

「はあ……」

心底あきれたようなため息が、吉野をとどめようとする俺の背後から聞こえた。

その発信源が、森さんだということに、俺が気が付かないはずがなかった。

「これだから、あなたがたは迷惑だと言っんですよ」
ぴくり、と吉野が動きを止めた。

それは、たいていの人間が見せる。ホントのホントに怒りの火山が大爆発する寸前に見せる、一種のくせに似たものだった。

「あんだい？アバズレ。そんなにあたしとケンカしたいのかい？」

いやに冷静な声で、吉野が言った。誰でも、浴槽からあふれそうなお湯は止めようとする。あふれる寸前の、表面張力。

「『彼女』に関わる権利も持たない癖に、実力行使の力は無駄に持っている。そんな暴力装置の様な、性質の悪い『集団』を邪魔だと思わない方が不思議と言っものですよわ」

ぶちっ

そんな音が、俺の目の前でした。ような気がした。

吉野のクセ毛が綺麗にウェーブしたのが見えた、まるでそれは、あの日の鶴屋さんのように、綺麗に。

ただ違っのは、鶴屋さんは振り上げてナイフを投げた。吉野は、腰に隠していたホルスターから、黒くて棒状の鉛玉射出機　いわゆる一つの、ピストル　を取り出した。

あの日の俺は見ていただけだった光景が、今目の前でもう一度起きている気がした。

そう思ったのと同時に、俺の体は動いていた。

やはり俺は、あの日からいろいろ学んだようだ。

俺は古泉が、吉野の行動を阻止しようと動くのを見た。どうやら

吉野に一撃を加えて、ピストルを落とそうとしているらしいと俺の目は見切った。吉野の右手を掴み、明後日の方向へ銃口を向けてやり、古泉から吉野の腕を狙って飛んで来たらしい拳も包んで止めてやった。

バシッ、という、どこか小気味のいい音が響き、「あいたたっ！」という吉野の声がそれに続いた。

俺は右手で、物騒な物を握る吉野の腕を掴んでひねり、左手で古泉の拳を受け止めていた。

吉野は「いたい！ いたいっての！ 離しなさいよ！」とか騒ぐし、古泉の方は、意外と出した拳は全力パンチだったと見えて、少し眉をひそめたのを視界の端で捉えた。へい、動きは早いが、腰が入ってないぜロメオ？

背後の森さんにまで視界は十分に行き渡らなかったが、どうやら森さんも少し驚いている様子であった。立花さんは、ひゅうつ、と本当に小さくだが、口笛を吹いた。

なんだなんだ、いつもこいつも、俺がこんな手際良く動くと思っ
てなかった、と言いたげな反応だなおい？

まあいいさ、そこは。

ガタガタと吉野がわめいていたが、喫茶店の他の客は別段俺たちを気に掛けたりもしないようだった。素早く周囲を見渡してみたが、特に吉野が黒っぽい物体を持っていることを気にした人もいなさそうで安堵する。しかしこれが無縁社会ってやつか、とも思ったりしたが。

ともかく、導火線が爆弾に引火して大爆発。会合はめちゃくちゃ。という結果だけは、避けた。

「吉野、銃をそこに置け。置くまでこの手は離さん」

俺は掴んでひねったままの吉野の腕に握られた銃を、吉野に手放すよう命令した。

「いいから早く離しなさ…」

「置け」

俺は一切の余談無しに話を進めた。

ごとり、と音がして、喫茶店のテーブルの上に、黒い棒状のそれが置かれた。

俺はそれを確認した後、古泉の手を離し、「悪かったな」と一言添えた。

立花さんは、終始無言であつたし、首から上のみを動かしているようにしか見えなかったが。一連の動作と話はしっかりと聞いていたようであつた。

その証拠に、無然とした吉野と、いくらか苦笑いの古泉、そしてやれやれとつぶやいた俺が、ひとまず座り、話し合いとしての態を取り戻した途端。

立花さんは、ゆっくりとその口を動かした。

その口調には一切の迷いが無く。

吉野が危つく銃をぶっぱなしそうになった事をまったく気にかけないというか、まったく問題ではなさそうに、というより、最初からそれがあつてから話すつもりだったみたいに話し始めた。

「さて、続けようかね。」

一言そう言い切ると。立花さんは組んでいた腕を解いて、机に乗り出した。

全員の視線が、立花さんに集まる。

立花さんは視線が集まるのを待って、口を開いた。

「あたしたちの主張を言う前に、一つ面白い話をしようかねえ。これはある組織の、偶然から生まれた、とある不始末な、そいつらにとっては笑えない。そんなお話さね」

ゆっくりとした、けだるそうな。しかし、反面その声はミステリアスな説得力に満ちていた。

その場にいる全員が、その声に魅入られているその時。立花さんが注文した大きなオレンジジュースのグラス。その中の氷が、カランと一声。大きな音を出して、動いた。

何かが変わる。

そんな、音がした。

く桜色・第四章（4）く（後書き）

せっかく第三章まで4部構成だったのに、第四章は5部構成になりそうです。ていうかもうなってます。キリ悪いですねw

次回こそは第四章クライマックス…に、なればいいなと思ってます（え

ここまで読んで下さっている方、本当にありがとうございます。

続きはまた来月末の話になりそうですが、気長に待っていただければ恐縮です。

では、

く桜色・第四章（5）く（前書き）

その5にまでもつれた第四章も、いよいよクライマックスです。
しかし例によって、いつもの蛇足感漂うぬけた展開はかわりません
のでご了承ください。
では、どうぞ。

く桜色・第四章（５）

Coloring envelopes 第四章（５）

「むかあしむかし、あるところに、一つの由緒正しき超能力者組織がありました。」

どうもしゃべるたびけだるさを加速させながら立花さんが話し始めた。

気取ったと言うよりは、嫌々子守役をさせられて、小さい子供に聞かせる気など毛頭無い昔話を読み上げているような、そんな感じの口調であった。あれ、これじゃそのまんまだな。

「その組織はすぐ立派な歴史を持ち、世界中から超能力を持つた人間を集めていて、いろんなところに影響力を持っているそれはそれは立派な組織でした。」

森さんの眉が、ぴくり、と動いた気がした。

が、話し手の立花さんは何も気にすること無く。淡々と話を続けた。

「ある日、その組織はとんでもないことに気が付いてしまいます。なんと、世界を滅ぼしてしまうかもしれない『少女』が、この世界に出現してしまったと言うのです。そして、その少女が世界を滅ぼすのを止めるためには、『そのための超能力者』を集めなければならぬ、そう彼らは『なぜか』気が付いてしまったのです。」

立花さんは、所々、それも妙な単語で語勢を強くした。

「彼らは慌てて『そのための超能力者』を集め始めました。彼らは、『そのための超能力者』が『少女』から力を与えられると『なぜか』わかっていたので、あらゆる手を尽くして捜し始めました。彼らは立派な組織ですから、幸いにも『完全な』超能力者は全員集

まりました。」

片方の眉を吊り上げた森さんに続いて、今度は古泉がすこし微笑を崩した。

吉野は相変わらずいらとした様子で、不機嫌そうにそっぽを向いていた。俺は、立花さんを注視しながらも、そうした周りの表情の変化を観察していた。

不思議なことに、すばらしくけだるい口調で話す立花さんを、誰も咎めようとはせず。また誰もさえぎろうとしなかった。

「彼らは『完全な』超能力者を全員集めたと『なぜか』わかったので、それらの人々を使つて『少女』の力の暴走を食い止めようと活動をはじめました。しかし彼らは、今度は『少女』の力が不完全であることを突き止めたのです。その上で、不完全であるが故にその『少女』が不安定であることも分かつてしまいました。」

いつの間にか、立花さんの話し方からけだるさが消えた。

どうやらそれには、俺しかり気が付いていなかったらしかった。

「『少女』が不完全である理由は、どうやら『少女』がもう一人いることが原因だったのだと彼らは気が付きました。なぜ気が付いたのかと言うと、もう一人の『少女』の暴走を止めようとしている組織から、彼らにアプローチがあつたからです。」

俺はなんとなく、本当になんとなくだが、最高に頭のいい探偵が、自分の推理を展開しているような、そんなふうに立花さんがしゃべっているような。そう演じているような、そんな感じがした。

そう思えるくらい、なんだか立花さんの口調は楽しそうだった。

「彼らはその別の組織とやりとりをする内に、彼らの知らなかった様々なことを知ります。もう一人の『少女』の方は、力はむしろ安定していて、暴走する心配も無いのだということ。今彼らが躍起になって暴走を抑えようとしている『少女』の力を、安定しているもう一人の『少女』に統合して、世界の崩壊を防ごうとする動きがあること。そして……力が不完全な『少女』がいるのだから、逆説的に『完全ではない』超能力者がいるはずであり、その存在が既に

確認されていたこと……」

立花さんは俺の方をちらと見た、見られた時は良く分からなかったが、後でそれは俺のことを言っていたのだと気が付いた。が、それは後の話。

俺はその場で無意味にうなずき、立花さんはそれを見て何を思ったのかは知らないが、にやりとして話を続けた。

「彼らはあわてました。ただでさえ不確定なことが多い中で、わからないことがさらに増えたからです。これでは、このまま『少女』の暴走を食い止めようと活動するのが正解なのかどうかさえわかりません。ですが彼らは『なぜか』、『なぜか』『少女』の暴走を食い止めようとする活動をやめず、『なぜか』もう一つの組織との話し合いを拒否し始めました。むしろ今まで自分たちがやってきたことに固執し始めたのです。」

立花さんは、殊に『なぜか』を強調してしゃべった。

「彼らがなぜそうしたのは、私にはさっぱりわかりません。」

立花さんは肩をすくめ、オーバーにわからない、というジェスチャーをした。

心なしか、それを見つめる森さんの表情がいくらか険しいような気がした。

「そうしてこう着状態になる『少女』をめぐる一連の出来事でしたが、ある日、彼らに再びやかいな事が起こります。」

そういうなり、立花さんは森さんの方をじっと見つめ出した。

森さんは、それに対して不快な表情を隠すつもりは無いらしい。厳しい目で立花さんを睨みつけていた。

立花さんの方はサングラス越しなので、睨んでいるかどうかさえわからないが、ふっと表情を緩め（たように見え）、親しげな口調でこう言い放った。

「まあ、そこからの話は現在とそう離れていない話になるので、ここはまた昔の話にもどります。」

楽しんでいる、立花さんは間違いなくこの状況を楽しんでいる。

俺がそう思い、半ばあきれて立花さんを見上げたその時。

ぱちぱちぱちぱち。

と、どこからか拍手が聞こえた。

場違いなその音の正体を、誰もが突き止めようと辺りを見回すと、おおよそ、この場で拍手をするとは思えない人物が、微笑んで手を叩いていた。

森さんが、最初俺たちと遭遇する直前に見せていた柔らかな表情で、拍手をしていた。それも、非常に上品な拍手の仕方であった。まるで、オペラを鑑賞した後にするような。

「……見事な昔話でしたわ、すっかり童心にかえったような心持ちです」

ゆっくりと拍手をやめるなり、森さんはそう言った。

その口調に、一点の淀みも無かった。

「まだ、終わってないんだけどねえ。話」

立花さんが不満をぶつける、とはいえ、その口元が緩んでいて、本気で不満には思っていないようだとよくわかった。

「残念ながら、私たちはこの貴重な時間を昔話で消化している暇はありませんので。そのお話の続きはまたの機会ということでしょうかでしょう」

形式的な答弁しかしないお役人か政治家のように森さんは言った。しかしその少し後、口調は一転して。

「…どうやら、内通者を洗い出して縛り出さなくてはいけないようですしね……あまり、もたもたはしてられませんよ」

恐ろしく重みのある声でそうおっしゃった。

対して、立花さんはその威圧感をなんとも感じないようなカラカ

ラとした笑い声を上げ。

「ありやりや一体何のお話だい？怖いねえ、くわばらくわばらっ」
なんでもないように、軽々とそう言った。

むしろその清々しさに、うらやましさを覚えたとほどだ。

森さんの方はまたもや眉一つ動かさないかと思ったら、意外にも柔らかい表情のまま、ゆっくりと口を開いた。

「それで、あなたがたの要求はなんなのでしょいか？それがまだ示されておりませんか？」

「おや、そうだったかねえ？」

この場面だけ切り取ってみれば、非常に好意的なムードの語らいに見えるのだが、前後の事情がある上に、話している内容が内容なので、その場で話を聞いている身としては非常にづらい雰囲気である。まあ、聞いている人間など、俺と古泉くらいしかないのだが。吉野はぶつぶつ文句を言っただけで、こつちの話などさっぱり聞いていないようだった。

「そうだねえ…要求、かあ…」

その一方で、立花さんはなんだか本気で腕を組んで考え始めた。まるで、要求？ないねっ。とか言い出しそうな気配に俺は多少心配になったものの、話し合いにきた時点でそのくらいは考えてあるだろうから、問題なく答えるだろうと高をくくっていた。

そして腕を組んだ状態から、口を開き。悩んでいるような様子とは裏腹な軽い口調でこう言い放った。

「んー、ないねっ」

はい、ども、くぐれてねーよ馬鹿。

「ってえええ？立花さん何言ってるんですか!？」

俺はついに隣であっけからんとしている立花さんにダイレクトつつこみを決めてしまった。

ここまで重い空気だったり、つつこみたくてもつつこめない状況だったので、ここの衝撃はもろに俺の目ごろの癖をあぶりだした。すぐさま結構な大声でつつこんでしまった事に後悔の念が先行し

そうになったが、すぐ横の吉野から「うるさいわ」と小声が聞こえたのでむしろさつきはお前の方がうるさかっただろーがと内心反撃する方が優先されて、場の空気をぶちこわしたことに對して謝罪するタイミングを失った上、非常に微妙な空気が場を支配し始めた。

ここ、笑うところ？という疑問符が、一同の頭に見え隠れしていた。ごめんなさい、もう遅いけど。

「……なにって言われてもねえ……」

俺のせいで続ける言葉を出す機会を失ったらしい立花さんは、俺に對する返答の形をとって、なんとか話をつなげようとしているようだった。ほんとごめんなさい。

「ないもんは無い、からねっ」

だが結局言っていることは何も変わっていないかった。

どうやら本気で要求が無いと言い出すらしい、と把握した森さんから『機関』サイドの表情は、一気に困惑したものになった。

まあそれもそうだ、かく言う俺も困惑している。それじゃ、ここで話し合っている意味が無い事になってしまう。一体立花さんは何を考えているのか？

森さんと古泉がこちらを解しがたい表情で見つめているのをじつと見つめながら、立花さんはサングラスの位置を多少直し、前かがみの姿勢から椅子に寄りかかり、いくらか偉そうな姿勢になった上で。

「ただ、ね」

俺もあまり聞いたことの無い、珍しい声を出した。

それは立花さんの日ごろのけだるさを、いやけだるさのみをカットしたような。

まるで、地獄からお呼びがかかるんだとしたら、これぐらいの不気味さとミステリアスさと美しさをとまなっってくるんだろっうなあと、リアルに想像できてしまうような声。

要は、非常に形容しづらい上に成り立っている絶妙に威圧感がブレンドされた声だと思ってくれれば、感覚的にはだいたいあっている。

「いいことを一つ、教えてあげるよ」

聞き様によつては、男とも女ともつかない声である。

百人中百人が、この声の感想を「不思議な」と形容する。

この世の常識を跳ね返し、全ての理を拒絶しているような。

「あたしたちはお前さんに何も求めない、何をして欲しいとも思わない」

聞いているものを不思議な世界へいざなってしまうような。

どこまでも続く回廊を歩いているような。

そこで音が反響しているような。

「ただ、あんたが本気で世界を滅ぼしたくないと思ったなら。あたしたちを頼るがいい」

最初は錯覚だと思うのに。

次第にその感覚を失っていき、前後不覚に陥る。

目の前で音源だけが見えるそれだけ、あとは何も耳に入らなくなる。

「その時は、あたしたちは全力であんたを助ける。それ以外なら、あたしたちは何をする可能性だってある。それだけのことだ」

カランッ

ハツとなった俺が目にしたのは、オレンジジュースをさもおいしそうにする立花さんだった。

ずぞぞー、と丁寧にストローで飲んでいる。

コップはテーブルにのせたまま、左手でコップをささえ、右手でストローをつまみ、順調にそのコップの中身を胃に流し込んでいた。どうも立花さんはかなりの肺活量をもっているらしい。あれよあれよとオレンジ色がなくなっていくたコップは、その透明色が全体に染み渡ったところで、カラを示すひとときわ大きいずぞぞぞー、という音を響かせていた。

オレンジジュースストロー一気飲み、ううん、字面にすると同じ文字がならんで非常に不恰好だ。

って、そうじゃない。俺はすっかりそんな立花さんの様子をじつくり観察してしまったことを反省し、周りはどういう表情をしているのか、あわててうかがった。

が、どうやらその必要はなかった。

森さんも、古泉も、吉野も、俺と類似した状態であった。

四人が四人とも、びっくりするくらいの無表情で、立花さんがジュースを飲み干す様子を観察していたようだ。

そして四人とも、疑問符が頭を強制占領しているのは火を見るよりあきらかだった。

疑問の言葉すら出てこない、何を疑問にすればいいのかさえ疑問な状態だからだ。

「……………驚きました、あなたは魔法使いか何かですか？不思議な術をお使いになるのね……」

誰も何も言わない中、空になったコップを眺めている立花さんに、

ようやく森さんがそんな問いを投げかけた。

いや、魔法使いつて。とつつこみなくなるかも知れないが、ぶっちゃけるとその時の俺たちの状態は、まさしく森さんと同じ気持ちなのだった。

一体、どんな魔法を使っただんだ？

まるで別の世界に飛ばされたような、しかし立花さんが何を言っただけにはつきり覚えているというおかしい記憶をまさぐると、いやがおうにもそう思いたくなる。

俺だって、こんな感覚は初めてだった。

「んー。知り合いに魔法使いが居る？」

透明色の中に透明の氷を閉じ込めたコップを眺めながら、立花さんはそう問い返した。

元の、けだるい口調だった。

「私の知り合いに、ですか？」

森さんがそう言うのと、立花さんは「うん。」とこともなげに言った。

「……残念ながら、魔法使いの方とは知り合ったことはありませんわ」

少し悩んだ後、森さんはそう答えた。てかまあそりゃそうだ。

「うん、あたしもいない」

再び立花さんはこともなげに言った。なんだこの問答。

透明のグラスを眺め飽きたのか、立花さんはゆっくりと俺に視線を移動させ、サングラス越しに俺を眺め出した。

なんだろう、なんかついてんのかな。と思つてあわてて自分を見回すが、特に何もないので立花さんの視線に射抜かれるがままになった。

「あたしゃね、ただ人よりもよく目が見えるだけだよ。魔法なんて使いやしない。ただ、見えちゃいけないもんまで見えてしまうくらいに目が良いだけなのさ」

俺の方を向いてそんな事いうので、俺になんか見えちゃいけない

もんでもついているのかと不安になったが、そう思った矢先に立花さんは前に、森さんの方に向き直っていた。

「…それは、人の心も見える、ということ？」

「さあ？そいつはどうだろうねえ？」

なおも何かを探ろうとしているのか、問いを続ける森さんに、立花さんは意地悪く笑って答えを濁した。

俺は一つ、明らかな変化に気がついた。

森さんが、うつむき加減で何かを考えているようなそぶりを見せていたのだ。いや、そういうと大げさかもしれないが、少なくとも、さっきよりも視線が下向きで、机の上を無目的に見つめているように見えた。これは何かの思考に集中しているわかりやすい傾向だ。

これは、俺たちと会ってから始めて見せた挙動だった。

すると俺の横から、ガタリ、と音がした。

音がしたほうを見ると、立花さんが立ち上がっているのが見えた。その表情が、うつすらと微笑んでいるのを俺は確認した。

「ただね、見られているかどうかはわかるよ。どうやらここには、のぞきはいないようだけどね。生憎あたしは耳は良くないからそっちはわからんけどねえ」

立花さんはよくわからないことを淡々と言った、今考えても、この言葉の意味はよくわからない。

「…なるほど、そうですか」

が、森さんの方はよくわかったようだった。古泉の方は、表情に変化が無いのでよくわからないが、まあわかってないだろう。

「まあ、詰まらん話はここで置いておいてと！」

立花さんは伝票を取りながら、そんなことを言い出した。

「今日のところはこの辺でお開きにしたらどうだい？しょっぱなから生産性のある話なんて出来そうにもないからねえ。お互い顔見せたってことで、ここから先は次回につなげるってのはどうかなっ？」

つまるところ、立花さんは話し合いの終了を提案した。

誰にとつても「え？もう？」と言いたくなるようなタイミングだった。吉野（どうやら機嫌を直したらしい）でさえ、「え？」という顔をしていた。だってまだ、何もしていないじゃないか。そんな空気が流れ始めたその時、やはりあの人が動いた。

立花さんに続いて、森さんが立ち上がった。

「ええ、あなたの方のほうにこれ以上話をするつもりがないのなら、すぐにでも帰らせていただきますが？」

最初俺たちに会ったときのように、警戒しまくりといった感じの口調でそう言った。

「うんうん、まあ最初から根を詰めんのもよくないからねえ」
にこやかな雰囲気を漂わせながら、立花さんは森さんに近づいていった。

森さんの前に立花さんは立った。身長はどうやら同じくらいのもうだ。こちらから見ると、にらみ合っているように見えるくらい、目線の高さが同じだった。

「ま、これからよろしくってことで」

立花さんは右手を差し出した、どうやら握手を求めているらしい。

「ええ、どうぞお手柔らかに」

森さんも、多少ためらいながらも握手をし返した。

「んー、はいじゃあこれはどうでしょうか？」

「ああ、お会計でしたら、こちらが持ちましょう」

「ありやそうかい？こりゃ悪いね。じゃあこの次はうちらが持つよ」

「ええ、ではそういうことで」

森さんが、口調は固いままだったが、表情はにこやかにそう言った。

そして俺は、森さんの右手に何かの紙切れが握られているような気がした。

あれ？と思って二度見した俺だったが、次に森さんの右手を見たときには紙切れの影さえもなかった。普通に右手があるのみであっ

た。

気のせいだった、と思うことにしたが。なんだか不気味な気がして、この記憶はしばらく俺の頭の中に残った。

まあ、この記憶を残しておいてわかったことなんて、立花さんがどうやらその辺のマジシャンよりもうまくマジックをやるらしいということだけなのだったが。

それもまた、後の話だ。

考えてみると、俺はどこまでいっても未熟者で、その上勉強不足もいいところだった。

勉強不足というのは、何も学校の勉強が、じゃないぜ？

人はそれを漠然とした言葉で「社会勉強」と呼ぶ、ある分野をかける人は「インテリジェンス」とかとも言うらしい。よく知らんけど、近藤が訳知り顔で言ってた。

まあそんな言葉のバリエーションだなんて正直どうでもいい。

大事なことは、

とにかくあらゆることを俺は知らなすぎた、ということなのだ。

いや、知ろうとしていなかった。

俺はこの時立花さんの昔話もどきを聞いても、なんとも感じるところが無かった。

あの話が俺に直接関係のある話ととも思えなかった。

直接どころではなく、俺に関係した話だったのだ。むしろ、あの中には俺の存在について丸ごと言及しているといっても過言ではなかった。

それを本当の本当に思い知るのはずっと先になる。

そしてそれは、俺がひどく後悔をした後に、ようやく思い知るの

だ。

この時は『機関』でさえも、俺の存在について大して気にかけていなかった。

気にしていないままだったなら、どうなったのだろうと考える時がある。

それはそれで未恐ろしいことなのだ。

この会合を境に、少しずつ俺の周りが変化していった。今まで霧のように実態のつかめない変化だったものが、目に見えて変わってきたのだ。降っているかどうか分からない小雨も、雪になれば降っているかどうかはずっとわかりやすくなる。

全ては立花さんが変えたのである。そしてこれだけは言える、あの人は本当にすごい人だ。

俺が何であるのか、どうすべきなのか、あの人は最初からわかっていたんだ。

俺はたまに考える事がある。

どうして立花さんはいつもサングラスをしていたのかと。

あれは、その下の表情を隠していたんじゃないかと俺は思う。

見えないものまで見えるから、会う人会う人の進む先にある苦しみや、喜びまで知ってしまうのでないのだろうか。

もっと言えば、運命のようなものが見えていたのかもしれない。

今考えても馬鹿馬鹿しい話だ。本人だってそんなことが見えるだなんて言ったことはない。

でも。

なんとなく、あのグラスの下の目は、泣いていたような。

そんな気が、するのだった。

もちろん確証なんてものはないのだが。ただ、

俺は特別目が見えるわけじゃないが。

勘は意外と当たるんだ。

それだけは言っておく。

く桜色・第四章（5）く（後書き）

第四章が終了しました。

非常に後味の悪い終わり方になっていますし、結局話し合いで何やったの？って話になりそうなおいがぶんぶんしてますが、何も途中でアイデアが尽きたから話し合いの描写が中途半端なわけではありません（笑）

実は森さんは初登場時まで設定がよく決まっていなかったの、なんだか途中、違和感があったりするかもしれませんが…げふんげふん。

何がなんだろうと、この第四章は重要なターニングポイントです。どの辺が重要かは、読んでいただいて、なんだかここ重要そうだなあと思う所があったらもうすでにそこが重要です。

要は、いろんな所が重要だと言うことです。

何の答にもなっていない上に、何意味不明なこと言ってるんだって話ですが、そこはもう、そうとしか言いようの無いという言い訳で語彙力なさを露呈している作者をしかってくださいとしか言いようがないです（笑）

次回から第五章。第四章の中盤から忘れ去っていたことに、いよいよ踏み込んでいくのがメインの内容になるとわれます。

更新はまたもや来月末になりそうですが。ここまで読んでくださっている方々はどうか気長に待っていただければ幸いです…。

では、また来月。

く桜色・第五章（１）く（前書き）

第五章突入です。実は四月中に原稿はできてたんですが、諸事情あって上げる事が出来ませんでした。

今月はさらに書けるかどうか分かりませんが、とにかくにも新章突入。嵐の前の静けさな日常風景です。どうぞ。

く桜色・第五章（１）く

Coloring envelopes く桜色・第五章く

おやつさんに言わせると、この日本って国は本当に安全らしい。
どという意味で安全か、というと、もちろん治安がいいという意味で、である。

まず、住民が普通に銃を持っているということがここではないそうだ。それどころか武器を携帯している人間のほうがこの国では少ないって言うのだから驚きだ。いざって時どうするんだろう。

だがここではそもそもいざって時が希少である。警察がそこらじゅうにいるわけでも無いのに、俺はこの国に来てから暴力沙汰の事件を見たことが無かった（スリらしき窃盗は何件か見た）。

だからこの国の人は、得物の所在よりもむしろ己が財布の安否を心配する。本当に命を守る必要の無い国である。まあ、ローマとかだと両方心配しなきゃなんだけどさ。

この国に来てもう一年半とちよい。本当にいい国だと思う。

まあそれは、俺が財布の所在よりも得物の所在を気にする人間だから思うのかもしれないが。

そしてそれでも俺は、今日もベルトの裏にナイフを仕込んで何食わぬ顔で登校していた。

何食わぬ顔というのは別に意識してつくろっているわけではなく、俺はこの手の得物を仕込むのが普通なので、普通の顔をしているだけである。

何も、この国の治安の良さを信用できないから持っているわけ

はない、とあらかじめ言っておく。

俺が暮らしていた所では、これくらいの用意をしておくのが普通で、俺もそのスタイルになれているのだ。それだけのことで、それ以上でも、以下でもない。

そんなことを考えながら、北高名物の長くてそこそこ急な坂を上っていた。

週明け、ブルーマンデーの登校となれば、この坂がまずネックになるのは北高生としては仕方のないことである。かくして俺も、数日ぶりのブレザーを汗で滲ませながら登校しているところであった。春もそろそろ終わりかなと、ちらと思えてくるような太陽光線が降り注ぐ朝だった。梅雨が来る前に夏がくるんじゃないか、とか言っていた中田の言葉も、今なら納得できるような気がする。それくらいに、この日の太陽は結構な熱線を送ってきていた。坂登りで自然と体が温まるから、この日の太陽熱線は余剰熱にかなりえない。結果、それは体外に汗という結果を伴って出てくる、要は「太陽ちよっと自重しろ」と言いたいわけである。そういう日で、そういう朝だったと言うことだ。

それだけの朝、だったはず、であった。

地道に坂を制覇していく俺の後ろから、ぽんぽんと背中を叩いた人物がいた。

俺が登校時に会うのはたいてい中田で、中田は首に手を回して暑苦しく寄りかかってくるか、背中をバーンと結構強めに叩いてくるので、ぽんぽんと優しく背中を叩いてくる人物が今ひとつひっつからなかった。

だから振り向いた俺は朝っぱらから驚愕した。

背後にいたのは、にこりと薄い笑みを浮かべた鶴屋さんだった。

いつもの豪快な笑みとはまた一味違った鶴屋さんの姿がそこにあった。俺は久方ぶりに鶴屋さんが目の前にいる光景を目にし、一瞬

夢かとも思ったが、どうやら現実らしいと思い直し、しかしいつもの鶴屋さんの様子でないことに一抹の不安を覚えながら、それも当然だと思ふ気持ちも相まって、結局なんと言つていいかわからず、こついうときに便利な定型句を用いるしかなかった。

「…おはようございます、鶴屋さん」「やつ、おつはよー」

驚いたことに、定型句を発するタイミングは二人同時だった。

路上に、無駄なあいさつの唱和がもたらされて、一瞬二人とも黙る。

直後、鶴屋さんは笑った。俺も、笑った。

鶴屋さんのそれはいつもの豪快な笑いには程遠かったが、あの時からしてみれば一番の笑顔だった。

「なはははっ！何コレあたしたち息ぴったりだねっ、漫才コンビでも組むによる？あっはははは！」

鶴屋さんは自分のひざをばん叩きながら、さも愉快的なものを見たと言つた感じで笑つていた。

俺もつられて笑いながら、言つた。

「コンビ組むしたら、どっちがボケでツッコミなんですか」

「えー、んー。あたし『なんでやねーん！』つてやりたいからツッコミかなっ」

「え、俺ボケなんですか？」

「にやはは、なんでやねーん！」

「いやなんでそこでつつこむんですか！別にボケて無いでしょ！」

鶴屋さんが俺の肩につつこみを入れた腕を払いのけながら、俺が逆につつこんだ。

その様子をにたにたと見ながら、鶴屋さんはなぜか誇らしそうに言つた。

「うん、そのつつこみのキレがあればいけるねっ」

なんかデジャヴ。

あはははっ、と再び明るく笑う鶴屋さんを見て、俺もまたつられて笑つた。

なんだ、普通じゃないか。と、本当にちらとそう思った。

あの日あの時のことは、まるで忘れてしまったかのようにだった。しかし、この時の二人だけを見れば、本当に忘れてしまったように見えるが。俺はこの時もあの時のことを忘れてなんてしなかった。たぶんそれは鶴屋さんも同じだと思う。ただここで明るく話しているのは、普段から必要以上にいがみ合う必要が無いだけで、早い話が、普通の間係を取り繕っていると言って過言でなかった。

だからこの問答は、表面の好意的な印象に反比例して、悲しいものだった。

そう思うと、どんなに楽しく話していても、敵同士なのだという意識が頭を離れない。ベルト裏の仕込みナイフがすられていないかを確認してしまう程度には、俺もあの時の記憶が刷り込まれている。改めて言おう、俺はどんな気持ちで鶴屋さんがあんなことをしたのか、これっぽっちもわからない。いや、わからなかった。わかっていかなかった。

だが俺は考えた、では、鶴屋さんは？

鶴屋さんは俺がどういう気持ちであの行動を受け取ったと思ったのだろう？

俺が彼女の考えを理解しようとしていないのと同じように、彼女も起こした出来事のことばかりに目がいつて、俺が何を考え何に衝撃を受けたのか。理解していないのではないか？

少なくとも、俺は考えた。

それが人にどんな影響を与えるか、冷徹に人的損失を考えるだけで人に向かってナイフを投げれる人間なんて、そんなもんだの殺人マシーンくらいだ。あのときには彼女なりの激情があり、葛藤があり、もしかすると情けがあつたかもしれないのだ。

なら俺にはそれを知る義務がある。

いや、俺は知らなくてはいけない。世界一彼女のことが知りたいと思うのは、俺だという自負があるから。

たとえば彼女が、あの時俺を殺すつもりだったと言ったとしても、

俺はその事実を受け止めよう。それでも知りたい、と思う。

敵同士なんてそんなもん関係ない、もっと違うところで理解したい。

そこで俺は、ふと一年前のある記憶を掘り起こした。

自分ではとうに忘れたと思っていた、思い出してもセピア色を帯びたような、そんな色しか出ない記憶。でもそこには、俺が忘れたいや彼女も忘れてしまったなにかがあった。

ああ、そうだ。

あれは一年の時だった。まだ桜の残る季節に、初めて誰かと話したあの日。

あの時見た豪快な笑いは、俺が人生で見た中でいまだにナンバーワンの笑顔だ。

全ての不安を吹っ飛ばすようできて、それでもその人が抱えているものをまとめて包容してしまうような、優しくて何よりも豪快な笑み。

敵味方なんて、関係ない。そんなもんはこれっぽっちも無いところで俺たちは会ったはずだったんだ。

逆に問おう。

その時から、何が変わったんだ？

何が変わったと言うのだ。

今までと同じでいけない理由がどこにあるのだ。

『機関』？『世界を滅ぼしてしまうかもしれない少女』？『リスト』？それがどうした。

そんなもんは全て些細でこの場に限ってはどうでもいい。

問題はそんなもんに揺るがされて、それを指くわえてみていいのかと言うことだ。

それに否と答えるのなら。俺は相手にもそれを求めなければいけない。

それで相手が嫌だと言ったら、お前は敵だよそれ以上でも以下でも無いんだ今までのことは忘れよう、と言い出したなら俺もあきら

めよう。

でもそうでないのに大事な人を捨てられる程、俺は薄情で馬鹿正直なつもりは無い。

なら、確かめるしか無いだろう。

今さら相互理解だなんて奇麗事を言うつもりは無い。

そんな幻想もちよろつと持っていたが、昨日『機関』と向き合つてほとほと確信した。

そんなもんほぼ不可能だ。

だから俺は今日はつきりさせる。

『機関』との話し合いの前に、鶴屋さんへかけた電話。
まずはその答えを、確認しなくてはいけなかった。

「鶴屋さん」

「ん、なんだいつ？」

「この間の電話のこと、覚えてますか？」

俺はごく自然に話を切り出した。自分でもびっくりするくらい普通の声だった。

ひよつとすると、俺はずっと前から言葉を用意して、今か今かと言うのを心待ちにしていたのかもしれない。

「……覚えてるよ」

途端に、少し低くなった声で鶴屋さんが言ったのを俺は聞いた。

「答えは？」

「……いいよ」

「それじゃあ、放課後ですね」

「…ねえ、しずくんさ」

「はい？」

いちいち発言が言いよどむような鶴屋さんに少しひっかかりながら、俺は鶴屋さんを見た。

その表情は、快活な笑みをどこかに追いやった、不安そうな表情だった。

「それは、ここではできないのかい？」

「できません」

即答した。

すると一瞬驚いた表情を見せた後、鶴屋さんはごまかすようにやわらかい笑みを浮かべた。

「そつか…、大事な話なんだ？」

「ええ、すごく大事な話です」

「そりゃ、放課後だね」

「はい、放課後です」

意味の無い単語を繰り返しながら、鶴屋さんと俺は学校目指して歩いていった。

会話はこの辺でおわりかな、と俺が思ったときだった。

「ねえ、しずくんさ」

不意に、鶴屋さんが切り出してきた。

「しずくんはさ……」

何かを言い出そうとしているのだが、いえないような。そんな表情。

俺は鶴屋さんの言葉を待った。しかし、鶴屋さんはうつむいたまま、とうとう次の言葉をひねり出そうとはせず。

「…やっぱいいや」

彼女にしては珍しい、歯切れの悪い言い方だった。

「何ですか、気になりますよ」

「いや、いーの。しずくんは女心に疎いんだから、これくらい察しなさいなっ」

俺が苦笑いしていると、鶴屋さんはそうよくわからない言い訳をして、やはりやわらかく笑った。その表情も十分かわいくて、ずっと見ていたくなる魅力的な表情なのだが、俺にはそれが本調子の、本当の鶴屋さんの笑みでは無いことを良く知っていた。

その柔和な笑みは、見落としてしまいがちなくらい自然だが、俺にはわかるのだ、その中にあるわずかなぎこちなさを。

だから俺は、放課後を待ちきれずに言うことにした。

「鶴屋さん」

名を呼ばれ、怪訝そうにこちらを向いた彼女に。

「俺は、豪快に笑う鶴屋さんのほうが好きですよ」と。

「……………ほえ？」

ぽかんとした表情を鶴屋さんは浮かべた。

やがてその言葉の意味を噛み砕いて理解して脳髓がそれを認識したらしく。

「…なあーに言っちゃってんの！」

途端に表情を笑顔に変えながら、俺の背中に強烈な一撃をお見舞いしてくれた。

それも、教科書を詰め込んだカバンで。

一瞬呼吸できなかつたぞ。

「いったー！思い切りやらなくてもいいじゃないですか！」

「だーめだめ！女の子をたぶらかそうとしたらそれ相応の危険が伴うってことを体で理解しないとねっ！」

そういう鶴屋さんの表情は、どうも100%の笑顔とはいかなかったが。

少し前よりは、ずつといい笑顔だった。

ただ、その代償が俺の背中に深い一撃が突き刺さったので。あまり、手放して喜べたものでもなかったが。

それでも俺は、もつと鶴屋さんに笑って欲しいと思った。

それがどんな代償を払うものだとしても、見たいと思った。

それが払えるものなら、俺が払いたいと思った。

だから俺は、一縷の望みをかけてこう言った。

「鶴屋さん、放課後、待ってます」

鶴屋さんは、笑顔のまま。さっきと同じ笑顔のままだがしかし、しつかりとうなずいた。

そしてその直後。

「おーっ！？わがクラスの才色兼備カップルがケンカから和解か！？こいつあビックニユースだな！」

そして、気づくと首に腕がまわり、中田がまさしく暑苦しい振る舞いで俺に絡んできた。

中田が俺に寄りかかるようにしながら、顔を寄せてそっぴいのたまった。

「おおおん？何が違うんだ閑歩君？このやろう！いつだって得をするのはイケメンだよなそうだよな！あーあーお天道様は思いのほか非情！」

ああもう、なんだってんだ。

いつもよりもかなり強めに首を締め上げてくる中田の腕の中からちらと鶴屋さんの様子をうかがえば。この笑い上戸の女神様は、俺と中田がじゃれているのをほほえましいと言った表情で眺めていらつしやる。

仕方が無いので、実力行使で中田の腕をはらいのけ、反撃で腕をひつつかんでひねる。もちろん、友情補正で威力には修正をかけているので大丈夫だ。本気でやったら関節ごとはずせるけどさ。

腕を本来曲がらない方向に曲げているので、そりや痛かろう、俺の首締め上げた罰と思え。けっこう苦しかったんだぞ。

中田が少し洒落にならない痛みにもだえている姿を見て、そろそろいいか、あと少しくらいやっておくか、少し迷ったが、なんだか加虐精神のようなものが芽生えたのか。あと少しこのままでいいか、と思った時。

こつん、と俺の頭を小突く人がいた。

「はーい、終了っ。そんなくらいでいいんじゃないのしずくん？」

鶴屋さんだった。ええー、いいとこだったのに。と少し不満を申し立てようとしたのだが、鶴屋さんの後ろにあるお方の影を認めたのでやめておいた。

「と、虎野くん、暴力はよくないと思います…」

何を隠そう、我がミス北高、朝比奈さんだった。

北高生のみならず、このお方の前では誰もが紳士的でなければならぬとはこの世の決めたルールだ。

俺は中田の腕をぱつと離れた。

「すみません、もうしませんよ」

「あんまみくるに刺激の強いもの見せないようにねっ、この子すぐきゅってなっちゃうからさっ」

「そんな鶴屋さん、私そんなにか弱くないですよ」

「…で、俺の心配をしてくれる人は皆無なわけか？おい」

「ああ中田、まだ生きてたのか」

「おい閑歩、お前いくらなんでも本気で仕返しすることあねえだろ」

「…あー、悪い悪い。今度はもう少し弱めにやるよ」

「もうやるなよ、骨が折れるかと思っただわ」

「あと少しだったんだけどな」

「オイ、待て、何があと少しだったんだ。折れるってことか？あと少しで俺の骨折れてたってことかおい」

「はいはい、仲直りしたによる？そろそろ行こうよっ」

「今の仲直りだったんですか……？」

「ううん、みくる。男同士の友情つてのは、額縁通り受け取っちゃいけないロマンがあるのさっ。拳を交えて二人の友情はさらに深まったのさ！」

「そうなんですか、未知の世界です……」

「いや、拳交えて無いっすから。変なこと教えちゃダメでしょ」

「こまけえこたあいなんだよ、我が生涯の友中田よ」

「棒読みで言われても感慨もなにもねーぞ」

「あっはっは！まあ早く学校行こ！若いのが四人固まって道塞いでちやしょうがないしさっ」

「あーあ、あ、そうだ閑歩。いや我が生涯の友虎野」

「え、何この人ジャイアン？」

「なんでそんな反応なんだよ！つつこめよ！むしろスルーでもよかったよ！」

「にやはは、今日のしずくんはSっ気に目覚めたのかなっ？」

「ええ、若干」

「軽く肯定しやがったよ、何のためらいも無く肯定しやがったよ
コイツ」

「で、何か聞きたいことあったんじゃねえの？」

「ああそう、化学の宿題やってきたかって」

「うーあー…、嫌なこと思い出させたなお前」

「…やってないのかよ、まあ俺もだけど」

「おやおやつ？宿題忘れとは関心しないなっ」

「で、そういう鶴屋さんは？」

「あはははっ、こういうのは現場一発勝負って相場が決まってるね！」

「要は、やってないんじゃないですか」

「そうとも言っ！にやはは」

「もう、鶴屋さんまで……」

「おーっ、みくるはやってきたの？」

「はい、ちゃんとやってきましたよ」

「えらいねーっ、あ、でもやるページ間違えてきてたりとかしてないかなあ」

「何ですかその微妙な願望」

「わからないっかなあ、みくるはこの容貌でも十分にかわいいけど、ここにドジッ娘要素が加わることによって完全体になるってことがさっ」

「…いや、わかりませんけど」

「えーっ、今日のしずくんはわからずやー」

「あー、痴話げんかはじまっちゃったんで、先に行きましょうか
朝比奈さん」

「痴話げんか…ってなんですか？」

「ああいうカップルでやる、仲がいいほどケンカするあれです」

「おやおや中田君っ？あたしがいないのをいいことにみくるをエスコートしようなんざ、百年早いよっ！」

「おわあ！いつの間に背後にっ！？」

「ふっふっふっ、中国二千年の歴史もなんのその、伝統と実績の鶴屋流古武術にかかればなんのこれしきっ！」

「わー、俺が鶴屋さんになうわけないじゃないですか。降参降参」

「うむ、潔くてよろしいっ」

「で、それはいいんですけど。しゃべりながらゆっくり歩いてるせいで、そろそろ時間やばくないですか？」

「およ？あれっ、ホントだ！」

「遅刻しちやいます！」

「いや、まだ走れば間に合いますよ」

「うんにゃ、仕方が無いねっ。みんなで朝のランニングと行こう
かっ！」

「あーもう、ただでさえ暑いのに…」

「お前が俺にからむからだろ中田」

「何言つてんだ、お前が朝から鶴屋さんといちゃいちゃしてるから！」

「してねーよ！折りたいか！？今から折ってやるうか！！」

「あははは！お二人さんあたしをめぐってケンカなんてしないで
おくれっ」

「み、みなさん待つてくださいー」

「みくるーっ、しっかりついてこないと遅刻だよー。がんばれー
っ」

「は、はひいー」

鶴屋さんの笑い声、朝比奈さんのかわいらしい悲鳴、俺と中田の
怒号。

北高名物の坂道は、それらを全て日常として包容しながら、今日
もただそこにある。

やがて校庭の桜の木が、もう既に桜色を失って久しいことに気が
付く。

しかし俺は、葉桜も嫌いではないのでこれはこれで良いと思った。
どんな花だって永遠に咲くことは無いし、それは葉だって同じ事
が言える。

でも、どうせなら、長い方が良い。

みんな一緒にいれるなら、長い方がいいだろう。

ふと、遅刻しかけて駆ける足をひきずりながら、そう思ったのだ
った。

たとえそれが、仮初めの葉だったとしても。
それが俺には大事だから。

く桜色・第五章（１）く（後書き）

今回は日常風景でした。対鶴屋さんへの嵐の前の静けさ。

時系列的には、原作で言うところの憂鬱編後半のあたりです。いまごろキヨンは古泉から超能力者です云々と言いついて聞かされてるころかも知れません。

もうわかりきっていることかとは思いますが、桜色編は原作の憂鬱編とリンクしています。桜色編とわざわざ言うということは、続編も考えてあると言うフラグをたてている訳ですが、ぶっちゃけそこまで気力が続くかわからないので今のところホントにやるかどうかは不透明です（え

それはともかく、リンクしているということは、桜色編のラストはやはり憂鬱編のラストと同時進行だということです。

どのように原作の出来事がからんでくるのか、そのあたりも探りながら楽しんで頂ければと思います。

で、第五章の続きですが、今月中の更新はおそらく難しいです。あらゆる用事が重なっているため、よほど幸運が巡ってこない限りは、更新できません。待つて下さっている方については、ホントすみません。

しかし、少なくとも桜色編のラストまでは構成も定まっているので、時間ができれば必ず続編を投下できます。

どうかゆったりとお待ちいただければ幸いです。
では、またいつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307k/>

Coloring envelopes

2011年10月7日00時32分発行